針葉樹

第四號

東京商科大學
一橋山岳部

美津濃の登山靴とリックサック

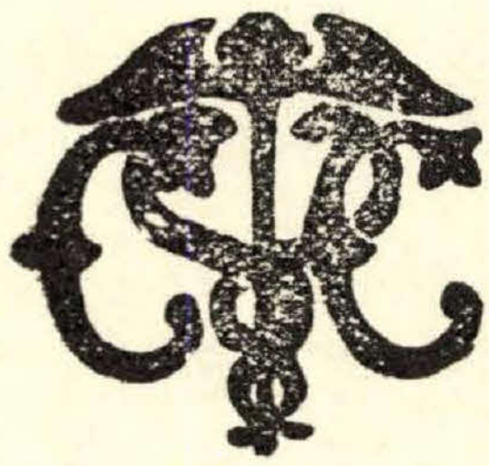
山行に最も大切な
完全無缺の登山靴
リックサックが取
揃へてございます

神田
小川町

美津濃

大阪 神戸
名古屋 京都

針　葉　樹



(第四號)

1928

針葉樹 第四號目次

山に登る心……村尾金二……一
山をめぐる見果てぬ夢……高木英二……七
雨趣……芊川稔一……一三
山岳追想……近藤恒雄……一六
私の約束……高木英二……二〇
晩春の塩見赤石縦走……磯野計藏……二四
龍爪山文珠岳……近藤恒雄……二四
尾瀬の三月……吉澤一郎……三三
大雪山から阿寒岳……手塚晴雄……三七
川俣川……金塚晴雄……三七
雨の荒川を下る……手塚晴雄……三七
小澁川に沿ひて……吹原不二雄……三七
小槍……芊川稔一……七二
横倉吟三郎……七七

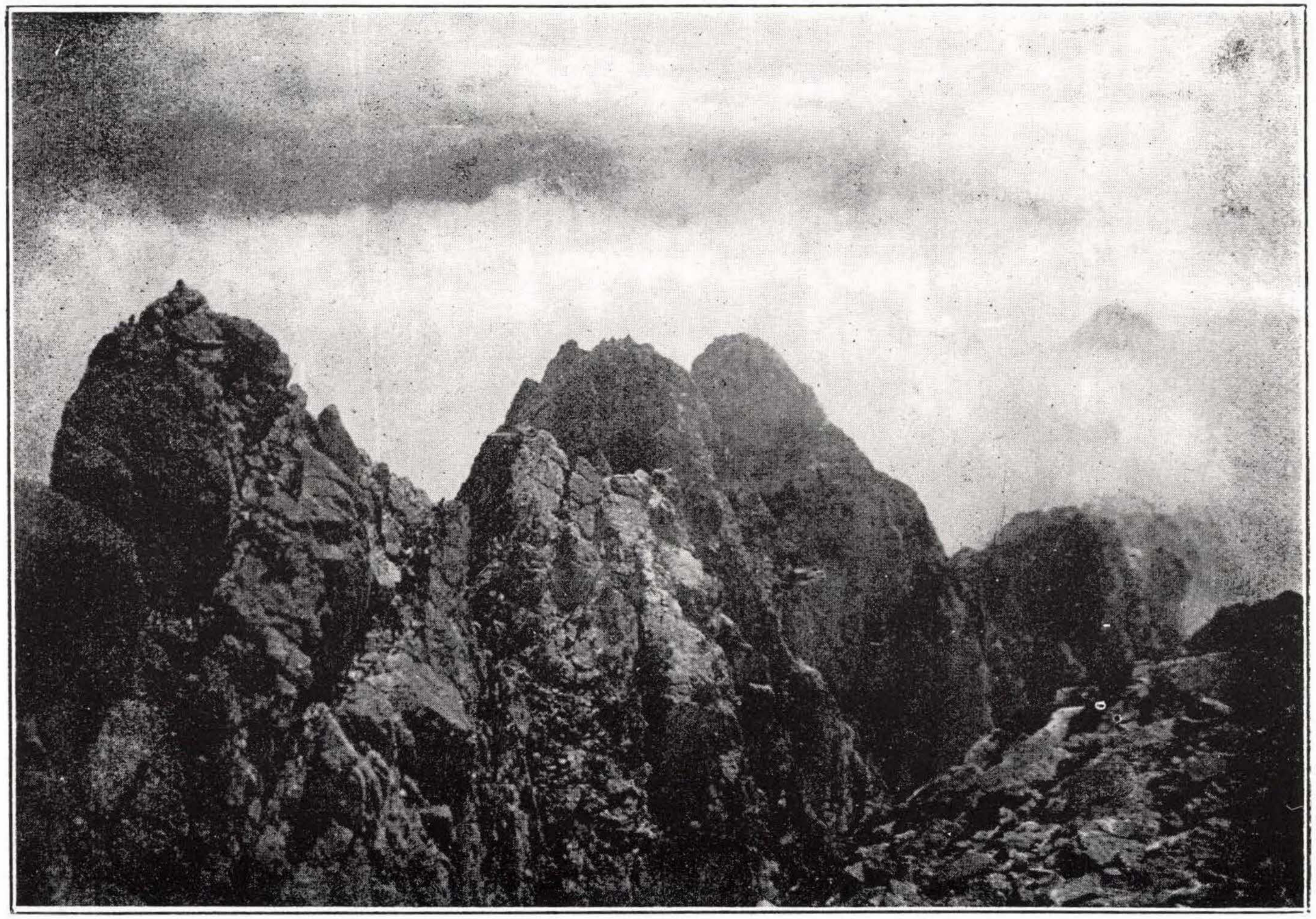
寶川遡行……中島嘉一郎…八〇
八ッ峯行……磯野計藏…八九
年報……（自昭和二年十一月　至昭和三年十一月）…九二
寫眞……一〇七
八ッ峰より源次郎尾根を望む……磯野計藏
第九峰より望める八ッ峯……宇佐美敏夫
晩春の惡澤、魚無河内及荒川岳……高木英二
景鶴山……金田一郎
小槍ルート……横倉吟三郎…七八
寶川……中島嘉一郎…八五

スケッチ、地圖



八ツ峰より源次郎尾根を望む

磯野計藏



第九峰より望める八ツ峰

宇佐美敏夫

山に登る心

村尾金二

どんな力が自分達を動かして山に登らせるのか。

何故、自分達は重い荷を背負つたり、普通の眼からは危険と思はれる様なことをしてまで山に登るのか。

山に登る心については色々考へて見た。

山が人を惹きつけるのか。山の持つ魅力。それには主觀的に違ひはあらうが、現代の人ならばなべて、山の持つ壯嚴さ、美はしさ、靜けさ、深さ、を云ふ。それ等のものは各々の山が別々に又は、同時に持つてゐるものである。だか、この山が持つそれ〴〵の特徴には、今も昔も時間を隔て〳〵の變りがあらう筈がない。これは全く山に附隨して、山その物の中から見出さるべきものであつて時の流れからは別に何等の影響を及ぼさるべきではない。

山の重々しく靜かなのは何時も變らぬ。默々として千古の姿で乞立する。

山の美はしく清らかなのは氣候の化粧はしても來る年も來る年も、白雪に秀で、紅葉に燃えて變らぬ。……とすればば山夫自体が盡未來永劫とまでは云ひ得ずとも人の世の轉變激しいものの他にあつて左右さるゝ所はないのゝ姿を見つめてゐても、登高の氣をゆるぎ動かす程の心の力は出來ない。遠い者はず、近世に興り現代へ榮えた登山の熱と云ふものも、その發達の跡には、山の明かにすることは出來ない。

のみ知り得ることが物語られる。

山自体を考へるよりも人の心に立還つて考へて見る。人の思想の時間的に見てこれは歴史的と云はれ、社會的又は客觀的と云はれてゐる。その見方で登山思想史は勿論出來る。一つの事件をとつてその當時の社會の如きでも好い、如何なる動機で如何なる過程で。そしてマツターホルンは窮められたか。如何にして人達はこれを如何考へてゐたか。これ等のことによつて、登山の中に現はれた當時の社會相もうかゞはれよう。次々に起つて來る登山の大きな事件もこの様にして說明される。

又逆に、或時代に興つた浪漫的思想とか、冒險とか探險とか云ふ氣風の流行した時代からして、登山の歴史も論ぜられる。

この登山思想の歴史的、社會的の研究は興味のあることではあるが、自分にはまだ十分にそれを述べる丈の準備も根底もない。また假令この登山思想史は述べ得られたとしても、偖てでは現在の自分は何が故に山に登るかと云ふ點に至つてハタと當惑せざるを得ない。それは少くとも或時間を經た過去の歴史は語り得るも、現代の渦の中にゐる自分が如何してその全体の思想を知るのは全く別の時點から眺められた時で現在登山思想を確實に普遍的に、把握することが出來ようか。總て思想が說かれるのは不可能な事であつて、自分がその中にあつてで近くにつきつめられてもかまわぬ）のことは知り得ても、現在する自分の歴史は過去（それは、數十年或は數年の前まのに反して又抽象的な論もなし得る。それは論理を眞向にふりかざして体系でカツチリと固められたものである。

曰く、山岳とは何ぞや、然して登山とは何ぞやと。

山が說かれる。山の雄大、壯嚴。溪の幽邃、清明。自然禮讃の聲が擧げられ叫ばれる。

自然に還れ！　自然の中で最も荘大、雄偉な山に入れ。
汚濁な人の世を離れて清浄無垢な山の懐に入れ。
かく讃美され禮拜される。
そして又、山、巖、溪、高原、雪、空、雲……がくりかへされる。
スポーツが説かれる。自由な人の心から根ざしたもの。沒我的の努力。肉体的の活動。その活動の結果に生ずる爽快な心。それがスポーツか。そしてそれがスポーツであるとして更にそれがスポーツを説きして、かく簡單
登山が説かれる。
山の美とスポーツの精神とを結びつけて登山が説かれる。
此の様にして登山は語られるが、登山はこんなに仰々しいものだらうか。
に登山の心が説き去られるものだらうか。
實際に山に登る程の人の心を考へて見たら好い。こんな論とは全然別箇な云ひ知れぬ心が動いてゐるのではなからうか。生命から登山が、今の自分達にとつては生命の奥底から、こみ上げて來る様な衝動から行はれてゐるのだらうか。また山を説きスポーツを説きして、かく簡單ら生ずる止むに止まれぬ氣持から山に登つてゐる。その生命の發現が山嶽に對して或る（と云ふより外はない）表はれをとる時が登山であると考へてゐる。登山を論じて体系づけようとすればその神秘な生命を論じなければならぬ。然るにその生命を個々にとり主觀によつて論じて行けば斷片的であり、論じて以て体系づけることは出來ない。何となれば個々の生命は變轉極まりなく、その發現も多岐。一以て通ずべき言葉がないからである。
元來生命の存在が論理の埒を外れてゐる。何が故に生きるかの問題が如何様に解釋されようと、生きると云ふ事實は嚴

として變りはない。その生命の神秘が採り得ないのに、其處から派生する色々說かれる所はあつても、それは唯知識の塊をなすのみであつて、登山の血を湧かすものは別に存在する。說いても說きれないこの生命の發現と見る登山が如何して論理の箱詰の中に窒息して居られようか。生きんとし、伸びんとするその力を空しく壓へては居られない。成生流轉が人のさだめならば、その根元の魂にも些の拘束も加へてはならない。生命は飽くまで無限を希ひ自由を求め奔放を憧れる。羈絆は除かれ、拘束は去られ、局限は失はるべきである。有限をあらはすに言葉を以て、そしてそれを一つの便りにする論理と云ふ規矩に登山の心が合ふ筈がない。登山の意義を傳へるのに强ひてこの言葉を以てすればその中の生命は、皮肉にも死いたる生命のぬけがらとなり終るであらう。

この様なことは人事百般に通じ得ることだ。生命が表はれる諸の姿は千態萬様である。神祇、釋教、戀、無常、何れもがうつりかはる人の世の相である。何故にこの様な形に現はれるかは要するに人の心の止むに止まれぬ動きから出て來るものであつて說き得らるべくもない。

宗教や藝術の三昧境、法悦、醍醐味、陶醉等の言葉の意味が心を以て心に傳へる外はない様に、登山の心も全く表現の仕様がない。

例へば宗教の中に眞の法悦境があるならば、そしてそれの根ざす所に生命の閃めきがあるならば、客觀的に如何なる眼を以てしようとも（假令阿片なりとまで云ひのめされようと）その人の主觀に立ち入れば犯し難い力に感ぜねばならぬ。然しこの生命の發現である信仰も論理的に說明されては、全く力弱い別のものとなつてしまふのである。同じ事が、その外の藝術や、人間性の泉から湧き出たものであるならば何についても云ひ得られる。

戀愛の論理的根據は知り得ずとも戀する若い人達は建全に存在し得る。その靈性と感情の流るゝまゝに、だが冷い理性の知り得る所ではない。

山を戀ひ、山に憧れ、山を敬ふ人達の心は要するにこの様なものである。だから始めに問はれて「分らない」と答へ重ねて問ひつめられて「好きだから登る」と答へられるのが一番多い。この言葉は簡單すぎて茫漠としてゐて說明にはならないとも云ひ得るし又、同時に簡單なるが故に、山を知る人達にとつては直截にその心を傳へるものだとも云ひ得られよう。假令それが論理的には何等の根據は無からうとも登山の意義はその中に生きてゐるのが點首かれる。華を拈つて微笑して悟り得るものの外は悟り得ざる境地は正しく登山の中にも有るのである。

この様に登山に於ける總てのことが、自分にとつて全く理窟を拔きにした嬉しいことばかりである。

重い荷。それは誰しも不思議に思ふ。人の一生をこれの苦しい意味にとつた處世訓もあるが、山へ登る人達にとつてはその袋は喜びでハチ切れそうだ。それは全生活の責任を文字通り唯一人自分の双肩に荷ふ姿ではないか。一步の誤りも、一瞬の懈怠も皆自分の身に振りかゝつて來ること知る時、誰も生きる爲の責任はほんとに自分の中にあることを知る。

額の汗。日にやけた顏。ほこりにまみれ。焚火に燻される。その外面の汚なさも何も登高の心を妨げない。これがために却て、自由になり得る身の幸をうたふ。儀禮や、道德やあらゆる對人間のことは打ち忘れて自由に山と語り睦み合つてゐれば好いのだ。この自由は、朗らかにして大きい。「誰に見しよとて紅鉄漿つけよ」この言葉を逆に、別に見せる爲もなければ見られる爲もない。見せる主は山ばかりである。それには清澄な敬虔な心だけで十分なのだから。

暴風雨。街の人達は恐れる。その時山の人は、小舍であれ、テントであれ、或は岩の陰であれ、靜かな眼を擧げてそれを見る。不安も焦燥もなく、過ぎ行く時のまゝにその成行を見てゐる。こんな自然に（從つて大きな運命と云ふものに對する）從順な考へ方は荒れ狂ふ風雨の中から一番よく引き出される。それ丈けに如何ともし難いことに對する不用な煩ひから解放されてゐるわけである。

かく自分達の心は普通な眼から見れば不思議な位山に登る總てのことが、或る喜びに結びつけられてゐる。苦しみを苦

みとせず汚れを汚れとしない全く理論無しの登山なのだ。

（冗漫な筆をこれ以上續けることは出來ない。）自分達は默つて山に登らう。この力を語る言葉はこの世の何處を探したつてないのだから。

まゝに山に登らう。

否！唯一つ！

それは山が語つてくれる。

清い虔しやかな心で默つて山に對する時、山は總てを語つてくれる。

心の耳を傾けてこの言葉に聞き入るだけで好いのだ。

山をめぐる見果てぬ夢

高木一英

山のあなたの空遠く、

私達の憧憬は何時も、遠く、高く、空の彼方へと延びて行く。

それは果てなき彼方への思慕であり、無限への愛慕である。あゝかくしてこそ、空遠き山の彼方にこそ、「幸」住む國の夢が結ばれる。

山は私達にとつて、なつかしい思ひ出の國土であり、美しい幻の贈主である。

私達の辿る道、それは夢の國への小徑ではなかつたらうか。

其處には、一切が、より新な光の下に、照らし出され、よみがへつてくる魔法の國がある。

其處では、歩み行く、一歩一歩が、より新らしい他の世界の轉回を意味する果てしのない連續がある。

其處には、青葉越しに見える、湖の青さがあり。

共處には、結梗色に煙る遠山の仄かなるかげが見え。

又秋の日に輝く黄金の森、七彩の影ゆらぐ流れがある。重く垂れた梢から、音もなく、はふり落ちる雪片をキララカに

照し出す光がある。

あゝ、

私は、何時かの日の男体を思ひ、中禪寺を思ふ。

其處には、文字通りに、うつとりと、山を、丘を、湖畔を、埋める青葉。

青葉があつた。

私には、赤石を、彼方に眺めながら、暮らした大河原の半日が忘さられない。

人の言葉を、美しと聽く、旅心の常であらうか。

私はあの日の宿のおばさんをなつかしく思ひ、小學校の校長さんの童顔を忘れない。

あゝ、あの山村の夕暮れの靜けさが、泌々と、私の胸を打つ。

山脈の、峯の心の靜けさ！

私は、間の岳の小屋に暮れ行く、夏の陽を思ふ。

あの紅の夕映、その中に立つ私達の影、

それが紫紺になり、

音もなくせまつてくる夕闇、

そうして夜、

遠くに〳〵に、見えた甲府の灯の淡い寂しさ。

私が思ひ出すのは、あの時のおどけた上等兵の人夫の姿。
それから、何處かの小屋の中、赤々と燃える白樺を中に、
あんなに大勢の人達の注意の焦點が他愛もなく、只つた一つの銀貨に集められて行く時、私達は
よめき、さわぎ、そうして喜びの聲が、強く高く、山々の靜寂の中に、こだました。
旅故に、山故に、美しく結ばれて、融けて流れる人の情の美しさ。
誰かが云つた。山で結ばれた友情は山の如くに續くんだつて、あゝ。

雨、山に降る雨、その雨、兩側に分れて坐つた私達、夢中になつ
私達は、ぬれ、涙ぐむ。それは悲しい憂ひの訪れ。
ひたすらに、その晴れん事を願ひ、
灰色に煙る山々を、淋しく、やるせなく、ながめやる。
あゝ、照々坊主。

私は覺えてゐる。冷池の露營地の枯木に結ばれたお前の
何處かの宿の庭の小枝に、私が結んだお前。
穗高の小屋でビツケルに結ばれたお前。
あゝ私はお前の歌を歌ひ、お前の詩を作り、そうして、

高い鋭い山の頂、私は、輝く岩と雪との嵬高な調和と威
嚴とに、敬高さと尊さを思ふ。

其處では、私達の心は引締められ高められる。
私は又、なだらかな草山を思ふ。
山上の花の草原を思ふ。
私は伊吹を思ふ。私は八ツケ嶽の裾野を思ふ。赤城を思ふ。
すんなりとした山の傾斜。
咲き匂つてゐるかぎりもない草の群れ。
それは、かぎりもない平和を與へ、やさしくなつかしく私の心を打つ。それ愛すべきもの。
其處では、私の心は、その草原に埋れ、その草の香を、その清らかさを、心行くまで自分のものにしたい願ひにふるえる。

私は未た見ぬアルプスの麓、牧場の朝のすがすがしさを思ふ。
私はロツキーを思ひ、アンデスを思ふ。

金色の陽に照つて揺れる、その綠のまぶしさに、輝く、初夏の尾瀬沼、深い笛吹川の流れを五色に染めつゝす秋の秩父を思ふ。
銀色の月影が、眞黒い木立の陰を、純白の曠野に映し出す、それは北海道の冬であらう。
あゝ私の心は、自由の翼を持つ。

私の思ひは遠く高く空の彼方を驅ける。
山を思ひ、人を思ふ。

春は馬車に乘つて、
若草燃える高原を走らう。
冬はスキーにのつて、あの高い〳〵山の頂のドームで、
あの山の頂から一直線に驅け下りよう。

只つた一度でいいから、
て見たらと思ふ。近い空から花束が降つて來たらと思ふ。
私は思ふ。戀人と只二人で山へ行つてしまひたいと。

友よ。
私にも、遂に象牙の塔を追はるべき時が來た。
かくても猶、夢むべきか。

一九二八・十・十二——

雨趣

芋川稔一

雨を稱ふ！

雨が無かつたならば、地上はどれ程其の美しさを失つてしまうであらう。併し其の月の光も、しつとりと落ちついた雨後の大地を照らす軟い月光には及ばぬ。雨に清らかさ、深さ、清らかさは雨なくしては求められぬ。月の輝きには及ばぬ。潤へる乙女の瞳を象徴する月の光の淑とやかに降る春の雨である。長いしとやかに降る春の雨なくしては考へられぬ。萌え出づる春の若緑を祝福するものは雨である。音もなく陰鬱な冬をあとに新しい春に向ふとき、一齊に目覺める地上のありとあらゆる草木の芽は、春の雨である。

常に地上の萬物を淨化し生命を附與するものは雨である。

思ひ出は、吾々の心の糧である。併し、雨のあるとき、其の思ひ出は初めて汲み盡す事の出來ぬ美しき泉となる。思ひ出は過去を美化し、淨化する。

雨をたゝふ！

三方が峰についた時、霧雨があたりをすつかり包んでしまつた。丁度五月の末であつた。北國の山には漸く春の太陽が輝き始めた頃である。頻ずりをしたくなる程に軟い落葉松のつゝましやかな新芽が、一齊に萠えだして、新しい綠が山を覆

ひ包んだばかりの頃であつた。

春の雨は軟い。霧が何時の間にか雨に變つてゐたが、吾々には何時變つたのか分らなかつた。

々を閉ぢ込めた霧の様に軟い。

い。夢の世界、幻の國土へ吾々を導く立ち込めた煙である。

熊笹の屋根道を通つて地藏峠へ着いた頃には、雨は本降りになつてゐた。本降りと云つても、

此の頃には上衣もリュックサックもしつとりと濡れてきた。赤味がかつた山路には、靴の鋲が

れてゆく。

吾々はすでに牧場の中に足を入れてゐた。

生き〳〵とした牧草につゝまれた丸味のある丘が、路を中にして左に現れ右に現れる。雨の中

去つてゆく。煙る様な春の雨は吾々の世界を狹めてしまうが、其の狹い世界は次から次へと移り

緩やかな丘の斜面を眞黒な牛が靜に歩いてゐた。

牧場の野山は余りに單調である。地上の生命とも云ふべき樹木の姿を見る事は出來ない。併し

一匹の馬が描き出されるとき、如何に凡てのものが生き生きとしてくる事であらうか。

眞黒な牛は歩みを速めもせずに、雨の中を歩いてゐる。よく見れば牛は一匹ではなかつた。雨

列をなして動いてゐる。一匹だけ離れて、獨り高く丘の頂を歩いてゐるのもあつた。黒と白の斑

跡を足早やに追つてゐるのは、生れて間もない小牛でもあらうか。

何處の丘を見ても、必ず五六匹の牛はゐる。其が皆一樣の方向にゆるやかな歩みを續けてゐる。あの牛達の毛はきつと

雨にしつとり濡れてゐる事であらう。けれども牛はそんな事にはかまはない、何處を目當てにか、雨の中から雨の中へと

消え去つてゆく。

春の雨は烈しくもならず、何時までも何時までも續いてゐた。

電車は辰野に向つて走る。幾日も幾日も降りつゞいてゐる雨の中を走つてゐる。遙に下を流れてゐる天龍川の水は恐ろしくたぎつてゐた。何時もは美しく見える木曾駒連山の殘雪が、今日は雨で少しも見えない。生き生きとした廣い葉に、雨の雫を思ふ存分受けてゐる桑の畠が、やつぎ早やに車窓をかすめてゆく。

辰野から諏訪までの中央線は、殆んど天龍川と平行して東に走つてゐる。天龍川の水はすつかり濁つてゐた。今にも堤を越して、兩側の田の漸く根を張つたばかりの稻を、押し流してしまひはせぬかと思はれる位である。製糸工場の白壁も雨の中に煙つてゐた。窓はすつかり開ぢられてゐて、なつかしさうに汽車を見送る工女達の顏も見えなかつた。

夏には珍しい雨である。シト〳〵と降りつゞく雨は仲々止みさうにもない。

諏訪湖の畔にある溫泉宿は、水に浸つてしまつたと云ふ事を上諏訪の宿で聞いた。宿の裏の窓から見える北の斜面も、南の方、南アルプスの前山も雨の中に煙つてゐる。

再び中央線に乘つて、雨の中を東に向ふ。

八ケ岳は何も見えなかつた。廣々とした裾野もすぐに雨の中に霞んでしまつてゐる。おそ咲きの待宵草が、雨の中に眞黃色な花をうなだれてゐた。雨の日にふさはしい風情である。

汽車は雨の中を走つてゆく。

日野春の邊りを走つてゐる。美しい赤松の林が、夢の樣に雨の中にかすんでゐる。きつとあの先にある釜無川も、水が增してゐる事であらう。二年前に渡つた事のある、さゝやかな釜無河原の橋が思ひ出される。もうあの橋は代へられて、

新しい橋が架けられてゐるかも知れない。此の頃には、雨が強くなつてきた。斜に走る雨の銀線はを隠してしまつた。

甲府を通過してからは餘程小降りになつてきた。左側のゆるやかな丘は、葡萄畠ですつかり覆はれてゐる。まだ時季が早やかつたので、紫の房を見る事は出來なかつたが、一面に敷かれた綠葉の絨毯は、丘から丘へとゆるやかな波をうつてゐた。

遠い信州の伊那谷からの雨は、未だに止まず降り續いてゐる、煙の樣な雨の中を。汽車は驀地に東に向つて走り續け

山岳追想

近藤恒雄

鳴呼幽久な山岳の情を知つて以來隨分歳月は過ぎた。そしてあの山の峯に、この山の澤に幾度か喜躍の涙を振つた事であらう。

其處にはあらゆる意味の緊張があり、努力があつた、其處にはあらゆる喜びにも勝つた喜びがあり、感激があつたのだ。

太陽が目を射る樣なあの眞夏、鋭い山膚を大自然の大きな法の前に溫順しく而も力强く踏みしめて、そしてやがて來る可き未知の頂に限りない執着を抱いた事もあつた。或は紅葉が彼方此方の山を染め始める頃喜びに勇んで、幾度か中央線のさゝやかな驛を踏出した事であつた。そしてそれから幾日かの涙ぐましい旅が心を知り合つた人々と共に續けられるのであつた。其處にはあらゆる色彩の交錯した鬱蒼たる森林もあつたであらうし、さゝやかな流れに川底の石を見つめて夜を迎へた事もあつた。

友の口から流れ出る歌の一つ二つ、焚火はさかつて、蠟燭の光はゆらぐ。

今日のこしかたを忍んで居るのであらうか、明日の山路を畫いて居るのであらうか、ぢつと焚火を見つめて居る友の横顏が火の燃盛る毎にカツと赤く照る。こうして山小屋の夜は靜寂の內に更けて行くのである……夜が漸く白む頃誰ともなく起き出でゝ流れにすゝぎ米をかしいで又今日の旅へと上るのである。其處には惠まれた朗かな日もあつたであらうし、朝、小屋を出てからやがて來る可き夜の泊り場迄霧の中を漂浪らひ歩いた事もあつたであらう。それにも拘らず友

も俺も嬉しさで一杯であり感謝に滿ちて居たのであつた。

滿山の紅葉音もなく治まつて霧のしづくに落葉が濡れて踏む足毎に冷やかな觸感が足先へと傳はるかと思へば、やがて登り來たつた峰の細道は吹雪く霧の流れの爲めに消へ去つてしまひ、汗に浸みたシャツがひやり〳〵と肌にさわつて寒さのため一寸の休息にも胴震ひを感ずる樣な時があつても俺達はほんとに心から滿足して其の日〳〵の旅を續けて行つたのである。

やがて紺碧の空が秋の高空を譬る時が來ると、俺達は昨日迄の天候の不運を忘れて互に祝福し合つたのだ。木枯が吹き初めるとそろ〳〵部室の空氣は霎の山への憧れと變つて行くのであつた。そして其の憧れが段々と高潮して俺達は幾度か夜明の夢に其の夢なりし事をかこつた事であらう。毛無山の頂、スウィスの尾根、野澤の峠、で幾度か雪煙をあげて雪の中にもぐつた事であらう。

又晩春の山の味を覺えた俺達は其處にも又思ひ切れぬ魅惑の峰々があつたのであつた。此の頃になると俺達の部室は山の話で持ち切り二人三人と出て行く者もあれば、又雨天をかこつてそれでも包み切れぬ喜びを顔に浮べて又部室に這入つて來る者もある。そしてどうしても山へ行かずには居られぬ友の數々は財布の底をたゝいては幾度か山から眞黒な顏をして歸つて來た事であらう。

そしてこんな氣持で溶け合つた俺達は部室の事に就いても隨分互に心配もし働きもして來たんだ。

其處には何の感情のわだかまりもなく、さらりとした部室獨特の氣持が總てを解決してくれて居るんだ。

其の部室には忘れる事の出來ない澤山の山の友達が學窓を離れて出て行つた。そして殘された俺達があの部室の空氣を最も樂しい據り所として生活を始めて早や半年以上になる。俺にはあの部室が餘りに親し過ぎるんだ。ほんとにいゝ部室なんだ。そしてあの愉快な部室から樂しそうな顏をして山へ出掛けて行くのを見ると全く俺は嬉しいんだ。

俺だつて大藏省の許す限り時間は許さなくても出掛けた。そしてまつて時々其の夢を思出しては一人悦に入るのである。

國師の頂の夜。或は鹽見澤のグリセード。阿寒の湖。西澤の釜。俺には其の夢はとても一々擧げ切れない。一々が大切な繪卷物であるのだ。

ゆくりなくも過ぎて行つた今迄の生活が限りもなく懐しい山を語ひ山を味ひ山に醉ひ、そして山の友を得たんだ。然し俺達も亦間もなく此の山の友々と別れを告げて夫れ〳〵の人生への行路を踏みしめて行かねばならぬのだ。ほんとに殘惜しい事であり哀しい事であるのだ。

山の御緣が取りもつた今迄の生活が限りもなく懐しい山の友との交りの喜びにはお別れの哀みがついて來るのは餘りにも當然の事であるのだ。然し俺達の交りは形のみの交りではないのだ、心の結びがあるのだ。ほんとに結び合つた俺達には或る意味でお別れと云ふ事はないかも知れないのだが、今迄朝に夕べに部室に家に顔を合はして語ひ合つた俺達には譬へ其の顔がお互に造作が餘り上等でない顔であつたにしても、夫れ〳〵の造作に限りもない執着があるのだ。

ほんとに部室にはまずい顔をした奴ばかりであるが、此のまずい顔を見ない日は何となく物足りないのだから全くおかしなものだ。

猫、狸、山賊に、おんぼやき、へいさがり、可愛い所では「赤ちやん」が居るかと思へば足の長い「駄鳥」も居るのだ、此年の春出て行つた奴に熊もあればペンギン鳥もバツタもトンボ、平面、安中など數々の物凄い造作の顔々がある のだ。ほんとに森羅萬象あらゆる形を表象した造作の數々を拜觀する機會がとても少くなつてしまうのだと思ふと、それが獸の形であつたり鳥類の形であつたり人間樣の顔をして居たりする處に又限りもない愛着があるのだ。

何れは來る可きいやなお別れの日迄しつかり愉快に過そうではないか。

光榮に輝く山岳の峰々に其の姿の變らされと祈りつゝ、又山いであらう、昔の山の友々と僅かなお會ひの機會を樂しむ時となつても變らなを信じつゝ限りない感慨の內に筆を擱く事にする。（三一―九―一五）

私の約束

高木二英

私は山へ行くお約束をするのが好きです
此の秋は秩父へ入らう
來る春には雪の穗高も踏もう
又來る夏こそは北海道の山々を訪ねても見よう

ある時は晴れた秋空を仰ぎながら
又ある時はキラメク星影をはてしもなく追いながら

私は何時もそうした約束を繰り返へしましたつたけ

そうした時
私は夢見てゐるのです
そうしてその美しい夢が
うつゝであるかの様な喜びに胸おどらせて居るのです

あなた方はあなた方の夢見ていらつしやる美しい夢が
眞實だつたらとお思ひになる事はありませんか

そうだつたら
空しい私の約束を
咎めないでやつて下さい

此の世の拵め故に

―一九二八・二五―

天地の
わかれし時ゆ
天の原
ふりさけ見れば
春日なる
三笠の山に
出でし月かも

阿倍仲麻呂

かむさびて
高くたふとき
駿河なる
富士の高嶺を
語りつぎ
言ひつぎ行かむ
富士の高嶺は

山邊赤人

行紀

晩春の鹽見赤石縦走

磯野計
近藤恒
藏雄

六月六日

前夜午後十時飯田町驛發、P・N・T・の見送を受る。

「無事に行つていらつしやい」「しつかり」

別れの言葉とプラットホームに何時迄もたゝづむで居た友の姿が、終夜目ざめ勝ちな夢に入る。

甲府を過ぎて富士見の高原を走る頃、紫に眠る八ッ嶽の麗姿に心は輕く躍つた。朝霧に煙る諏訪の町々の様に停車、これより伊那電車に乘換へ、天龍に沿つて高く低く、右に左に走つて行く、車中の人の物腰のカールを見た。白子も、何んとなく明るく流石に富有なる伊那の谷なるを思はせる。赤穗を出る頃より左窓に西駒連峰も通過する雲をまとふ頂より青き尾根の間を、馳せ下る幾多の白龍は、美しき赤松越しに隱顯する。八時半、伊那大島へ着きたゞちに部奈に向ふ。天龍を渡り對岸の丘陵を上り深切な村人に教つて、久原のトロ事務所に着いたのが十時半。多分馬か若くはガソリンカーが引くものと思つて居た所、愈々出掛けるとなると、犬が引出したのには驚いた。主犬は馳ける〳〵、ごう〳〵たる響と共にトロは脫線せんばかりの勢で、カーブも何もおかまひなしに飛ぶ。道は小澁川に沿つてほとんど平亙である。ふりかへれば西駒の連嶺紺青にけぶつて浮び、脚下には小澁の斷崖が迫せまる。瀧澤の部落



晩春の悪澤、魚無河内及荒川岳

高　木　英　二

を左手に見て川を右岸に渡り、やがて對岸に北條坂の羊腸たるを望みつゝ鹿鹽川との落合に到る。晝食を取り再びトロを馳つて大河原に入る。部奈より四里余、此地に到つて小澁峡は全く開けて別天地を形成して居る。田あり畑あり、村は川岸より山脚へと雛段の様に奇麗にかさなり合ひ、寺の鍾の音がのどかに、余韻を引いて聞えて來る。橋の手前でトロとその忠實なる犬と別れ、赤岳會を尋ねる。郵便局にある會を訪問して後「まる川」に荷を下した。間もなく赤岳會の篠崎氏及び兼ねて申込んで置いた人夫、行者事松尾氏來り種々打合せの後、人夫を二名とし一名は三伏迄と定む。

隣室に華堂と云ふ畫かきが居て盛んに筆を動かして居た。聞けばこの地で畫會を開くのだそうだ。懇意となり夕方一諸に小學校へ佛法僧の剝製を見に行つた。學校は村と川を一目に見下せる高台の上にあり、既に授業も終つた後の事とて若い男女の先生達がテニスをして居た。校庭より河原に出で夕日にあかねする赤石をあほいだ。一切の準備をとゝのへて十時寢に付く。瀬の音や、蛙の鳴聲に何んとなく落付かざる氣持も何時しか安けき眠の內に溶け込んで行つた。

六月七日

愈々三伏目がけて登る日だ、こつちはこの十日ばかり晴天續きと聞いて時節から少し心配したが、幸ひ晴れて意氣天を突く。七時宿の人々に送られて出發す。つま先上りの道を朝つゆをふみ〳〵行く。學校へ行く子供が一々、丁寧に「お早よう御座い居ます」と挨拶するのも氣持が良い。上藏（ワクラ）には醫王山福德寺とて、この長野縣下最古の建築物と云はれるお堂がある。約七百年前のものだと云ふ。一体この大河原の地はその昔建武の頃後醍醐天皇の第三皇子宗良親王が征東將軍として各地に轉戰され、戰利あらずして遂に小澁川を上つてこの地に入らせ給ひ、自給自足以つて他日の計を廻らされた所である。從つて親王の御墓である七輪の塔や、御所の跡である御所平、初めて親王に差上げる米を取つたと云ふ米山等ある。

親王の御墓を拜して道を左に取り、小澁川に別れて釜澤谷を上る。ショ澤テラ澤を横切り八丁坂を登つて豐口山のガレ下に出て、こゝで晝食にする。このがれにはサデと云つて材木を山から下す爲めに谷にかけた嚴丈な樋があるので、しば

らくこの樋の上を登つた。それより右手には日影、小河内等の絶壁をあほぎつゝ、二二四〇米と二四二六米との鞍部にある帝室林野管理局の三角點に達す。これより道は尾根の北側をまいてとうひ、しらびそ等の生ひ繁れる中を行けば漸く雪多く、しば〳〵一尺余も踏み込んで困難した。尾根は次第に狹くなり遂に四時、三伏峠の小河内澤に面するガレ上に出た。人夫衆を先きに小屋へやり、やはらかい草の上に横たはり寫眞を取り等してのびる。北望すれば本谷山の峯續きには鹽見の岩峰そびえ、その左に、間の岳、農鳥、さらにその背後に甲斐駒の尖峰がそびへて居る。足元には早や黒百合の芽や厚く綿を着た岳わらびの芽も見へて、山の春を思はせる。四時半、はだ寒い風におびやかされて、人夫衆のふみ跡を雪の上にたどり、ひた走りに下れば、五六丁にして小屋に着いた。小屋は新築でしかも廣く出來て居たが去年煙出しの窓を閉めて置かなかつたと見へて内に雪が入つて居て使用出來ず、下の方に天幕を張る。夕食後、赤々と燃へるたき火の光をたよりに都の友へ手紙を書く。明日歸る一人の人夫に持たせてやるつもりだ。

六月八日

雪解けの水の音と、朝の寒氣に目をさまし、テントを出れば、人夫衆は已に起出て、岳樺の幹が盛んに焔を上げて溫かい。鷄の空に次第に光あせ行く三日月をあほいで、しばしは何もする氣もなく、唯焔を見つめて居た。

「ポン〳〵〳〵」

靜けさを破つて鳴る拍手の音に、顏を上ぐれば、太陽は蝙蝠岳のあなたより暖かき第一箭を投げかけて居る。月は愈々白く　木々の青葉も紅に燃へて行者の一同の無事を祈願する祈の聲も氣持が良い。

七時テントはそのまゝとして水筒と辨當とを持つて出發す。大河原へ歸る仙太公は流石に心細いが此方を見かへり見かへり元來た道を峠へと登つて行く。自分等はテントの直背より直ちに三伏峠と本谷山との鞍部目がけて登る。約十五分にして尾根に出て、それより針葉樹の尾根を進む。この頃より天漸く曇り、三峰川方面より霧が盛んに上り、行手をさへぎ

る。本谷山の三角點を通過して權工門平より權工門岳をマキ氣味に横下の鞍部に至る。こゝでドーナツに元氣を回復し、俊急なる荒川谷をふかんしつゝ、はひ松をこぐ。かつやんの連中がはるか下に見へる、三峰川より登つて來た谷だと思へば何んとなくなつかしい。小鹽見より頂上迄は樂だつた。十一時頂上、こゝでKから贈られた桃の鑵詰の下に名刺の入つた鑵を見付け開けて見ると、つい昨日鹿鹽から登つた人があると見へて「これより三峰川に降り、岩魚を鱈腹食ふ云々」とあつた。後に聞けば法政のT氏だつたさうだ。頂上に居る事約一時間、遠雷の響とあられとに驚かされて、まつしぐらに鹽見澤を下る。岳樺をのせた岩をかはしつゝ、ピツケルをたよりに雪煙を上げてすべる〳〵。たちまち約二千米を下つて、中俣本流との出合に出た。この邊は雪崩のあと物凄く電柱程の立木が打折られて倒れて居る。これより權工門澤を右に見て、三伏小屋目がけて澤を上る。幾度かの淺い徒渉を終へた頃、遂に雨となつた。テントの事を氣づかいつゝも足を早める事も出來ず、默々として歩む、やがて幾つかのスノーブリッヂを越して澤は雪渓となつた。小豆大のあられをふんで登つて行くと遂になつかしい昨日の吾等のテントが別に異狀もなく在るのを見る事が出來た。不敢取、天幕をたほし、舊い小屋が柱とトタン屋根だけ殘つて居たのを幸、その內へリュツクサツクを入れ、テントもその內で張る事に定めた。屋根の下と云つても壁がないので約一尺の積雪があり、これを除去するに多大の勞力を費した。ピツケルで堀起し、トタン板に乘せてこれを谷へ落し、さらにその跡にしらびその葉を敷く等、約一時間の後には、兎も角もトタン屋根の下にテントを張る事が出來た。さらにそれに並んで丸太で食堂を作り上げた時、雨は又沛然として至りトタン屋根をたゝいた。

六月九日

今日は愈々尾根づたひに赤石へ向つて縱走する日だ。人夫が一人となつたので各自鑵詰を分擔し、お負けにはその上米の快い一ぷくのたばこの煙が雨に煙ぶる山の空氣に溶込むで行くのをながめて居る內に眠くなつた。

を三升程がんばる。二日の宿を貸してくれたこの谷を見返りつゝ富士見岳へと向ふ。途中谷のやゝ廣くなつた所から地圖に點線で出て居る昔の峠道を横切つて眞直に富士見の頂がけて登る。荷は重く、雪は堅く、アイゼンを付けなかつた我々は多大の努力を費して漸く尾根に出る事が出來た。小屋よりは約一時間を費したのである。見渡せば足下より南へ續く尾根は小河内澤、布引澤等を抱いて大きく灣曲し、雄大なる小河内岳、奇骨陵々たる小日影等はるかに今日の道遠きを思はせるに、したはしき鹽見岳、岩と云ふ岩、雪溪と云ふ雪溪も皆我に抱攝されて和ごんで見へる。昨日あの頂に立つたのだと云ふ事の故に、何とはなし望みつゝ行けば盛んに雷鳥が出沒する。純白と漆黒の雄と赤色まだらの雌とは急がはしく、はひ松の間を漁り歩き、グーグーと鳴き交す。雷鳥の出る日はどうも天氣の勘考が惡いと云ふ行者の言葉に道は自然とはかどり、十時には小河内の頂に着いた。スノードロップスに元氣を回復し、小日影山との三叉指して下る。十一時小日影と板屋岳との鞍部の河原に出で晝食を食ふ。その內に天は漸く險惡となり早やボツリ〳〵と大粒の奴が帽子のつばを氣持惡く打出した。兎も角雷公の臨御ましまさぬ內にと、あはてゝ場所を探し、大いなる岳樺の下、はひ松の陰にテントを張る。一通の仕度が出來て、たき火の焰が上る頃昨日と同樣ピカ〳〵ザーツと御出になつた。あはててテントに飛込み入口をしめる。大粒の雨にたゝかれて細くふるへるテントの屋根を人指指でそつとさはつて見る。ひやりと冷めたいが裏へは廻つて居ない、ほつとする。テントの上をすべる水玉が稻妻の光る度に眞珠の樣にぼんやりかゞやいて滑つて行く。うすろ寒い中にはひ松の香が一しほ高くにほふ。天井をはふ紫煙の細きもつれを見つめて居る內に思はずうと〳〵となる。ふと目をさませば、雨は已に上つたらしくテントをたゝく雨だれの音も間遠となり外は明いらしい。勢よく入口を排して外へ出れば、陽はたそがれのあはい光を投げ、はひ松の色も目にしみて靑黑い。葉末の露をよけつゝ靴をつゝかけて板屋の尾根へ出て見る。底知れぬ斷がいは深く足元に黑ずみ、對岸には赤石の大屋根があはくアーベンロートに匂つて居る。一つ先きのピークに立つ行者の姿

がくつきりと夕空に浮び、それより下へ下へと枝振りの良い眞柏を乘せた岩峰が下つて居る。

「あのしやくしの様な雪が三つならんで居るのが百間平だ。」

とどなる行者の聲も谷に吹込まれて夕もやが次第に上つて來た。

（以上磯野）

六月十日

何と工夫しても肩の邊が寒くて到々目が醒めてしまつた。例の通り晴れて居るが又午後になると雷やになる。雪を溶した水なので萬事水に不自由する事甚しい。

昨夕板屋岳の陰から見た赤石岳方面の山々が又異つた感じの姿をして居る。今日は思出の小西俣谷内の行者が板屋岳の次の小さな峰を巻き終らぬ内に、西俣谷に向つて眞直に落込んで居る東向の尾根を下り始めた。隨分急な下りだ。こんな所で足を滑らしたら何處へ行つてしまうか分らない。西俣の本流に出たのが十時四十分、二三年前此の谷を今年卒業した吉澤、渡邊、矢作の三氏が雨の中を下つて行つて縋取りに助けられた因緣付きの谷であるが、谷其のものは大したものではない。下るにも上るにも樂な谷であるが、水が澤山出たらどうなるか分らないを考へて登つて居ると追憶の情に堪へない。氣が付くと一行はどし〳〵登つて姿が見へない。でも急れなかつた。岩の上には先に行つた連中の足跡が水に濡れて付いて居る。

行者に尋ねると、西俣谷の本流は荒川岳より發して居るので、小西俣谷とは板屋岳より南下して居る尾根を派出して居る邊に源を發して居る谷で、荒川岳より發して居る本流と合する迄を稱するものであるとの事である。

そうすると僕等の一行は西俣谷の本流を遡行した事になるのである。約四十分も荒川岳の雪渓を上ると少さな瀧がある。此處を今日の幕營地と決めた。雪渓が急なため、瀧と幕營地間の雪渓に階段を造つて水の運搬を便にする。

斜面が急なため、とても其儘では天幕を張れず床を造るに苦心をした。正午過ぎ此處に着いたのであるが、どうやら仕

事が片付いた頃は早や黄昏である。斜面に腰かけて赤赤と燃える火に手をかざしながら、今日板屋岳の手前より下りた邊を窺ふ事が出來る。すぐ下には西俣の谷が横たはつて、夕霧が段々此の谷を埋め始めて居る。早や谷間は夕景色である。すぐ頭上の荒川岳は是亦夕霧であるが、ちぎれた霧が相當の速さで西から東へと頂邊をかすめて居る。こんな一寸した處にも殆んど正反對の山の姿が現れて居るのも面白い。晩食後一本の扇子に皆なで記念揮毫をした。行者は赤石岳の姿と㊦と書いて筆を置く。各人夫々思ひ出の揮毫である。焚火の光が眞紅になる頃、天幕の中にもぐり込んで寢に就いた。

六月十一日

今日は大聖寺平迄の行程である。今日の仕事の大部分は雪渓であるため出發から「アイゼン」を付ける事にした。上の方の雪渓は下から見て居ても隨分急であるから相當の傾斜らしい。振返ると西俣谷は遙か下に霞に埋れ、中空には槍ケ岳を中心とした北アルプスの一群が頭を出して居る。棚引いて居る雲の上に穗高山塊、乘鞍、西駒の諸峰が夢の樣に浮んで居る。御嶽も西駒の一群中から一寸頭だけ出して居る。友の一人は餘りにも惜しい此の景色に斷念しきれず雪渓の途中で寫眞に收める。

午前九時荒川岳の頂上に立つ事が出來た。眺望は限りもなく展開して居る。ぐるりと一廻轉して此景色を紙の上に出したら、どんなすばらしい景色だらう。赤石の姿と云ひ、富士の雪と云ひ、鹽見岳を中心とした南アルプスの北部の山塊等實に物凄い景色である。案內の行者を殘して三人で悪澤岳に出掛る。一寸見ると何處からでも登れる山である。二時間足らずで又荒川岳の頂に立つた。雪を溶かしたお湯で中食をとつてしまつた。石室は殆んど雪がつまつて居て、雪のない部分はジメ〳〵して居るので、這松の中より一氣に大聖寺平に下つてしまつた。一羽の大雉が足元から飛出して、案內の行者も生れて初めてだと驚く。是れが天幕の最後の晩である。明日廣河原に行くかについて相談したが、何しろ天氣が頗る險悪になつていやな雲がどん〳〵出て

來たので、まご〳〵して居ると小澁川の徒渉が出來なくなるから、せめて小澁の湯迄行かうと決めた。

六月十二日

天幕がバフ〳〵するのに氣が付くと雨と風である。一寸晴い氣持になるが、殘つて居る山は赤石岳丈なのですつかり仕度をして天幕もたゝみ雨と風の中を登つた。案內人は木曾御嶽の行者なので、此の行程中每朝祈禱をする。ほんとに愉快な事であり、嬉しい事である。劍ケ峰でも自分の持ち上げた大明神体に向つて祈禱をして居た。愈々七時五十分赤石の頂上に立つた。此處に行者は最後の祈禱を始めた。そして祈禱の最後に、「東京神田學生三名無事下山……」と聲を張り上げて祈つて居るには、おかしさがこみ上げて來る一方、ほんとに有難い事だと思つた。下る途中行者は、「大聖寺平は俺は初め大小神平と付けてしまつた。」と不平顏をする。何でも昔は鹽見岳を荒川岳と行者達は呼んで居たのに何時の間にか大聖寺平と代つてしまつた。廣河原の小屋の立派なのに驚く。二時半頃小澁川に向つて下つたらしい。八時半頃小澁の湯に着いたので大河原迄のしてしまつた。

顧れば十日以上も續いた晴天の後に來て、よくもこんなに天氣が持つたものだ。それが行者の祈禱のためであらうと、天地自然の定めであつた事は有難い事である。今日は大河原迄降られ通しだつて悶苦は云へない理だ。どうせ出發の時から雨に降られる覺悟で來たのだから。

宿の湯に浸つてぼんやり過ぎし日の事を考へて居たら、何處からともなく伊那節が響いて來た。のんびりとした歌の節が今の自分の氣持にしつくり合ふ樣な氣がした。（以上近藤）

龍爪山、文珠岳

——雪の山を探ねて——

吉澤一郎

南海の地を吹く風は毎日々々暖かであつた。朝餉夕餉の後には此の草庵ををりて駒越の部落に續く小徑を辿るのを常とした。北の方に村の人々が來る年も來る年も三月の十七日には青年達が必ず登つて兵隊になる前、自分達の武運長久をば祈るといふ龍爪山から伊佐布山の後に續く眞富士山等の山波が此處からは直徑にして二里ばかり離れた夏密柑の産地梅ケ谷の霞む部落の上に立並んで居るのが見られる。

それは南アルプスの平原に安部川と共に駿河灣に消え樣とする時、最後の飛躍に名殘りを惜しむが如き眞富士山（一三四五m）、龍爪、文珠（一〇四一m）の山々であつた。

冬季雪の高連山岳から白峰山脈が北岳からおこり、最後に靜岡の平原に安部川と共に駿河灣に消え樣とする時、最後の飛躍に名殘りを惜しむが如き眞富士山（一三四五m）、龍爪、文珠（一〇四一m）の山々であつた。

い〳〵眞白な岳を見ながらだん〳〵と離れて行かねばならぬ、そして離れさせられて行く自分には益々こういふ低い山、高事の出來る、登り易い突きのい〳〵山を求めて歩く。三峠は誰にも知れてゐる山だ。東京の人には無くてならぬ山、そして此の地方には龍爪山。三保に遊び久能に詣ずる人々それも吾黨の士は其等を訪れなくとも此の時はづれの人氣のない淺い午らも山らしい山である龍爪文珠に登つてみたらと思ふ。

「山岳」の古いものにとの事だつた。然し此處は多少の勞苦をいとはなければ、より以上に駿河として最もい〳〵であろう展望台を僕等に提供して呉れるのである。

草庵（六、四五）——入江町（七、四五）——梅ヶ谷神社（九、〇〇）——ブドウの尾根（九、四〇）——イサブ山の北鞍部（一一、〇〇）——龍爪山鳥居（一一、二五）——本社（一一、四〇）——龍爪項上（一二、一五——一、一〇）——文殊岳二等三角點（一一、二〇）——牛妻驛（三、一五——四、〇〇）——井ノ宮——靜岡驛——清水——草庵（六、二〇）

龍爪の登りは靜岡方面より來れば門屋から六三三米突へ突付けばいゝかも知れぬ。然し常道では困難であろう。或は門屋から他の道を知つてる譯ではないが、地圖の上からもさう考へられないが記錄の樣に歩くとこれは可なり樂であろうと思ふ。他の道を知つてる譯ではないが、地圖の上からもさう考へられる。東海道線江尻驛で下車した人は先づ入江町を目標として行くのが便利であつて後は前記の記錄に從つて歩くだけである。よつて自分も入江町より筆を運ぶ事にしやう。

入江町から巴川上流の稚兒橋を渡り、直ぐ地圖にはないが左折する道を行くと高橋へ續く眞直な道路に出る、高橋から西へ北街道を辿ると地圖にもある樣な大きなこれも恐ろしく眞直な新道が梅ヶ谷に通つてゐる。これが面白い事に余り長いのでいゝ加減の所に休み台が一つ置いてあるのだ。婆樣爺樣連でも腰かけるのであろう。梅ヶ谷に入る所で四ツ角になつて居るが（此處に記念碑が建つてゐる）西へ行くと柏尾峠を越して西奈村の長尾へ出る。龍爪へ行くには之も一つの近道である。尚北に行くと地圖に獨立樹の記號が入れてある所から左折し、小橋を渡つて右折し、小澤に沿つて行くと又橋があるので渡つたらすぐに右から來た澤沿ひに一寸百姓家の裏の樣な所を通り過ぎると尾根の末端に立つ。こゝからは全くの登りとなる。即ち地圖にある屋根道である。村の若衆に徑を尋ねた時に其の答へが面白かつた。尾根筋の事を教えてくれるのに「あのソラスカシ」と云つて居た。成程良くわかる言葉である。村界尾根に出た所の附近を「ブドウ頭」といふ相だ。靜岡地方の小山らしく致る所今は夏密柑の鈴なりである。地圖に「高山」とあるは此の邊では「伊佐布山」と云つてるが成程此の山の東に伊佐布といふ部落がある。即ち自分等は此のイサブ山の西ピラを捲いて行くのである。さすがに靜岡は世に聞えた茶の產地であるだけに此の邊到る所茶畑である。雜木林の間を抜ける時もある。杉の植林を通る時も

ある。目指す龍爪は時々其等の林間を透してあの鬣の様な古杉の列を見せる。下を瞰ると平山、足澤の部落が一塊づゝとなつて綠の山麓に(それも皆茶畑であろう)のどかな春に滿足氣に涵つてゐる。一月とは云へ此の邊は最早春であるのだ。梅は盛りで櫻は大分ふくらんでゐる。

暫く徑は伊佐布山の西北鞍部に出で今度は地圖とは違つて尾根の右側を辿り、次の鞍部からは左側を捲いて平山からの本道と合すると其處は穗積神社の茶屋及び拜殿のある所であつた。時々雉が飛び出す。端山でも此處まで來ると靜かである。

樵夫が一人舞殿の緣先に腰打をろし辨當を使つてゐた。丁度晝時である。自分等も此の廣い境內でやらうかとも思つたが少し我慢して頂上で濟ます事にした。清水の方から見えるあの鬣の様な杉は二三尺もあつて二列となり、其の根が地面に出てゐて自然の階段となり、中頃に征清記念碑があり、尙登つた鬣の先端に本社があつた。薄穢ない古びたもので神寂びたと云ひ度いが余りに澤山やたらに「何々登山記念」とかいふ惡戲書がしてある。社殿の左手裏から可なり急な登りとなつた。余り人も通らぬと見えて大部分荒れてゐる。普通の學校靴ではどうしも滑る。それに霜柱が三寸以上も地を被つてゐるので尙更困つたわけである。

それでもやつとの思ひで此の急斜面を切り抜けるとスッポリと二人は龍爪の肩に乘つて居た。

「ウハー　とても素晴らしい展望だ」

「見える〳〵赤石が、南が、安部川が」

ともかくもと頂上へ歩を移し、小さな無いよりはましのお宮のわきに腰を落ちつけ、小さい乍らも焚火を起して大河內川の上流や大無間、小無間の方に憧憬の眼を時々燒きつかせては持つて來た辨當をたべ、そして紅茶をわかして呑む。

悲しい事に自分は南アルプスに就いて東西北からは見た事はあるが、南もこんな端れからではでんで見當の付け樣が無

い。おまけに雪白き素晴しい山波は見えるが其の頭は皆雲の中にあつて平になつてしまつて居るのだから仕末が悪い。

不意に來たのであるから地圖も磁石もなし、それでも何愉快であつた。何しろ多分見えるだろうと豫期して來た事が當つたのであるから此の次は日本晴のとてもすごい天氣の時に來ればいいのだ。

伊豆の山々は全然雲の内であつた。三保の松原邊りは良く見える。此處から一度降りて一一〇米突から右に眞富士山へ續きそれが甲駿國境に交はる點より左へ眼を移して行くと大河内川の上流の安部峠と覺しき邊りの左手に當り頭ですつかり眞白なやゝ双峯の山が甲斐の方にあらはれた。いくら考へてもわからぬ。殘念だつた。自分は南を知らぬ。も少し歩かふと決心する。約一時間の休憩の後文珠に向つた。地圖の上でも實際から云つてもどつちが高いかわからぬ。いくらか龍爪の方が高い樣な氣もするが。

文球岳の頂上は茅が生えてゐるだけで南面して「大願成就」だの「絶食……」とか書いたま新しい立札が立てゝある。其の西側に三角點の標石が出てゐた。一等だか二等だか數字の所が缺けてゐるので良く解らぬ。行つた時には地圖をもつて居なかつたのでいい加減降りてやれと思つて踏跡を探して見た。キヤラメルの廣告ではないがあれでもたまには徑しるべとなる事がある。地圖には全然徑がないが多少茅の間に踏んであるので西南に向いてそれを降ると直ぐ消えてしまつた。かまはず降る。と又踏んである。それを左手に歩くと小さな空澤の樣な所に出てしまつた。然し新しい切株がちよい〳〵見える。人氣があるなと思つて尙もそのまゝ無理して木の根や岩角につかまり乍らをりて行く。とても急だ。二三年前に村瀬や村尾と行つた東北朝日での以東岳から大鳥池へ降つた時の樣な感じがした。暫くすると人の居る樣な炭燒の竈の上に出た。ショイゴを置いてある。其處からは又左へ良く踏んである。小尾根の曲り角の所でふと一つ向ふの藪の中に人が居るので「オーイ叔父さんこれから靜岡の方へ行くにはどう行くんだい。」と聞くと「手妻へ出るのか足澤へ出るんか。」といふから足澤なんて何處だかわからぬので手妻へ行く事にしやうと思つて「手妻だあ」と云つて結局教へられた通りに

行く事にした。地圖に足澤から此の村界尾根を越して岩の記號の先きで徑が消えてるのがあるが自分等は偶然ここへ來てゐるのであつた。尾根筋へ出る一寸手前から右手に降りて行く徑があつた。尾根筋から次の八二〇米突の圈のある峯「メイショ」を通つて門屋へも降りられるかも知れぬ。

降りにかゝるともうこれからは一本道である。此れは又三峠の歸り奥野澤へ降る所と余程似てゐる。懷しい思ひ出だ。

此の谷間はナル澤と云ひやがて安部川に流れ入る。森谷澤の部落へ入つてから八二〇米突の山の名を聞いた所が村人曰く、

「別にていした名前はねえが此の邊ではメイショ〳〵と云つてるだ。本字でどう書くかと云つて本字ぢやねえだ。やはり假名でメイショと書くだね」

黑線の徑を辿つて安部往還に出るとやがて貧素な手妻驛に着いた。文珠の頂から二時間を要した。此處の汽車たるや十八世紀ものであつて大河原から遠刈田へ行く輕便と全然同じであつた。四時發、此驛長が眞面目くさつて手をあげてピーとやると〆めて汽鑵車ともに三個しかない列車が動き出す所がいゝ。ガタンゴトン汽鑵車の動搖たる實に凄きものあり。前後左右はまだいゝとして斜を右左にやるからたまらない。靜岡の井の宮に出て自動車と電車により清水市に入り日暮れた中を歩いて一里ばかりの道を草庵へと戻つた。

尾瀬の三月

手塚金田晴雄一郎

冬から春の間一面に敷きつめてあつた雪が解けると共に、可憐にも、美しい高山植物の群が先を爭ふて咲き出る尾瀬は、沼、原、山、深林と限りない自然美を私達の前に展して、淡い憧憬を生命とする若者達の心をつかまないでは置かない。此の美しい地に遊んだ私達が、山の主の怒にでも觸れてか、傷ついた小さな心身を抱いて、山を下りて來たのも、もう二年も前のことになつてしまつた。特に深い痛手を負ふた私達の一人は、遂に其れが因となつて、あの世の靜寂の中へ招きの手に誘はれて行つたのだ。

私達は再び悲しい思ひ出の地を踏み度くなつた。雨の尾瀬を吹雪の尾瀬として苦しんで見たかつた。そして惡戲好きの氣まぐれの山の主に反抗して見たかつた。

貧弱な登山の經驗、拙ないスキーのテクニークを以て大膽にも尾瀬行を、私達は計畫した。三月の學期試驗も錄々手に付かず、唯山へのあこがれと喜で、そわ〳〵と遽しさの中に過ぎ、漸く準備も出來ていよ〳〵三月十二日出發と云ふことになつた。私達は初めて三月尾瀬に入る喜びと、輕い心配を語り合ひながら、落付のない元氣さで上野の驛に集つた。停車場の中は甲斐〳〵しいスキーの服裝をした若人の群が、輕さうな足取で歩き廻つて居る。厖大もパンばかりだが——を背負ふて、小脇には六尺のスキーをかゝへ、私達は此の群の中に混つた。

×　×　×

上下左右思ひ切り跳ね廻つて、ヒヤ〳〵させながら自動車は
に雪でぬかつて居り、自動車も有効期間を十年も過ぎて居る様
自動車は必死となつて登つて行く、全く機械虐待だ。中には人
満員電車の様にくくし付けて
間、外へ出て居る。雪は七八寸積つて、峯から吹き下ろす風は
間から、嶺だけ白い赤城が黒い裾を擴げて居るのが好く見える
自動車は又ゆる〳〵動き出した。馬の代りに此の自動車の後へ捉まつてスキーを滑らして見たい程、車は遲く、雪は相
當である。此前雨篠々たる中を有効期間を十年も過ぎて居る様
溪谷、大原新田の部落などは、水量の増した溪の音と、背中の御座を打つ雨の音とを聞いて歩いた片品川の
から下ろされたのは鎌田の手前、鎌田まで歩いて行つて饅頭屋で晝食をすます。田舎饅頭をほゝばつて揺られた元氣を取
り返すや否や、待ちどうしかつたスキーをはいて、饅頭屋の前の小さい丘の橇道でヂヤン〳〵滑る。雪の質は惡るいが良
く出るので良い氣になつて遊んで居たら、品田が雪の中から首を出して居る木株を避け損なつて、スキーの先を折つてし
まつた。品田の悲觀することない」
「學校のスキーは弱くて仕方ない」
とぶつ〳〵云ひながら、シーズピツツエを付けて戸倉まで妙な
程であるが、相當積つて居る雪も人通りのため方々解けて居て、スキーを抜いでは穿き、或時は水の中に落ちてスキーを
濡らしたり、面倒の思ひをしたので、意外に時間を食つてしまつた。田山花袋の賞して居る片品川の溪谷も實は長くて、
肩へリユークサツクの重みがかかつて來るので、へバツテ嫌になつた。

雪は思ひ出した様にバラ〳〵落ちて來て、熱した顔を打つ。それでも日は照つて白い雪に反射して居る。荷鞍山かと思はれる山が前に聳えて、きら〳〵輝いて見える。

「あの向ふが尾瀬沼なんだ」

懐かしい估仲から戸倉の間は人家は殆んどなく、行き合ふ村の人さえ稀である。從て道の雪は深く良く、林の中を行く時は全くの粉雪となつて、私達は又此處で道草を食ふのを餘儀なくされた。やつとこさ戸倉の村へ入り、一番北の端まで村の硬い雪道にスキーをたたいて玉城屋の前に出た時は、すでに六時になつてしまつた。娘さん達の心盡しで湯に入つて其の夜は疲れた身体を、リユークサツクの整頓もせず床の中へもぐり込んだ。

三月十四日　尾瀬入り

雪、同行者關東水電小屋の大谷氏と人夫杉浦斗一外犬三匹。

山の宿の靜な一夜は明けた。急いで飛起きて戸を開けると、朝日がきら〳〵と目映ばゆく、春雪から反射して眼を射つた。外から針を含んだ様な清淨な空氣が、膚寒く部屋の中に流れ込んだ。都合が好いことに、私達が目的地たる尾瀬ヶ原の關東水電小屋の大谷氏が、原への歸途を玉城屋へ泊り合して今日私達と同行を約された。氏は尾瀬の地理に詳しく雪の峠を犬を連れただけで唯一人里へ用事の爲め下りて來た程である。そして、次の如き福音を傳へた。

「小屋には夏上げて置いた米が充分ありますから、わざ〳〵揚げるまでもはありませんよ」

それで、私達の豫定の持物がずーと輕くはなつたが、其れでも、冬期は四貫までしか背負はないと云ふ人夫の分を殘して一人あたり三貫五〇〇匁目は持たなければならない。

寢具のが先に玉城屋へ問ひ合した時、小屋で借して呉れるから要らないと云ふので、私達は唯簡單な防寒具しか用意

して來なかつた。色々と出發に手間取つて居る中に、杉浦斗一が來た。未だ若い、聞けば二十二とか云ふ。感心にもスキーを穿いて來たが、背負子の代りにメリケン粉の袋見たいのもの〻中に、自分の受持の荷物を入れ、麻繩で共上をぎり〳〵縛ばつて、背中へ附けて居る樣子が、何となく心細く感ぜられた。林檎の頰を持つた、見分けのつかない程、丈と云ひ年恰好と云ひ良く似て居る姉妹の娘達と、若い、此が三人の父親とは思はれない宿の主人に送られて、山の宿を出たのは、既に九時近く、直ぐ裏からカン〳〵に氷つて居る道を拔けて、此の戸倉の部落の裏の桑畑の中を行く。此處にはシュプールが從横について居る、其れは、山人らしもなく眼の速い沼の長藏老人が戸倉の僻村に去年頃スキーを輸入した爲めだそうだ、來るものは來るのである。スキールートは夏道の樣に戸倉から笠科川に沿ふて十二ケ平に出て硫黄澤をぐん〳〵登つて行く。十二ケ平附近は遮ぎる樹もなく一滑りしたい樣な所で日は良く輝いて居て、汗は止め度もなく流れる。景色は谷間を行くので廣い眺望など無く、先頭に大谷氏を、最後は斗一がスキーを輸入した爲めかんじきに變へて熊の樣な足跡を付けて來る。登れば登る程雪は深くなつて、スキーはずん〳〵潜ぐる。二三日前から降りつゞいたらしい、少しも太陽の影響も風の影響も見えない。

「戸倉へ下りて來た時はスキーは殆んど雪の中へ入らなかつたが」

と大谷氏は云ふて苦しいラッセルを猶も引受けて呉れる。硫黄澤の右岸からサワ澤の狹い谷間に移る頃もう何時の間にか青空は隱れて唯白い綿の樣な雪が降り出した。急な變り方だ。大木は唸り、とても眼を開けて居られない程はげしい吹雪にさへなつて、一行八名のつけて行くシュプールは後から後から消えてしまふ。唯スキーの先を見守つて先頭の跡を逃がすまいと冷え手先で固く杖を握つて登つて行く。漸く田代ケ原の吹き曝らしを拔けて原の西端の木蔭で休む。大谷氏と斗一が腰の山刀を取つて樅の枝を澤山伐つて腰を下ろす樣にしてくれた。手はかじかんで居て手を出して黑パンを嚙るのさへ出來ない、流石に魔法瓶の紅茶は腹の底から暖める樣な氣がした。

景　鶴山　金田一郎



今の夏道は此の田代ケ原から馬洗池を通つて十二曲の峠を越し八木澤を傳つて尾瀬ケ原の東の端を廻る新道が出來て居る。スキールートとしては田代ケ原から約一六〇米餘登つて西側の尾根へ出て大赤澤の源頭をまいて蒼蒲平の一九〇〇米のあたりへ出て、あとは牛首めがけて下るのが便利である。

汗をかいて居たと見えて休んで居る中に益々身体が寒むくなつて來たので又スキーを穿いて歩き出す。を喚かせて居る大樹の中を潜り分け、此の上の赤澤峠までの急斜面を細まかいターンをつゞけながら登つもあるので大谷氏の犬や斗一の犬はくん〳〵鼻を鳴して潜る足を引ずつて跡を追ふたが此の深い雪に戻つて來た。一時間餘りで赤澤峠へ着いた頃は雪は止んだ。美しい綿帽子を被ぶつた樹林の間を行く氣て、日は覗いて居る。ケ原へ一氣に行かれる」と下りの樂しい

蒼蒲平の平な尾根が眼の上に現れた。「あの山越せば、尾瀬ら一歩一歩、重くスキーにかゝる雪を拂ひ除けて登る。尾根は私達の方に美しい雪庇を見せて居る。て居る。靜寂な神の境地である。神々しい景色に私達は立止つて暫し、カメラを手にするのさへ忘れて唯茫然と見守るばかり。

乘越に立つた時、尾瀬ケ原は見えない。雲が至佛や大白澤や景鶴を隱して見せない。尾根通りは風が強くて休む事も出來ない。直ぐ得意の繩ァザラシを取つて期待した滑降に移る。肩のリュークサックの重みも輕くなつたが背中でふら〳〵して困つた。が然し此れも長くは續かなかつた。雪は普通の傾斜でスキーを滑らせるには餘りに深かつた。丁度雪を掻くべき最新式の排雪車でもあるとしても心身の疲勞は甚だしかつた、が又其れは諦きめるとラツセルして下ると云ふ珍妙な有樣となつて私達は皆失望しない樣に二時間も努力して漸く牛首の東の舟淵へ出た。樹のナタ目を目當として北西の方向に尾根通りから外れ

水面の鴨は驚いて飛上つた。短い日は至佛の彼方に落ちてしまつたか、今は刻一刻と夕闇が原の上を這ふ様に襲ふて來る。私達は舟淵で口を潤ほすと直ぐ又立上つた廣い淋しい尾瀬ケ原を横切つて行かなければならない。ヨツピ川らしい雪のへこんだ所を越えて原の北側の一かゝへもある林の中に入る。さもなくても高低の分り難くい雪面に思はずスキーを叩きつける。目指す懐つかしい小屋もあと僅であると聞くと堪らへて居た疲勞、空腹、苦痛一時に發して私達は悲鳴を擧げたい位。金田は足がつるのを我慢して夢中で歩いて居る。斗一は輪かんじきを力無く引きずつて泣き出したい顔。雪面も凍つてしまつてスキーで其の表面を破る時ガリ〳〵と音がする。

薄明の漏る小屋の入口に私達が立つた時は極度の安心と共にもうスキーを外すのも、ズボンに固く附いて居る雪塊を落すのも嫌になつてボンやりする。やつとこさで上へあがつて小屋の人の作つて呉れた炬燵輪を圍んで懶く紅茶のコップを手にした。

吹雪の中の小屋

三月十五日　昨日の疲れで死んだ様にグツスリ寢てしまつた。起きて見ると部屋の中は薄暗い。時計を見ると其れでも十時を遠うに過ぎて居る。此の部屋は何時でも暗いと見える。外は盛んに吹雪いて居る、戸を開けるとドツとした風が雪の粉を顔に叩き付けると共に眩しい光が暗い小屋の中をさつと通る。急いで顔を引込めて小屋の中へ戻る。外では一日中吹雪が一人で暴れ廻つて居るのか、小屋の中に居ては外の音は何も聞えない。

斗一には小屋の外の木を伐つて貰つて、私達の滯在中に充分なだけ貯へておく。薪なら小屋の廻りに幾らでもあつて室堂や弘法の茶屋の様な不自由な思はしなくてもすむ。蒲團は一人で三枚宛あるし、米は夏の間あげてあるのが充分間に合ふ。風呂も五衛門風呂と云ふのが備つて居て毎晩入れる。何から何まで備つて居て山小屋の生活には申分ない。

關東水電小屋は昨年の秋ヌウイワ澤下の舊小屋から現在の場所に移つた許りで、其の位置はヨツピ川と沼尻川が合し只見川となつて景鶴山(二〇〇二)ヨサク岳(一九三三)の尾根の南の出端を直角に廻る所で、河の左岸にある。從つて私達は練習のためのスキーは此の尾根で行ふた。

「元の所より只見川の測量に便利になりました。測量は毎日二回午前八時と午後四時に行ひますが雨の日でも吹雪の日でも缺かす譯に行きませんから元の所ではとても大變です」

小屋の主任沼田さんは初對面の挨拶の後こう云ふて、顏中に蓬々と伸びて居る髯を撫で廻して居る。彼は此の髯とは反對に親切な人で、易しい聲の持主、

「何しろ冬になると全く人の顏なぞ見度くも見れませんし、毎日〳〵大谷君と顏をつき合はして居るのですから」

と髯の言譯をしながら又撫でて居る。

「こんな顏を寫して東京の人に見せられては困ります」

と云ふのを無理に後で紀念撮影の中に入つて貰ふた。此の二人の小屋の生活は全く昭和のロビンソン、クルーソーである。

冬から春へかけては明けても暮れても雪ばかり降つて居る、それでも四月の末頃から五月の初めにかけては天候も定まつて晴天の日が多くなるが、其れまでは一週間位降り通しに降つて漸く一日位日の光を見せるだけだと云ふ有樣、登山するのも實は四月へ入つた方が良いのだ。流石に昭和のロビンソン、クルーソーには色々な娯樂の道具がある。蓄音器がある古新聞がある雜誌がある其れにスキーも二台ある。小屋の人は此のスキーでヨツピ川を遡つて兎取りに行つたりする。

私達は斗一が外へ出て働いて居る間小屋の中で飯を炊いたり、湯を沸かしたり上手なものである。然し煙いのには困つた、涙がぽろ〳〵出て來る。午後から吹雪の中で一寸滑つて見た。二尺も新しい雪が積もつて居て登りのラツセルは辛いが其の代り滑るときの愉快さ、パーと粉雪が飛んで膝から腰まで隱れる。野澤源泉あたりでは一回も經驗した事が無い程

すばらしい雪あてである。雪あてとは此の地方の言葉で「雪の質」と云ふ様な意味である。小屋に來て一緒に滑つた。

竹治と藤八は雪掻きに來て居るのだ。今此の小屋の上に積もつて居る雪は約一丈餘りで、壓搾され雪の重さで小屋は朝から晩までミシン〳〵云ふて居たそうだ。私達が來た時障子が曲つて閉まらなかつたり疊があげてあつたりしたので不思議に思つて居た。

「其こそ生き心地はありませんでした。今にも家が潰ぶれてしまふかと部屋の中でビク〳〵して居りました」と沼田さんは云ふ。

三月十六日　今朝は朝から大變な事が起きてしまつた。

斗一たちの不注意か私達の靴を乾す爲めに餘り焚火の傍へ置き過ぎてどの靴も頭を並べて焦げて居た。磯野のは特にひどく足が入らない程ちゞんでしまつた。彼の憤慨すること「靴がだめならもうスキーは滑れないじやないか」と悲觀したが幸、沼田さんのを借りられたので尾瀬の間は良かつたが、注意しなければならない事である。

今日も山へ行けないので諦めて又昨日のゲレンデで滑る。雪の質も昨日より少し締つて居た。夜は風呂へ入つて、炬燵をかこんで、呑氣な話や明日への豫定が話され、おそくまで民謠が歌はれ、ノートラに頭をひねつた。こうした生活が、其の日山へ行つて來ても決まつて缺かされなかつた。

三月十七日　五時頃起る。薄く雲が空一面を遖ふて居るが、お天氣博士大谷氏は大丈夫今日は晴れると云ふ。私達の一行に

加つた品田は國の長岡で母の法事があるので今日はもう歸らなくてはならない。雪掻きの仕事も濟んだ藤八、竹治の二人も今日は歸ると云ふ。其れに長藏小屋へは連れて行かない積りの斗一は一緒に歸へして呉れと云ふので、一行は四人となつて一昨々日私達が來た道を其の儘通つて戸倉へ下りる。私達は兎に角至佛を目指して行ける所まで行く事とする。吹雪の中を尾瀬へ入つて來た三日前の私達のスキーや輪かんじきの跡が僅に其れと認められるのを賴りに景鶴山の裾の林の中を行く事が出來た。見上げる許りの大木なのでシユナイダーの樣に梢の雪を落して行く樣な詩的の眞似は出來ない。小屋を出る頃危ぶまれた空模樣も、ヨツピ川が雪でベツトリ塗られた所を越して廣い原へ出る頃パツト美しい光が白い原に漂ふて至佛の廣大の姿も正面に仰いで今日の行手の幸を思せた。

昨日一寸裾の方だけ見せて呉れた至佛は今日は山一面其の妙なるドームを惜し氣もなく擴げて私達を待つて居る。一直線にムジナ澤へ尾瀬ケ原の北側を縱に貫いて行く。原の雪はもう締つてスキーを其の上に滑らしてもくらない。スキーとの愉快な音に耳を傾けながら、疎林を過ぎ、再びヨツピ川を雪橋に依つて渡り、ムジナ澤の取付へ來た。至佛の山容も唯の白い傾斜となり、振りかへると燧の白い頭が林の上から突き出て居る。アザラシは付けずに針葉樹の中を登り始める。林の中は雪が未だ深く、木を分けて行くのも損があるのでムジナ澤の左岸の裸の所へ移つた。此處を少し登つたがベタ雪で蠟が落ちてしまふので右岸に再び移つた。針葉樹の最上端でスキーを拔いて休む。景鶴を正面に見て尾瀬ケ原を見下す景色何とも云はれない程、此が僅か二〇〇〇米そこ〳〵の山とはとても思へない。大白澤山は其の名の如くベツトリ白いが、易さしさうな山である。

「見える〳〵、品田達のシユプールが見える。」

と云ふ聲に原を見下すと私達がつけた一直線のシユプールから分れて原を横切つて牛首の蔭へ消えて居るシユプールが見える。「品田は今頃菖蒲平へ行つてるだらうか、向ふからは此方が分らないだらうか。」などゝ暫し品田達の話をした。彼

は尾瀬へ來ても滑降らしい滑降を味はず尾瀬から下りて行かなければならなかつたのだ。

ムジナ澤の左岸の尾根と至佛との一寸した鞍部が、登つて行くと絶えず目に付くので之を目標とした。もうスキーの作る雪球もなく、クラストになつて居る所、黒く岩頭が突き出て居る所など通つて行く。勿論下から見た時は此の岩頭などは一寸も氣が付かなかつた。スキーは僅に一寸位の深さに雪に印を付けるだけで、肩へはターンの廻數を少くして行く。左、山の場合が多いので足が左右平等に行かないが地勢で仕方がなかつた。夏ならば笹を分けて藪の中を潜つて四苦八苦する所を少しも無駄なく登つて行かれることを考へると愉快である。疎ばらな白樺の林が出て來た。此處から至佛の肩までもう僅である。何回ターンをしたら良いだらうと樂みに數へながら行く。

風は少しもなく、日は穩に暖さうに照らして居る至佛の肩に私達は着く事が出來た。魚沼駒、兎岳と云ふ大利根水源地方の山々が畏ろしい程白く鮮に一點の雲もない青空の中に浮かんで居る。言語に絶した感慨が胸に涌いて吾を忘れてしまつた。私達は未だ見ぬ憧憬に、燃ゆる樣な思を語り合つた。(これが後に六月の大利根水源山脈の大縱走と云ふ計畫の動機になつた。)

肩から頂上まではスキーを抜いて尾根傳ひに岩ばかりの上を行く。アイゼンなど必要はない。又登り方に依つて即ち此の肩へ出ずに直接至佛を目指せばスキーも取る必要はない。雪は上まで柔かである。頂に立つたのは二時で、眺望は一層開け、男体白根の日光の山々から日本アルプスまでグルリ周りを取り卷いて居る。「あれが御岳だ」などゝ時が經つのも忘れて見入つて居た。此の忘れる事の出來ない印象を深く刻ざみて再び肩へ戻つた。何も遮ぎる物もない雪の膚へ愉快な滑降。皆巧なボーゲンを畫いてムジナ澤を一散に。北向斜面と南向斜面で雪の質が違つて居るので、二三回轉ろがつて投り出されて前を見ると外の者はもう目の下に小さくなつて居る。とても愉快である。至佛の肩も遠ざかつて行くばかり、終りには惜しくなつて小さくボーケンを享樂したが遂に猫又川の雪の面に來てしまつた、時間を見ると僅に二十分許り。此

の滑降は永久に忘れられないものの一つである。(此から私達は何時も外の人に至佛の下りを物語つて自慢するのが口癖になつてしまつた位。)雪に埋まつた山鼻の小屋を覗いて見る。不思議にも戸の入口まで雪が堀り下げた様になつて居て、たやすく入口の戸も開いた。然し人の居た模様も見えない。雪も少し入つて居るばかりなので此處を根據地として毎日至佛へのプロムナードも出來る譯である。水電小屋へ歸つた時沼田さんは隨分早いと云ふ。(以上手塚)

三月十八日　曇　鶴山

今朝も暖い夜が明けた。と云つても暖いのは夜具が多い爲で、夜が明けた方は毎朝僕等より早起の沼田さんがすぐ雨戸を開けて下さるので、始めて部屋に薄明が指すのだ。それでも雪に埋まつた此の小屋——これは沼田さんには内密で、實際は對岳樓とも稱すべき立派な關東水電の社宅であるが雪に埋まつた外觀は上等な小屋の感じである。——はやゝともすると屋根の雪と下の雪とが相接して全く家内では天氣の模様がどうか分らない。外へ放水に行つた誰かゞ今日も天氣だぞとどなる。

早速暖い布團から拔出して炊事にかゝる。權利觀念の强い我がパーテイは一應此の義務をも定めておいたが勿論誰が當番だか不明だ。仕事は釜を竈へかける丈で簡單なのだが、煙の中で座禪はいくら雪だるまでも永くは堪えられないから順に交代だ。これも昨日までの豪遊さに引換へて人夫の居ない悲哀だ。と言つても總て炊事には湯を使ふのであるから未だ嚴寒の水の冷さを知らない呑氣さである。野澤で人の少い時よく炬燵の上で飯を食つた事を思ひ出し乍ら朝餉を濟ます。次が食休で先づのびる。

朝だつて相當早く起きるのだが食後は皆獸つてのびるから何時でも出發は早くない。いざ出發となると往日來の猛者手塚連日の奮闘に足の關節が痛んで行かれないとある。但し同氏の言に依れば行かれなかつたのでは無い。こんな不便な山

中で一日がんばつたが爲に動けなくなつては君等に氣の毒だからとの友情より出た謙遜で自重された由。時間があれば平嶽までと言ふ日だ、殘念そうな手塚氏の顏が薄暗い家の內に殘つた。望の大きな四人は又時に出た。すぐ只見川の岸邊についた昨日の仕佛行のシュプールを離れて林の中に入り、大体見當をつけて眞直に進む。

三十分の後には景鶴から東南に流れる腦岩澤に出た。丁度地圖の只見川に注ぐ手前で腦岩澤が二分する程混入つた此の澤も、冬期通有の西北風の爲、雪の吹溜りとなつて一面に高低を少くして大きな一つの谷の腦岩まで續いてゐる。これは景鶴に限らず、今度登降した尾瀨の山々の谷は皆東又は南向であつた爲積雪多く、ブツシュ皆姿を沒して、愉快な滑降を一層樂しませたのであつた。

さて小憩して一氣に東の肩まで登る。最初は澤の中央の小高い處を登り、暫くしてから右側の尾根に取ついてからんで行く。雪には數日前に出たらしい雪崩の跡を語る大きな雪塊が諸所に半分新雪に覆はれてゐた。白樺が點在するなだらかな一九三一、九m(ヨサク岳)の丸い頭が見られて直接尾根を水電小屋へ疎林を縫つて下るのも面か入らない。ワックスを塗らずに來た作戰は見事に適中して後滑もなくそれ程雪もつかずと言つた具合で、三月十五日まで降續けた雪も三日間の晴天にかなり固まつて此の邊では殆どスキーの厚さ程しの船來繩あざらしも必要がない氣持の好い登りであつた。眞黒な腦岩を脊にして林の中に入つたと思ふとラツセルも得意に出た。前には木もまばらな一九三一、九m(ヨサク岳)の丸い頭が見られて直接尾根を水電小屋へ疎林を縫つて下るのも面白さうであつた。此處まで丁度小屋から二時間半、眞に登りになる腦岩澤に出てからは二時間を要した譯である。

此の肩も原始のまゝの針葉樹に取圍まれて春先の靜な光に眠つてゐた。今まで景鶴の特異な岩ばかり眺めてゐた景色が一度針葉樹に匿されて、次に映じたのはのんびりした越後側の尾根である。遙の彼方、唯眞白に開けた眼前に大きな饅

頭の様な平ケ嶽がその尾根を白澤の方へ長く引いて座禪を組んだるま然としてどつしり坐つてゐる。谷々は遠く模糊とした中へ這上つて空まで續いてゐるやうだ。銀山平は勿論暗い寂しい谷の中にガスと共に形を見せない。利根の方から盛に風と雲とがやつて來た。平の頂上には雪煙が立始めて忽ち頭が見えなくなつた。ふーつと風がこゝまで來たと思ふと、太陽までがぼんやりして來た。どうも天候の變調を思はせるガスだ。こうなると我々もぼんやりして了つた。幸に雪は飛んで來なかつた。豫定では、これでも景鶴の東肩に出たらば頂上へ行かずに北側を林を抜けて（南側は岩と急傾斜に雪がべつたりついてゐて通過は不可能だ）出來る丈早く平ケ嶽へ行く積りであつたが小憩後遂に蹄らめて景鶴の頂上へ志した。いざ登り出すと東西に延びたかなりなやせ尾根で、しかも、北側は密林ではあり雪が深くスキーが一尺以上も埋つて通れない。南側は一寸下が見えない程急である。雪庇ではないかと心配したが中島が一人で例の「國家の干城」を發揮して勇敢に乘り出して單に急斜面な處だと言ふので安心する。雪はかなり軟らかいがこんな處だけにスキーでは仕末が惡い。「干城」だけはスキーをはいた儘リツヂを股にかけて眞直に開脚登行をする。後から妙な處をスキーデポツトにした三人が、ステップを切る處の騷ではなく腰まで潛つてふうふう言つて登る。尾瀨に來る前に三月では四月より尚更頂上は凍つてゐるからアイゼンの必要があると言つてゐたのにこれは又非常な相違でアイゼンはリユックの奥に轉がつた儘である。暫くで遂に「干城」も敵城堅く不利と見てスキーを脫して登る。腦岩の稱呼の元をなす岩らしいのを見て尚進む。これは人間の頭腦の形に似てゐる所から起つたものであるそうだ。從つて澤の名も腦岩を正面に望むから腦岩澤と呼ぶので農岩澤と書くのは誤になる譯だ。澤の方は他に名稱も無い樣だが山の名としては腦岩山とは餘り言はぬらしい。

景鶴山の名は頂上によく尾瀨沼の方から鶴が飛んで來てとまるそうだからそれから生じた名らしい。ケイヅル又はケイカクサンと呼んでゐるがケイカクサンは白馬をハクバと訓ずると同類で深い意味は無いと思ふ。鶴ケ嶽の名は一度も聞かなかつた。

偖、話が妙な詮議に暇取つたが歩く方も景鶴だけで歸ると決しい所に着いた。西方に同じ位の高さの地點があるが其處に行つから此方が最高點だと勝手に理屈をつける。雪ではつきり譯谷なら當然の事であるが兩側がそゝり立つた頂上だと木の上はらないが高い木の梢にちよつと乘つてゐるらしい。平地や燧もぼんやりしてゐるし、至佛から平ケ嶽、越後方面もはつきりしない。併しひどかつたガスも次第に去り始めて再び薄何だか頼りなくて氣味が惡い。急いでぐるつと眺め廻すとら日が出て來た。尾瀬ケ原ばかり眞下の腦岩澤の末に大きく光つてゐる。只見川がうね〳〵と曲つて僕等の懷しい小屋もそれと指される様だ。沼田さんの話の通りヨツピ川と沼尻川の合流點から小屋のある只見川第一の曲り角までは三丁位らしい。只見川に就ては地圖も相當誤があるらしい。全体にもつと曲折が甚だしいとか三條の瀧は藤原岡幅に記入さるべきであるとはよく聞く事だ。

頂上で記念撮影をして直ちに引返す。「干城」も今度はスキーをかゝへて下る。肩について樹間でゆつくり黒パンとバタに晝食を濟ます。魔法びんの暖い紅茶の公平なる分配も終へ、スキーにも蠟を塗る。さて林を抜出て見ると平ケ嶽行を惜しくも中止した原因たるガスがすつかり去つて、だるまの平ケ嶽とピラミツドの劍ケ倉とがにらんだり尖つたり。これに決ると寫眞班を殘して「干城」を先頭にどん〳〵滑る。午後の陽にかなり雪は融けてゐるがワツクスとシユタイルハングは決してスピードを鈍らせはしない。先に行つた者が豆粒になる。

最初はやはり澤の東側の尾根を滑り後はデブリーも何のその澤の中をどん下る。十分程でボーゲンも終つて直滑降に移る。沼田さんの所謂東洋第一のスキー場もたゞ眞直な一本の線を引くにとゞまつたのは殘念だつた。長い滑降と軟雪とで淡い疲れに面ほてりのした四人はスキーを揃へて輝く谷一杯白銀雪のとその中に印せれた數條のシユプールとが深く、高

く遣上つて眞黒な岩と共に懐しく見下す姿をほころかに見上げて頬笑んだ。

二十分後にはもう炬燵話が始まつてゐた。（以上金田）

三　篠ノ瀧

三月十九日　今日は三篠の瀧へ行く。（三丈ノ瀧は瀧の形から云ふて三篠の瀧の方が正しいさうで、三丈と云ふ意味は瀧の高さから云ふても理由を見出せないと沼田さんの話を此處へ紹介して置く。）水電小屋から直ぐ下で直角に曲つた許の只見川の橋を渡つて右岸に出る。只見川は豐富な水量を持つて燧の西麓を次第に切り開いて瀧の様に落ち重なる水が溢れるばかりたぎつて深い谷を作つて行く。

燧岳の西麓には長藏老人が針泉の計畫をして居ると話した場所がある。深く積もつて居る雪も此處だけは解けて金氣色をした土が氣味悪く見える。溪谷はこのあたりから次第に深くなつて小さい澤が幾つも之に注いで居てスキールートも勢ひ小谷を上下する不便のため只見川から遠ざかつて燧よりの方を行かなければならない。其の結果平滑の龍は確かにゴーゴーと谷間に木魂する聲を聞いたが三篠ノ瀧は遂に見付からず、見當を付けて小澤を下りて只見川を覗いたが瀧より未だ上手らしかつた。其れ程瀧を見たいと云ふ熱もなかつたので面倒なまゝ引返すことに決した。スキーの上から云つても面白くはなく唯時間ばかり相當かゝつて居る。其の埋め合せを既にコチコチに凍つて固くなつて居るゲレンデで取返へした。

長藏小屋まて

三月二十日　惠まれた天候に相當な活躍が出來たが、三月の尾瀬の事とて何時又降り込められて小屋から一歩も外へ出られない様な事が起るかも知れない。今年の様に三日も四日も晴天ばかり續いた事は全く尾瀬としては珍らしい事だと聞い

て今更ながら私達の幸福な事を感じた。

未だ先の豫定は相當難關の燧岳及び燧岳より檜枝岐と會津駒が岳へ行くだけだからうんと吹雪いても困らないと思ふのだが。荷物を整理し、リュークサックの重いのを久し振りで肩にする事にければならない。天候は今日も惠まれて居る。長藏の小屋へ行くをして小屋の人々と紀念撮影をしてお互の健康を祝し合ふて懐しい山の小屋を出た。

「寫眞だけは必らず送つて下さいませんか、誰方も口では云ふてもいくら待つて居ても送つて下さいませんか」

と沼田さんから懇々と賴まれたが、成程面倒のもので其の後幸ひ漸く之を果たし得た事は嬉しい。

小屋を出た時は丁度お午頃とて太陽はらん〳〵と燃えて春を思はせるが、周りの山々は未だ冬のまゝ眠から覺めず、何一つ動くものゝない靜まりかへつた大地には荒涼たる感じがする、さらば懐しの至佛よ。

途を見送つて呉れる様だ。

昨日の只見川の橋を渡つて前面に低くなつて見える尾瀬沼への雪の塚の様に高くなつて居る檜枝岐小屋の上に出た。一寸氣が付かない程小さい隆起である。再び樹間を縫ふて沼尻川へ早く出であとは川沿ひに沼尻まで。尾瀬沼は積雪二尺、其の下は充分結氷して居る。沼尻から正面に三平峠の白い頭と、複雜な嶺を持つた恐ろしさうな燧岳とが目に付く。沼を妙な氣持で渡つて長藏小屋へ着いた。小屋は半ば雪の中に埋まつては居るが原よりも雪は少いらしい。長藏老人は感心にも冬籠りをしたと見え小屋に居た。

「おめさんが元氣な心身を持つた人が出なければ今の政界はとても駄目だ、だよ、」

とばかり特意の政治談に田中首相、原法相など糞味噌にされる。此の話も切り擧げて炬燵にもぐる頃は空には星が輝いて又明日の幸を知らせる。宿帳を見ると昨年の最後の客として十一月二十何日かに私達の先輩如水會山岳會の御大奥野氏の

名前が見えて居る。猶も頁をめくつて行くと昨年四月には慶應や明治の山岳部の人々の名前があつた。

三月二十一日　蠟燃岳

蠟をウンと塗つたので氣持良い程早く沼の上を滑走して沼尻平へ。燧の頭は何事が起つても俺は知らんと一人で威張つて居る。ナデツクボの澤は白い雪がベツトリ谷一面を埋めて、素晴らしい歸りを期待した。老人は雪崩は大丈夫と保證して呉れた程登るにつれて其の痕跡はなく僅に大きな雪塊が邪魔をして、一々避けて行かなければならない位のもの、ターンは面倒になる程やるが皆元氣、磯野はスキーが反つて來たのでドン〳〵登る、金田は長身を利用して巧みに登るが其れでも他の者の方が早かつた。ナデツクボの澤を殆んど上で、左に巻いて尾根へつて下を見ると今登つて來た澤が案外急なので驚いた。尾瀬沼は脚下に横わり、其の遙か奥には日光の山々が凛々しい姿を見せた。至佛も今日も私達を見守つて居る、黒パンを噛り雄大な景色を眺めて居る中に次第に膚寒くなるのを感じた時は、天候は變つてしまつて今にも落ちて來さうな様子、驚いて立上る。尾根の雪あては素晴しいもので時々先頭がサート横すべりする硬雪面が同じ様に見分けが付かないで私達を驚かせる。尾根は右へと巻いて、三ツ許頭を巻いて三角點のあるマナイタグラのザツテルへ出た時は猛烈な吹雪に成つて來た。山上の吹雪、心は下へと命ずる。此の不決斷の躊躇は遂に目と鼻の燧が見えず、顔など向けて居られない位雪を顔に叩きつけられ、スキーを取るにも今は手が用をなさなくなる。漸くスキーを雪の中に突き指し、杖をピツケルの代に三角點を征服せんと目指す。六米餘は軟い雪、最後の堅雪へ移らうとすると吹雪は一層強くなつて足許さへ危くなる。今更ピツケルとアイゼンを持たずに來た事が悔まれる。一足先きに行つた中島と磯野は頂上で困つて居るだらうか。兎に角再びザツテルに戻つて身を振るはして待つて居ると二人も寒さにふるへながらも頂上を征服して下りて來た。急いでスキーを急斜面に滑らせて一目散に下へ。

再び澤へ入ると劇しい風はなくなつてスキーの上に佇む身に粉雪が降り注ぐばかり、燧の嶺は物凄い叫聲をあげて雪煙が上つて居る。此處から沼までボーゲンで下りる。右に左にテクニークの練習の積で滑つて降る。原を渡つて長藏小屋に立つたとき吹雪の山の嶺の恐ろしさを思ひ浮べて遭難した人達の場合を想像して見た。小屋へ入ると出發の時注文して行つたゆであづきが圍爐裏の上でグラ〳〵と煮えて私達を待つて居た。何回も何回もお代りを頼んだが夜炬燵の中で人に迷惑を掛けたのはUとKだけだ。腹が暖ると又小屋の附近の傾斜面へ出て練習する。粉雪はサラ〳〵とスキーの上に降り注いで、燧も見えず三平も沼山峠も見えず、沼はボンヤリ鈍い色をして居る。

連日の奮闘で其の夜は會津駒は再擧の日にして、いさぎよく尾瀬に別れを告げる事に決めた。

歸途

三月二十二日　輕い雪の降つてる中を長藏小屋の人に教へられた通り、三平峠の登り口を探す。此の登りは大した事はなく峠下はスキーも良く出た。長藏老人の息子が四五日前里に下りて行つたと云ふ輪かんじきの跡があつたので其れを目標としたので大体間違はずにすんだがさもないと思はぬ所へ出て登るにも登られず下るにも下れずスキーを持てあます様な所へ出てしまふから注意を要する。戸倉までは日あたりも好いので雪あてが悪く、豫期した程早く着けず面白くもなかつた雪は途中で止んだので呑氣にさぼりながら行く。山の神と尾名澤との間は草地の多い爲か小さい雪崩が所々にあつたが大した事はない。山の神の附近の人の居ない小屋からスキーのシュプールが戸倉の方へ付いて居た。土地の人のでもあらう。山の神附近は丁度フイルムクラストになつて居たのでゲレンデとして此處で遊ぶ。山の神から南には大カタヅケ、中カタヅケ、トマカタヅケと云つてデプリーが道の通行をはゞんで居る所が三ケ所あつた。雪を片付けて通行を付ける必要から此の名稱が出たのであらう。玉城屋へ飛び込む時は無生に腹が減つて居て搗き立てのきび餅を競爭で詰め込んだ。

戸倉から沼田の歸へりの道は既に雪は無く、來る時と雲泥の相違が僅か十日間に見出された。尾瀬の方には其れだけ急激な變化は無いが天候は遲ければ遲い程定まつて來る。

私達の場合は例外的な快晴で再び望み得られるものでもなく、見た事も音を聞いた事もないと云ふ、長藏老人でも一箇所もに就ての安全さが窺れる。人夫は一日僅に二圓で冬でも同じでキーを持つて居る者も居るし、私達も一回もデブリーに出合はし、勿論冬の山だとて彼等は詳しい事は私達に取つて福音である、と比較して少しも遜色がない、其れに人夫の中でもスシの代りに繩アザラシの船來のものだ。

私達は今度初めてアザラシを使ふて見たが、中々便利で取りは其れだけ急方を眞似る事も出來る。（以上手塚）

雜錄

山に入る佛心かうらぶれか

知らず淋しき人の心か

大雪山から阿寒岳

近藤恒雄

山の友宇佐美が來て四回目大雪山への登山に出發した。汽車の部合で釧路を出たのは午後六時五十分函館行きであつた爲め下富良野驛乘換が朝の三時半頃である。寢むいのと何のつてとてもお話にならない。何でも何處の驛か知らないが子供を背負つたおかみさんが乘つて來て僕の前に席を占めた。隣には宇佐美君兄弟が向き合つて早や裕々と白河夜舟である。丁度汽車が狩勝の峠に來たので一寸夜景を見樣とデツキに出て外の景色を見て歸つて來ると驚ろいたね前のおかみさんがこれはどうぢや俺の席に裕然と腰打かけて白河夜舟である、そして俺の前の席には一尺位の子供をねかして知らぬ顏をして狸寢(多分)をして居るのには流石の俺も俺の專賣特許を奪はれて一寸閉口した、いやな婆であつたけれども一寸氣を代えて慈悲心を起して俺は喫煙室に行つて列車ボーイを資本金なしにガイコつて物凄い立派な二人用の腰掛に寢してもらつた。心掛けのよい者は天是れを捨てず獨り悦に入つて寢た迄はよかつたが、すんでの所で下富良野を乘過す所であつた。

下富良野驛で乘換へたが眠くて〳〵堪らない。こんな事で八里の道が步けるかと思ふと心細い事限りない、せめて何里かの間乘物があればよいがなと願つて來たのも水の泡美瑛驛に下りて見て落膽した。何にもない其處には土塵の道が眞直ぐ着いて居るばかりである。ほんとに情なくなつたが何しろ釧路から依賴されて來た中學生二人が居る手前餘り弱音も出せずさあらぬ體で步き始めたのである。

太陽がかん〳〵照り渡つて沿道は全部是れ土塵の堆積である。一步踏み出せば塵芥胸に至ると云ふ工合である。鼻から口から目から耳から總て是れ塵芥と汗である。五人とも土の塊の樣になつて步いて居る姿は誠に情ないものであ

る。親に見せたら餘りにも淺ましい姿にさぞかし泣き崩れるでもあらう姿である。それでも午後二時頃だつたか忠別の小學校に着いて水の御馳走になつた。此處の女先生（校長さんの妻君）が十八貫六百匁あるのに大雪山を一日で縦走したと大變な自慢である。何んだかこんな事を聞いたら登る張り合ひが抜けてしまつた。そして急に疲勞が加はつて來たので是ではならぬと又重い足をひきずつて三里の道を松山温泉にふら〳〵とたどり着いたら早速醉拂ひのお客に「なんだアゴを出して登つて來たのだな」とひやかされには例へアゴを出して歩いて來たにもせよ腹がたつたから色々と醉拂ひが聞くけれと錄に返事をしてやらなかつた、そうすると此のお客「旭川何時に立つたか」とうるさく聞くから「美瑛から歩いて來たんだ」と突放すと「いや夫れは大變だアゴを出すのも無理はない〳〵」と云ひやがつたから尚更腹が立つてしまつた。癪にさはつたからやけになつて温泉に飛込んで泳いでしまつた。

此のお客まだこりず湯から上ると「今晩登るんだ、トムラウシ山は實によい、お客さんも登りませんか」と又うるさく云ふから「トムラウシなんてけちな山は夏行く山でない」と呶鳴つてやつたら「それは一般的には云へない、人には好き〳〵があるから」と逃げる。實に癪にさわつた奴であるいや普段だつたら腹も立たなかつたのだが何しろ時と場所が悪かつたのだ。其晩一人旭岳に登ると出て行つたが何處へ行つたやら。

十九日

昨夜の疲勞がまだ治らないので四時の起床は相當につらいものであつた。二見瀧、幣の瀧を過ぎる頃から風が段々強くなつて針葉樹林がごう〳〵と鳴り出した、昨日迄明き り見えて居た旭岳がこれはどうした事であらう全く霧に包まれて皆目分らない。

それでも豫定の時間には早や旭岳下の石室に着いたので此處で一時半位湯をわかしたり、また早かつたが中食を採つたりしたので、大分疲勞の徴候が見へた釧路中學生も元氣回復した。此處からは一本の木もないので其の風は又格別、とても一人〳〵では吹き飛ばされる危險を感じたのでアンザイレンをして登る事としたが五人が一緒になつて居ても兎角中心を失ひそうになり、頂上近くになると砂礫

が飛んで來る有様なので隨分閉口したが、石室より一時間一寸で旭岳の頂上を極めたが、猛烈な風と霧で少しも見通しがきかずすぐ寒さを感ずるので磁石と踏跡をたどつて間宮嶽の道標の處迄來た。此處からはとても自動車でも通れそうな大きな道がついて居るので風と角力をとり乍らも途を踏み違へる事もなく途中一回の休憩にて黒岳の石室に着いた。此處で一寸暇をとつて一氣に層雲峽温泉へ下つてしまつた。思へば松山温泉迄のつらい行程に比して餘りにもあつけない一日であつた。頂上の眺めは全くなかつた。只大噴火口を雲の晴れ間から一寸見た丈である。而も大雪登山道の完備も此の行程を單調にしてしまつた觀を免れないが、然し旭岳からの頂上は何處でも歩ける様な處ばかりであるから霧がかゝつてしまうと道と標道が唯一の頼りである。是では十八貫六百の忠別の女先生が一日で松山温泉から縦走するのも無理はないと思はれるのであつた。旅館の湯がとても大きいので嬉しかつた。

二十日

今日は乗物デーとでも云ふ可き日で朝の七時から自動車と汽車に乗りつめる事十五時間半と云ふのだから全くいやになつた。網走町の伊藤屋旅館に落付いた時には疲勞の極に達して居た。

二十一日

九時頃から天都山に登つた、町から約一里位、眺めのよい丘である。遠くの方が曇つて居るので大雪山も阿寒岳も見る事が出來ず只、網走湖能取湖濤沸湖遙かに網走の町を隔てゝオホツク海を眺め得た丈であるが、風光の美は以つて掬す可きものがあつた。途中林檎園に立寄つて百匁七錢の林檎を買つたが學生だと思つてとても形の惡い奴ばかり寄越したには憤慨した。

二十二日

夕方迄網走で遊んで此の夜北見相生の小村に一泊。

二十三日

今日は阿寒湖畔迄出ればよいので呑氣千萬である。同行の釧路中學生とぶら〳〵北見の國境を越えて正午には湖畔

に出られた。美しく澄んだ湖面を見つめて昨年の思出に耽る。井上旅館の一室に陣取つて旅の疲れを癒す可く早く寢たが、何時頃だつたか大分遲くなつて着いた北見燃木小學校の校長さんと先生數名が隣室に來て酒を飲み出し大變な騷ぎ方である。校長さんが先に立つて聞くに堪へない事をしやべり出すには驚ろいた。何しろ普段片苦しい事ばかり云つて居るので其の反動が來たのか女教員も交つてどたんばたんの騷きである。中にも校長さんの奮闘と來たら物凄いものであつた、よつぽど呶鳴つてやらうかと思つたが相手が醉拂つて居るのでは話にならない。そして云ひ分がよい雌寒岳へは明朝四時に出發するからと女中に云ひつけて居る。翌朝九時頃のそ〳〵とんでもない恰好をして出掛けたには全く憤慨を通り越して滑稽である。

二十四日

靜養、舟でホンモシリ一週。

二十五日

北海タイムスと釧路体育協會主催の阿寒團体登山隊が來た、此の團体は昨年一諸に僕が加つた團体であるそして今年も又此處で此の團隊に入つた。

二十六日

夜十時雌阿寒岳登山に出發。

二十七日

何しろ四十數名の團体だので大したものである。昨夜よりの夜間行軍である。そして先頭に立つた者は總ての故障例へはそれが道端に轉がつて居る一尺位の木であつても、危いぞ〳〵と呶鳴る可く幹事のお方から命令されるのである。そして先頭の者が危いぞ〳〵と呶鳴ると是れを聞いた後の者が又危いぞ〳〵と呶鳴つて後の者に知らせる可く要求されるのである。何の事はない團体全部が大聲を出して危いぞ危いぞと警告を發しながら登つて行くのである。その有様は實に珍妙なものである。斯く云ふ僕も先頭に立つて光榮に浴して此の「危いぞ危いぞ」の音頭をとる可く餘儀なくされた事は實に滑稽な思ひ出である。そして頂上に至

る頃には呶鳴つた奴は大低聲をからしてしまつたとは嘘しい山である。親しい山である。そして思出の山である。
の様な本當である。看視の小屋で京都の叔父さんと釧路中學生二人と一諸に一行から落伍して寢て行かうと思つたら團体の内のおぢさんの一人が來て「總て團体行動をとつて貰ひたい」と云つて來たので「どうも濟みませんすぐ後から行きます」とあやまつて二時間位寢てのそ〳〵朝の七時頃雌阿寒の頂上に立つた。先に行つた一行は既に下山して姿も見へない。雲は低くたれて居たが段々晴れて先す大噴火口から次に北見の山々が見へ出し、そして北見の平原のも嬉しかつた。
朝の大陽に照り渡り遙か下には阿寒湖が霞んで見える。其そして二十九日總ての去り難き執着を湖畔に殘して十二處には昨年の山が其のまゝの姿で眠つて居るのである。懷日振りで釧路に歸つた。

八月二十八日

一行雄阿寒岳へ登つたが又今日もさぼつて旅館にごろ〳〵して居た。幹事の工藤さんが色々便宜を計つてくれたのも嬉しかつた。

川俣川

手塚晴雄

八ケ岳登山者が赤岳と權現との最底鞍部のキレット小屋に立寄つて其の脚下を眺めたとき、針葉樹の氣味惡るい谷ともつかない急傾斜が走り下りてゐるのに氣が付くであらう。此が川俣川の上流地獄谷と云の恐ろしい名前の谷で赤岳直下の大ガレに其の源頭を發してゐる。又事實土地の人でもうつかり此處へ下りると中々出られないと云ふて恐れ

て居る。

川俣川に關する參考になる文は僅に「日本南アルプスと甲斐の山旅」に數行、「若し或る登行者が長坂驛を未明に立つて西井出から井出原を横切り、川俣川を溯つて奇巖怪峭飛瀧奔湍の絶景をなす地獄谷を是の(キレット)小屋に辿れば渓流に住む山椒魚と、巖壁に咲く多くのムシトリスミレに接し得て、八ケ岳の登路に一層濃厚な興趣を添えずには置かぬであらう。」と記してあるのみ。そして此の地獄谷から八ケ岳へ取付くと云ふのは先輩吉澤氏の在學中の懸案であつたが遂に延期され今度余と中島とで二人で行くことになつた。

汽車は中央線韮崎驛で下車して自動車で北へ數里八ケ岳の東南麓長澤まで飛ばし(但し乘合)美しの森で立派に出來た新しい道を川俣川に沿ひ時折り木の間から見下ろす深い川俣川の渓谷を眺めながら行く方が前期の長坂驛を未明に立つて西井出から井出原を横切るよりも樂で良い。昔し番所があつたと云ふ長澤は甲州の關門であつて重要なる部落をなして居たのであらうが今は唯素通りして川俣川を渡つて佐久往還を四五丁行くと弘法水と云ふのがある。「南アルプスの眺望田毎の月、弘法の靈水」と云ふ立札が立つて居た。弘法大師が此地を通りがかつた節、杖を地中にさして憩つた所、其の杖の跡からこん〳〵と清水が涌き出したのだと傳へられて居る。早速此處で朝食とも晝食ともつかぬ食事をしながら、弘法大師の御利益に感心する。南アルプスも良く見える。

美しの森までもう水は無い念場ケ原を行くので此處で水筒へ水を詰め、佐久往還とは分れ北へ兼澤と云ふ澤跡を通つて行く。舟窪(約一一〇〇米)とか云ふのは先輩吉澤氏の在學中の懸案であつたが遂に延期され今度余と中島とで二人で行くことになつた。

汽車は中央線韮崎驛で下車して自動車で北へ數里八ケ岳の東南麓長澤まで飛ばし(但し乘合)美しの森で立派に出來た新しい道を川俣川に沿ひ時折り木の間から見下ろす深い川俣川の渓谷を眺めながら行く方が前期の長坂驛を未明に立つて西井出から井出原を横切るよりも樂で良い。昔し番所があつたと云ふ長澤は甲州の關門であつて重要なる部落をなして居たのであらうが今は唯素通りして川俣川を渡つて佐久往還を四五丁行くと弘法水と云ふのがある。「南アルプスの眺望田毎の月、弘法の靈水」と云ふ立札が立つて居た。弘法大師が此地を通りがかつた節、杖を地中にさして憩つた所、其の杖の跡からこん〳〵と清水が涌き出したのだと傳へられて居る。早速此處で朝食とも晝食ともつかぬ食事をしながら、弘法大師の御利益に感心する。南アルプスも良く見える。

美しの森までもう水は無い念場ケ原を行くので此處で水筒へ水を詰め、佐久往還とは分れ北へ兼澤と云ふ澤跡を通つて行く。舟窪(約一一〇〇米)とか云ふのは先輩吉澤氏の在學中の懸案であつたが遂に延期され今度余と中島とで二人で行くことになつた。

汽車は中央線韮崎驛で下車して自動車で北へ數里八ケ岳の東南麓長澤まで飛ばし(但し乘合)美しの森で立派に出來た新しい道を川俣川に沿ひ時折り木の間から見下ろす深い川俣川の渓谷を眺めながら行く方が前期の長坂驛を未明に立つて西井出から井出原を横切るよりも樂で良い。昔し番所があつたと云ふ長澤は甲州の關門であつて重要なる部落をなして居たのであらうが今は唯素通りして川俣川を渡つて佐久往還を四五丁行くと弘法水と云ふのがある。「南アルプスの眺望田毎の月、弘法の靈水」と云ふ立札が立つて居た。弘法大師が此地を通りがかつた節、杖を地中にさして憩つた所、其の杖の跡からこん〳〵と清水が涌き出したのだと傳へられて居る。早速此處で朝食とも晝食ともつかぬ食事をしながら、弘法大師の御利益に感心する。南アルプスも良く見える。

美しの森までもう水は無い念場ケ原を行くので此處で水筒へ水を詰め、佐久往還とは分れ北へ兼澤と云ふ澤跡を通つて行く。舟窪(約一一〇〇米)とか云ふのは先輩吉澤氏の在學中の懸案であつたが遂に延期され今度余と中島とで二人で行くことになつた。

汽車は中央線韮崎驛で下車して自動車で北へ數里八ケ岳の東南麓長澤まで飛ばし(但し乘合)美しの森で立派に出來た新しい道を川俣川に沿ひ時折り木の間から見下ろす深い川俣川の渓谷を眺めながら行く方が前期の長坂驛を未明に立つて西井出から井出原を横切るよりも樂で良い。昔し番所があつたと云ふ長澤は甲州の關門であつて重要なる部落をなして居たのであらうが今は唯素通りして川俣川を渡つて佐久往還を四五丁行くと弘法水と云ふのがある。「南ア

黒岩から少し行くと黒岩三角點(一二三二、一米)があり

川俣川の吐龍の瀧がかゝつて居る。（是は丁度地圖に左岸に崩土、右岸に嶮岸の符號のある所）

美しの森一名井出の森或は丸山（一五四二、六米）と云ふは山梨縣人の關東第一のツツジの名所と稱して最近盛んに宣傳して居る所なので縣人たる私も駕を枉げて原の中へキヤンプをすることにした。目的のツツジは五月では一月早いと云ふので氣早いのが青葉の中に二三見えるだけ折柄襲ひかゝつて來た時雨に可憐にも唉いて居た。又其れだけ全山燃ゆるが如く一面に唉きほこりて居る頃花の中に埋つてゐて墓場と云ふ感じがした。五月つた。水は深澤の源頭でもあらう美しの森とツツジケ原との間をチヨロ〳〵流れて居るのを使ふ。

川俣川を一日で遡行するのも強ち不可能ではないがかなりの强行で水のない九月頃仕方なく行ふ外はテントを持つてゆつくり登つた方が味が深いだらう。其れにはどうしても此の美しの森の美觀を眺めて行くべきである。近く又佐久鐵道が此處を通つて中央線と連絡するから鐵道完成の曉には遊覽地としても別莊地としても此處を中心に安都玉村は縱に橫に其の發展をなすであらうと山梨日々新聞は報じて居る。

美しの森の朝は輝き渡つて東空の彼方には金峯、國師、甲武信、の山波が霞んで居る。南アルプスの間の岳、北岳鳳凰、駒岳の諸高峰は雲もかゝらずに山巒が黑くはつきり見える。八ケ岳の尾根の峯々を惜し氣にかくしてゐた白雲は次第〳〵に霽れ上つて雪をいたゞいた橫岳から赤岳の大天狗、朝日、龍頭、權現、三頭が見える。ツツジケ原から川俣川に下りるには崖の符號のある少し上手からマコ岩の下で澤に立つ、丁度此處は水が無く大石が河原にごろ〳〵して意のために水くみに澤に少し二町程下ると大石のかげからこん〳〵たる清水が涌いて居た。其處で水をたらふく飲んで石傳ひに河原を遡つて少し行くと河には水が流れてゐて牛や馬が其處で遊んで居る。異樣な人間の姿に驚いたと見え岸の林の中に隱れてしまつた。

水は即ちマコ岩の下四五丁程伏流になつてゐるだけで私達が河原を遡つて行けば行く程反つて水量は增えて行く樣である。全く水が流れて居ないとテントを張るにも困るし又淋しいものである。夏おそくなるときつと上まで水は無

くなつて、僅にキレツト小屋の下からちよろ〳〵出る位のものであらう。

私達は八ケ岳を縦走して夏澤峠の北の尾根から大河原峠まで行く豫定で澤山の食糧と防寒具を自分で背負つてゐたので其の進み方はまるでお話にならない位のろく、よたりよたりと登つて行き、其の四時までに漸く川俣川の一七〇〇米か一八〇〇米の所まで來たにすぎない。其れでも愉快だつた、谷の景色も充分觀察し、足許の一木一草と雖も眼にとめながら互に其の名を語り、又リユーサツクを岩の上へおろして岩ともみ合ひもみ合ひ流れて行く流に眺め入つたり愉快な遡行だつた。

翌日も又其の調子で歩き出した。兩岸の谷はますます深まつて行き、左岸は集塊岩で何千年と云ふ自然の作用で其處には岩が剝ぐれて巖窟が出來て居る。一夜の假の宿をテント無しに此處に定める事も充分出來る。此の巖窟には硫黄が附着して居る、可憐なる岩櫻も咲いて居る。川俣川は大きなボーゲンをえがいて北へ曲つて、金峰も谷からは見えなくなつて來ると共に赤岳の大天狗が凄い樣子をして谷底を見下ろし初めた。權現も龍頭も朝日も時折姿を現す。

笹や、ミヤマハンノキの中を分けて進む私達の頭上では岩燕が亂れ飛んで居る。

川俣川は今迄入つて來る澤は無かつたが天狗岩（二二八〇米）の眞南あたりで二つ北より澤が入つて來た。此の第一の合流點からは天狗岩の山が良く見える。此處では左の澤を取る。第二の合流點は權現の嶺を眞西に見せて同じ位の大さの澤が入つて來た、赤岳の突角が凄く輝いて居る、時に九時四十分、右の驛を取る。第三の合流點は前より半町程進むとある、やはり同じ位の澤で西北から來る本流は全く其の方向を轉換して眞北である。即ち此處では右の澤を取る。第四の合流點は水量も巾も少し大きい樣な氣がする左の澤を取る。磁石の指針は西を示して居る。然し右の小さい澤は本流では無いと思ふが良くは分らないが。第四の合流點から澤は急に險惡になつて、狹い澤參謀本部の五萬分の地圖と適確に合はくぐり、雪の上を歩き崖の上へ出て下りるのに危く滑り落ちさうになつたり非常に努力を要したが此處は水の無い方が樂で澤の中をずん〳〵進めるだらう。

第五合流點に出る頃澤にかゝつて居た大木に尻の赤くな

い猿が一匹座つて居たのに驚かされた、向ふでも私達の姿に氣が付くと急いで逃げて行つてしまつた、第五合流點は狹い谷はすつかり雪でおほはれて居て兩岸は險しく突き立つて居てよじ登る術もなささうである。左の澤を取れば地獄谷のキレツト小屋の下へ行くのであるが此處に小さい瀧がかゝつて居て兩岸は岩だし、瀧は雪でおほはれて居るが行けさうも一寸ないので右の澤を私達は取つてしまつた。右の澤は多分赤岳直下のガレから其の源頭を發して居る本流であらうと思ふが或は又第四の合流點の右の澤が本流かも知れないが其れにしては水量が少いと思ふ。

私達は要するに此の第五の合流點を右に取り、直に左側の尾根へ無理によじ登つて赤岳へ行かんとしたがすでに時間がおそくなつたので尾根の中でテントを張つた。テントの周りには雪は澤山あるし、枯れた木はわざ〳〵私達を待つて居たかの如くつき立つて居るので手でどん〳〵折つて火にくべた、焚火は物凄い勢で燃え上り、湯は忽ちグラ〳〵涌き出し、山火事にならねば良いと雪を投げ込んで消す程であつた。翌朝はひどい暴風が寢て居るテントをバタ〳〵叩くのでもう一日滯在とは思ふが、案内だけなら何時でも出る。雨は少しも降つて無い樣だが谷に響き渡る風音の凄まじいこと、ごうーと一はぎい〳〵叫び聲をあげふ音は止まない。一吹きなで、其の響きはだんだん〳〵遠くに移つて行くらしく聞える私達はどうなる事かとテントの中で小さくなつて居たが意を決して外へ出て見ると赤岳は眞上に見上ぐる許に聳え前面には地獄谷をへだてて朝日が其の山巓を見せ突き立つて居た。

何とも分らない妙なものを書きあげたが澤の分岐は

一―左　二―右　三―右

と澤を取つて行けばキレツト小屋へ出る。私達は尾根のテントをひき拂つて赤岳めがけて直接登ることをさけ、ガレの北で國境尾根と合して居るので手でどん〳〵折つて火にくべた、焚火は物凄い勢で燃え上り、湯は忽ちグラ〳〵涌き出し、山火事にならねば良いと雪を投げ込んで消す程であつた。翌朝はひどい暴風が寢て居るテントをバタ〳〵叩くのでもう一日滯在とは思ふが、案内だけなら何時でも出る。

四―左　五―左

雨の荒川を下る

吹原不二雄

これは今夏第六班Cとして西山温泉より白峯、仙丈、甲斐駒、鳳凰を縦走せんとして雨に妨げられ残念乍ら間の岳小屋から荒川を下つて芦安に出たときの記錄です。

一

前日の夕方はしばらくの間天氣が恢復し、青空さへ覗きかけて來たのでてんでに北岳に登れるなとか、これからのコースに就いて話し合ひ、先づ散歩にと間の岳を往復してゐる位で岩魚も前の川で釣れるし次の日には芦安に出られる嬉んでゐたのも束の間、晩方になると雨が降り出して來た。

風が止んでしまつたので人夫達は「こりや地雨だ下るよ屋根を叩く雨の音は一晩中續き、殘念乍ら半途にして下山り仕様がない」とつぶやくのを聞いた僕等はいや〳〵乍らをすることになつた。七時四十分一同用意を整へて小屋を下りのコースを研究しなければならなくなつた。農鳥の頭出てすぐ東のタケカンバの密生の中を下りて行つた。金高を越えるのは到底出來ないことだつた、僕等と同じ日に石が先に立つて時々杖で熊笹の中を掻き分けては徑を探し出室の方に陣取つた浦和高校の連中は前日の朝十時頃深澤金して大體東南に、農鳥岳の東から出る荒川の源流に向つて高（大門澤小屋からずつと一緒になつてゐる滋賀縣人の人下つて行つた。ちら〳〵と農鳥の山稜が樹間に見えると間

もなく、藪も開けて殘雪の豐富にある荒川の源流に出た、時間は頂度九時だつた。こゝも大門澤に劣らぬ急な雪渓で草鞋穿きの友には仲々辛らかつたらしい。そこから暫くは河原の岩塊の上を歩いて行つたが、左右の澤から合流する水量はとても豐富で往々瀧となつてゐるものも見られた。脛を沒する位の渡渉を二三回すると左岸に少しオーバーハングした岩壁が現はれた、先づそこで一休みしやうとその下まで上つてぐしよ〳〵に濡れた合羽や上衣を焚火の上に廣げた。雨は依然として降り續いて止む氣配は更にない、對岸もこちら側と同じく切り立つた斷崖で上の方はぼんやりとかすんでゐる、上流下流も同じく煙つてゐる僕等は井戸の底にゐるやうな氣持を抱いて不安氣にうす暗い空を見上げてゐた。三四十分も焚火の傍で濡れたものを乾かした後僕等は又河原に下りて川に沿つて下り續けた、もう大分水もふえて渡渉になると脛では濟まず膝頭を越えるやうな處もあり、流れが急なため、人夫が川の中に立つて僕等は彼等の手にすがつて渡る處もあつたりした、乳色に濁つた奔流は岩を噛んでしぶきを岩の上に叩きつけて僕等を脅やかす、渡渉が出來なくなると人夫は荷物を置いて先の方を見に行つたが、やがて流木の大きい奴を見付け出しそれを架け渡したことも二回ばかりやつてようやく五萬分の一鰍澤圖幅の三ツ瀑の上の處に出た、やつと自分達の存在を地圖の上に見出したのだ、もうとつくに正午を過ぎて一時五十五分になつてゐた。

三ツ瀑で北西から來た激流を渡つて左岸に移り、澤山の朽ちた倒木をまたぎ越して笹藪を分け下つた。朝からしと〳〵降る雨と汗とで全身はびつしより濡れ、靴は歩く度にじゆく〳〵と氣持の悪い音をさせた、然し僕等は四邊の陰森とした氣分からこれから先の模様が何だか不安なやうに感ぜられて唯何事も語り合はず、默つて河原に下り立つた。少し河原を歩いて行くと又激流が岸の眞下まで迫つて居て僕等をして餘儀なく流れを渡らせた、流されてはいけないと努力して向ふ岸に渡ると一町も行かぬ中に、又流れがこちらの岸に迫つて來る、人夫が渡すべき丸太を捜してゐる間僕等は岸に突つ立つて天の無慈悲を深く呪つて止まなかつた。丸太が渡されて對岸に渡ると木立の間の笹の下生へ急傾斜を無茶苦茶に上るが、それも澤に出會はすと無理に下らされた、澤は皆瀧になつてゐるのだから、こうして

又河原に下り立つた、とすぐ渡渉、今度は大分行けるとふと程なく流れを睨んで立ち止まる、渡すべき丸太がないので信光が手鋸を腰に挟んで空身で對岸に渡る、みし〳〵〳〵と徑一尺もあらう縦の木が木立の間にゆらいだと思ふと忽ち物凄い音を立てて奔流の中に打ち倒れる、暫く立つてそれらはうまく蔦口で以て岩と岩の間にしつかと止められた。人夫達が確實な足取りでそれを渡ると續いて滋賀縣人が渡り出したがどうしたことかつるつと滑つてあつと思ふ間もなく激流中に投げ込まれた。唯焦つてごぼ〳〵やつてゐたとき金高が岩の突端から突き出した蔦口がうまく上衣にひつかゝつた、滋賀縣人の顔色は土色になつてがたが〳〵ふるへ切つてはゐたが自分で衣類を新しいのに取り換へるだけの力はあつた。愼重なる態度を以てその丸木橋を渡つてから、かなり左岸の中腹をからんで歩いた、澤を二つ三つ横ぎつてずつと尾根筋を下ると、そこが北澤との落合であつた。木立の隙間から哮り狂つてまるで瀬の連續のやうに泡立つて見える北澤はさすがあの怪偉な姿をして天空に聳え立つ北岳の生んだ澤だけあると思はせた、これを見て皆がつかりして笹の下生えの中にしやがみ込んでしまつた色々渡らうとはこゝろみたが、結局木立の間に一疊ばかりの凹んだ岩を見付けて一夜を明かすことにした。岩の下でも雨垂れはどん〳〵落ちる、おまけに下は岩がごつ〳〵してゐる、場所が狹いのでリュックはござをかぶせて外に出して互に身を寄せてシュラーフザックにもぐりはしたが上下から侵入する水の冷めたさと背中の痛さとでとても寢られたものじやなかつた。（七月十九日雨）

二、

相も變らぬ雨の音を聞きながら濕り切つたザックの中で一晩中ふるへてゐたが、少しうとうとした後首を出して見ると長かつた夜も明けて外はあかるくなつてゐた。然し雨は木立の間に悲しいリズムを繰り返し、澤の音も昨日より高く耳に響くやうに感ぜられた。人夫が何を缺いても飯だけはと炊いてくれた飯を頬張つてゐる間に彼等は架橋に從事してゐた。人夫の飯がすむとすぐに架けられたばかりの丸太の上を渡つて對岸を上へ上へと攀ぢ上つた。暫くは一三〇〇米邊りの等高線に沿つてへつつて行つたが、又例の急造の澤で川岸まで下らされた。然し川は物凄い音を吐いて兩岸に當り散らしてゐてとても進めない、結局小さな澤

を上つて針葉樹林を東へと辿つた。これが大分續いてやゝ下り加減に進むと上手から一條の踏跡がかすかにも下つて來たのに合つたのでやつと地圖に出てゐる點點の道だなと勇んで、それを下り切つた。川岸に出ると幾分かの河原が殘されてあつたので二三町行くと、高さ十二三丈もあらう細つこい瀧（煙りの瀧とかいつた、平時は水煙になつてしまふ程のものだらう）が高い懸崖からすぐ左手の瀧堂に落ち込んで、その水が噴水の如くに荒川に吐き出されてゐる。ござを引つ被つて勢つけてその下をくぐり抜けたけれども冷めたい水がさつと胸元に侵入したのには閉口した、そこから間もなく河原は左岸から突き出た大岩で斷たれたので藪の中に入り、オーバーハングした大岩の下で火を焚いて一ぷくした。――こゝは岩魚釣などが宿る位だと人夫がいつてゐたが成程小さな籠も築かれてあり、粗末な食器類も奥の方に散亂してあつた。三十分も休んでから暫くは藪の中をかき分けたが今度川岸に出たときはちやんと丸太が向ふ岸の岩に渡されてあつた、そしてそこから少し川べりの岩を傳つて行くと右手の林の中に坦々たる踏跡が見出されやつと胸に安堵の思ひが湧いて來た。地圖に出てゐる吊橋を直きに渡つて河原の端に岩小屋を見出した僕等は急いで中に這入り込んだが中は雨で濡れ切つてとても腰は下ろせない、人夫に蹤いて御料局の小屋はと少し上へ行くと、どうしたことか小屋は奇麗になくなつてゐるといふ始末。再び坪位の平らな土地には雨足が踊つてゐて小屋のあつた五重たい心と足とを引きづつて鮎差の部落を目ざしてかすかな徑を歩んで行つた。四邊は大分趣きが變つて來た、水勢の猛烈さを以て一日半の間僕等を惱ました荒川もあの小屋跡の少し下手で野呂川と合して早川になると堂々大川の趣きが加つて水速もゆつたりとして來た、兩岸の岩といひ崖といひ、又森林といひ物凄い脅迫するやうな態度は捨てて女性的になつて來た、ずつと降り續く長雨さへもあたりの景色をぼかして藝術的の趣きを添へる役目を演ずるやうになつた。

再び吊橋を渡つてから約一時間半位で川原の廣くなつた處に出た、黒焦げになつた柱が澤山突つ立つてゐる、こゝが鮎差の部落だつた。人夫はいま〳〵しさうに舌打ちして誰かがいたづらして燒いてしまつたのだと語つた。幸ひ燒け殘つてゐる小屋が二軒あつたのでその一軒で休むことに

した、もう一軒には製板機械が一ぱいつまつてゐた）がこれとて雨漏りがひどいので泊まることは出來ないので飯でも炊いて元氣を付け、夜叉神峠を越えて芦安まで頑張ることにした。朝飯もろくに食はぬ僕等の食慾は物凄く發揮されて、これまで取つて置いた食物は殆ど殘らず平げられた。

もう五時近くなつて僕等はこゝを去つて夜叉神峠の上りにかゝつた、早川と離れた徑は急傾斜をジツグザツグに上つてゆく、目の下にゆるやかに蛇行する早川を見下ろして像して我を忘れてゐた。（七月二十日雨）三、十一、七

小澁川に沿ひて

芊川稔一

第一日　辰野―伊那大島―大河原
第二日　大河原―小澁湯―小澁川―廣河原小舍
第三日　廣河原小舍―大聖寺平野營
第四日　魚無河内岳、惡澤岳往復
第五日　暴風雨滯在
第六日　滯在（石室に引上ぐ）
第七日　石室―廣河原小舍
第八日　廣河原小舍―小澁湯―大河原
第九日　大河原―大島―辰野

赤石岳以南光岳までの縱走は、美事失敗に終つてしまつた。「毎年〳〵山へ這入るのだもの、稀にはこんな事も話の種さ」とは云つたものゝ、大聖寺平からいよ〳〵廣河原

へ下ると云ふ時には、本當に情なかつた。四日前には、此の急な坂道を登つたのであつた。草花に彩られた高嶺の尾根道や、雛をつれた雷鳥の姿が、其の時には頭の中にちらついてゐた。今の頭の中は「敗殘」、「敗殘」と云ふ言葉で一杯である。

總てが失敗である此の山旅の中で、第八日目のコースはせめてもの見つけものであつた。

小澁川は性質の惡い川である。雨が降れば直ぐ渡れなくなつてしまふ。上る時には小澁川を放棄して高山裏へ別の道をとる事が出來るが、廣河原から下らうとする時には、再び大聖寺平へ引き返して高山裏へ廻るか、或は此のコースをとるかいづれかにしなければならぬ。併し此のコースは大河原の人夫さへよく知つてはゐないものであるから、渡渉の出來ぬ場合、此の拙い報告が幾分なりとも利用して頂ければ、幸甚とするところである。

廣河原の小舍は、去年の秋出來たもので、廣さは五間に三間、硝子窓さへはまつてゐる立派なものである。四日前に「この小舍ともお分れだ」と云つたが、其の時にはまさか

昨夕止んだ雨は夜中の一時頃になつて再び降り始めた。小澁川の渡渉が氣になる。フク川は恐ろしい音を立てゝ岩を押し流してゐる。雨は一度は止んだが、夜明け頃から再び降り始め、七時半小舍を出る時には、かなりの降りである。

雨が降るとすぐに荒れる荒川の水が比較的少ないし、水も濁つてゐないのに元氣を得て、いよ〳〵徒渉を始めた。フク川も水は濁つてゐないので比較的樂に渡れる。併し水量は數日前の比ではない。成るべく山の方をヘヅル方針を取りながらス澤の合流點まで來た。

急斜面に廣い河原を作りながら流れ込んで來るス澤の水色は、すつかり濁つてゐる。今まではすんでゐた小澁川の水色も、此處ですつかり濁つてしまつた。

雨は相變らず降つてゐる。條をつく雨とでも云はうか。見上ぐれば、キザ山のいくつかの鞍部からは、無數の瀧が連續してゐる。眞白にたぎつてゐる水の色は、まるで殘雪かと思はれる位である。微動だもしてゐないかの樣である。

時がたてば水は濁るばかり、水量も增す一方である。雨は益々强く降りかゝつて來る。止むなく徒渉は斷念して引

き返す事にする。時に八時五十分であつた。災された山旅は、あくまで惠まれなかつた。

小澁川の增水のため徒渉が不可能となつた場合に、行者などが通る道が右岸にある事を聞いてゐたので、其の道を見出して小澁湯まで下る事に決し、右岸の尾根へとりついた。地圖上の澁の字と川の字との間にある尾根である。

かなり瘠せてゐる尾根なので間違ふ心配はなかつた。岩がかなりある。木の根がはびこつてゐるし、踏跡があるので比較的樂に上れる。ふりかへれば、キザ山の峯がよく見える。眞白にいくつもの瀧が見える。流れ落ちてゐるとは思はれぬ位に變化がない。大聖寺平からの尾根も上の半分程は見える。併し、下の方はすべて霧につゝまれて居り、廣河原の地點さへはつきりとは分らぬ。道は上へ上へと續いてゐる。雨は止みさうにもない。體はすつかり濡れてゐる。手にはめてゐる手袋は、何度しぼつてもすぐグショ〳〵になつてしまう。段々水が增すのであらうか、小澁川の水音は何時になつても聞えて來る。左側にある尾根と合して、大きな尾根となる附近には道があるのであらうと上りに上る。道は馬の脊の樣な所を上へ上へと進んでゆく。

餘り上りすぎた樣な氣がする。左の方へ巻きたくなつてくる。

幸なる哉！　其の時の氣持は此の言葉で充分である。右の方から尾根を横斷して左に下つてゐる道を見出した。午前十一時七分。相變らず霧は深いし、雨も盛に降つてゐるので遠くは分らない。左の尾根とは合しない中に道に出遭つたのである。千九百米突の附近と思はれる。河原から此の地點まで、途中一ケ所を除く外、右へも左へも巻けさうにもない。唯一ケ所雜草の生ひ茂つた平な地點があつて、左の方へ踏跡があつた樣な氣がした。多分河原へ下つてゐるものであらう。

小憩の後、いよ〳〵道を進む。此の道は高山澤を横切るまで大した高低なく進んでゐる。大河原から大聖寺平へ行く者は、渉れゝば小澁川を徒渉してゆくし、水が增してゐれば高山裏を廻つてゆくのである。大河原の人夫達は餘程此の道の惡い事を恐れてゐるらしい。道の惡い上に、そんな譯で通る人が殆んどないため、益々惡くなる一方である。

削り取られた樣な急傾斜のガレを横切る。幾かゝえもある樣な倒木が道をふさいでゐる。時としては人夫の鋸で道

を開けて行かねばならぬ事さへある。雨は止まぬ。霧ですつかり包まれてゐる。時間はかゝる一方である。

約一時間もたつた時、雨は小降りになり、霞も時々は薄くなつた。此の時、漸く高山澤の對岸の尾根が見えた。高山澤の水音も仲々高い。尾根に立派な道の様なものが見える。木馬道だそうだ。

道は深く高山澤の谷の中へ這入つてゆく。高山澤に沿つて新しい立派な木馬道が見える。此の木馬道は幅が一間もあり、二尺位の間隔を置いて横木が渡してある。此の上へ橋の様なものをのせ、其の上へ材木を積んで人が引くのである。漸くにして雜草の中に古い木馬道を見出した。上の方から來て吾々の來た所とは丁字形をなして下つてゐる。生ひ茂る茨や薊と戰ひながら、降りしきる雨の中を、濡れねずみになつて道を求めたが得られない。一方、木馬道はあくまで木馬道であり普通の道ではないのである。木馬道は一般に高く切り立つた崖の上などで終つて居り、其處から遙か下へ木を落す様になつてゐるので、木馬道を進めば何時かは進退の谷まつてしまう時が來るものである。如何に美しく深林の中に出來てゐても、一般に道として採用する事は不可能である。）併し、他に方法のない今は、木馬道を選ぶより外はない。此の木馬道は、ことに依ると仮屋

今までは針葉樹林であつたが、そのため道を失ふ事は少なかつた。併しこれからは濶葉樹林が多くなつてきた。雜草に道が覆ひかくされてゐる事も度々であつた。幾度か道を失つたが氣永にさがして別に迷ひ込む事はなかつた。吾々の行程は遲々としてではあつたが、幸に脇道へは這入り込まずに進んで行つた。

黒ベイ澤の手前まで來たとき、草の生ひ茂つた平な場所へ來た。古い小屋の跡らしく思はれた。道が無くなつてゐる。漸くにして雜草の中に古い木馬道を見出した。上の方から來て吾々の來た所とは丁字形をなして下つてゐる。生ひ茂る茨や薊と戰ひながら、降りしきる雨の中を、濡れねずみになつて道を求めたが得られない。一方、木馬道はあくまで木馬道であり普通の道ではないのである。木馬道は一般に高く切り立つた崖の上などで終つて居り、其處から遙か下へ木を落す様になつてゐるので、木馬道を進めば何時かは進退の谷まつてしまう時が來るものである。如何に美しく深林の中に出來てゐても、一般に道として採用する事は不可能である。）併し、他に方法のない今は、木馬道を選ぶより外はない。此の木馬道は、ことに依ると仮屋

谷を渡つて向側まで通じてゐるかも知れぬと云ふ人夫の言葉を何よりの頼りとして進んだ。古い木馬道は危い。悪場を二三ケ所通つて、數丁下つて來た。小さな尾根を越したとき、ひどいガレの手前で此の木馬道は切斷されてゐた。多分此處から材木を下へ落したのであらう。ガレをヘヅル事などは到底出來るものではない。

木馬道を上ればよかつたのである。小舍跡から少し上れば道が分れてゐた。木馬道は上へ、道は平についてゐた。

あたり一面に山苺の木である。眞青な實は八月にならねば吾々を小躍りさしては呉れさうにもない。茨との戰は何時になつたら止む事やら。

いよ〳〵、深い板屋谷の窪に這入り込まうとした時、其の尾根の端に立派な小舍の跡があつた。柱だけになつた吹きさらしのものではあるが、奥行は五六間あつた。

よく見ると板屋谷から此の小舍まで立派な道が附いてゐる。道である。今迄のは踏み跡である。これからが道である。

ジクザツクにどん〳〵下つてゐる。小舍跡から二十分も歩いた時、再び同じ樣な小舍のある所へ來た。此處は小さな尾根になつて居り、道が分れてゐるかも知れぬと云ふ人夫の言葉を何よりの頼りとして進んだ。古い木馬道は危い。悪場を二三ケ所通つて、數丁下つて來た。小さな尾根を越したとき、ひどいガレの手前で此の木馬道は切斷されてゐた。多分此處から材木を下へ落したのであらう。ガレをヘヅル事などは到底出來るものではない。

木馬道を上ればよかつたのである。小舍跡から少し上れば道が分れてゐた。木馬道は上へ、道は平についてゐた。

あたり一面に山苺の木である。眞青な實は八月にならねば吾々を小躍りさしては呉れさうにもない。茨との戰は何時になつたら止む事やら。

いよ〳〵、深い板屋谷の窪に這入り込まうとした時、其の尾根の端に立派な小舍の跡があつた。柱だけになつた吹きさらしのものではあるが、奥行は五六間あつた。

よく見ると板屋谷から此の小舍まで立派な道が附いてゐる。道である。今迄のは踏み跡である。これからが道である。

ジクザツクにどん〳〵下つてゐる。小舍跡から二十分も歩いた時、再び同じ樣な小舍のある所へ來た。此處は小さな尾根になつて居り、道が分れてゐるかも知れぬと云ふ人夫の言葉を何よりの頼りとして進んだ。古い木馬道は危い。悪場を二三ケ所通つて、數丁下つて來た。小さな尾根を越したとき、ひどいガレの手前で此の木馬道は切斷されてゐた。多分此處から材木を下へ落したのであらう。ガレをヘヅル事などは到底出來るものではない。

木馬道を上ればよかつたのである。小舍跡から少し上れば道が分れてゐた。木馬道は上へ、道は平についてゐた。

あたり一面に山苺の木である。眞青な實は八月にならねば吾々を小躍りさしては呉れさうにもない。茨との戰は何時になつたら止む事やら。

いよ〳〵、深い板屋谷の窪に這入り込まうとした時、其の尾根の端に立派な小舍の跡があつた。柱だけになつた吹きさらしのものではあるが、奥行は五六間あつた。

よく見ると板屋谷から此の小舍まで立派な道が附いてゐる。道である。今迄のは踏み跡である。これからが道である。

外は再び激しい降りである。それでも、一生懸命火にシヤツなどを乾してゐる自分の氣持が自分で分らぬ。皆もこんな氣持でゐるのであらうが、兎に角、皆一生懸命に乾してゐる事だけは事實である。

六時すぎ雨の中を再び歩き始めた。大河原に向つて歩いてゐると云ふ氣が此の時初めてした。今までは道を索すために歩いてゐたのである。小澁湯への分岐點からは、道もいよ〳〵よくなつて來た。

ふり返つてみれば、小澁湯の下は大きな淵になつてゐる。唯、水の恐ろしさを痛切に感ずる。

夕闇が段々に迫つて來た。雨は其をやはらかく包んでゐる。知らず知らず、去年Tと共に此の道を歩いた事が思ひ出される。あの時は浮き立つ樣な氣持で下つて行つた。赤石の峯は、小澁の谷間から吾々を見送つてゐて呉れた。暑かつたが、併し氣持よく太陽は吾々を祝福してゐてくれた。今日は一日中太陽の光を見なかつた。雨は未だ降りついてゐる。止みさうにもない。

いつか日も暮れてしまつた。釜澤の燈火を見たときには唯、うれしかつた。

三正坊のお宮でラテルネをつけた。

釜澤の家々は靜にねむつてゐる。唯三伏への道と合しを上へ上へと上つてゆく。桑畠を拔けた。段々ラテルネの光が增してくる。の中にねむつてゐる水車のゆるやかな廻轉も見られない。唯、ぼんやり燈火が雨の中に散らばつてゐる。上藏を出てから大河原まで二三人の人に出會つた。「おかへり」と云はれるとうれしかつた。

小澁川の川音を左に聞きながら大河川へ腰を下したのは九時であつた。丸かつた」と云つてくれた時、自分も本思つた。敗殘の二字は、此の時ばかり二人の人夫も嬉しさうに濡れながら入口に立つてゐた。

雨は未だやまずに降つてゐる。

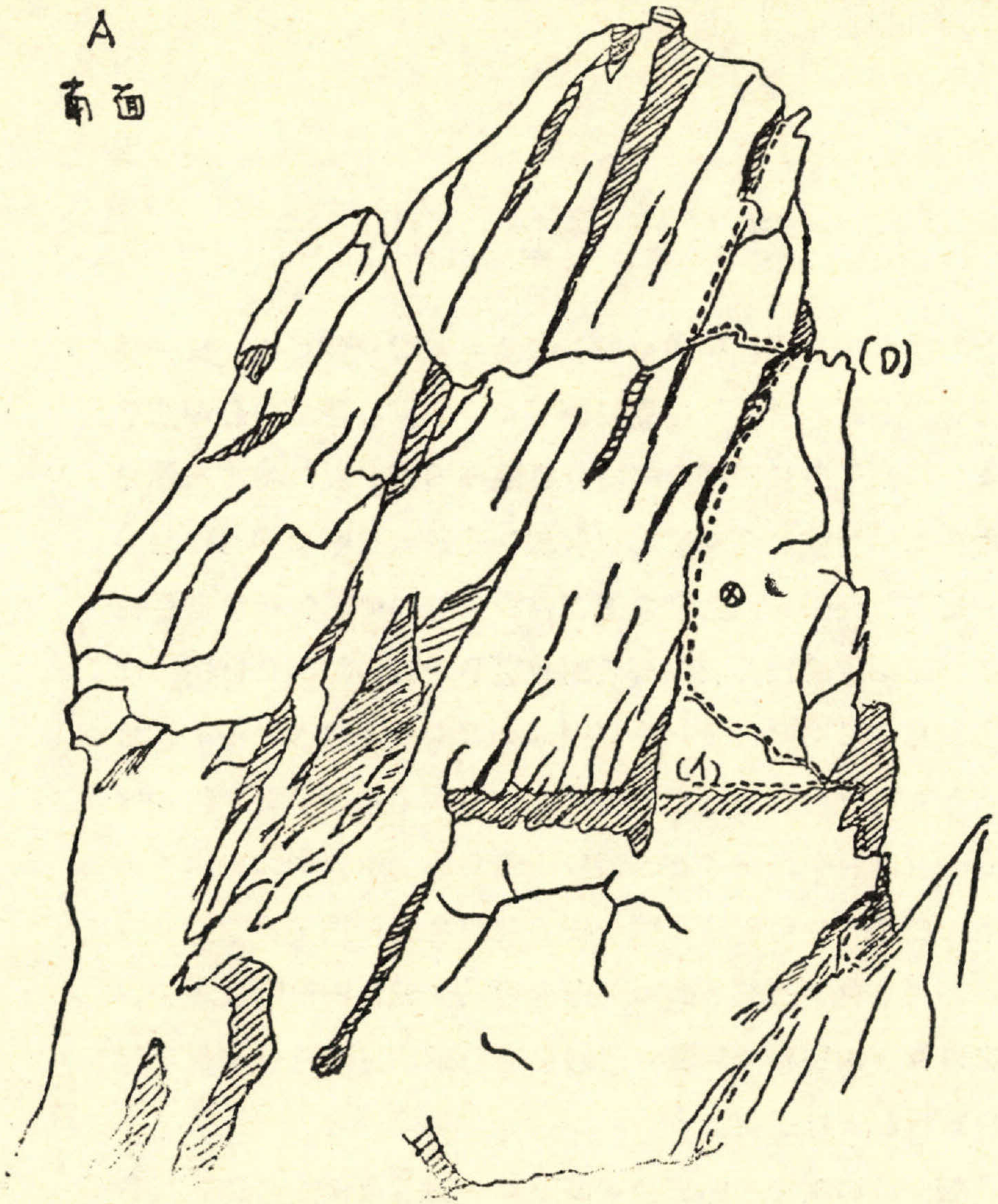
小槍

横倉吟三郎

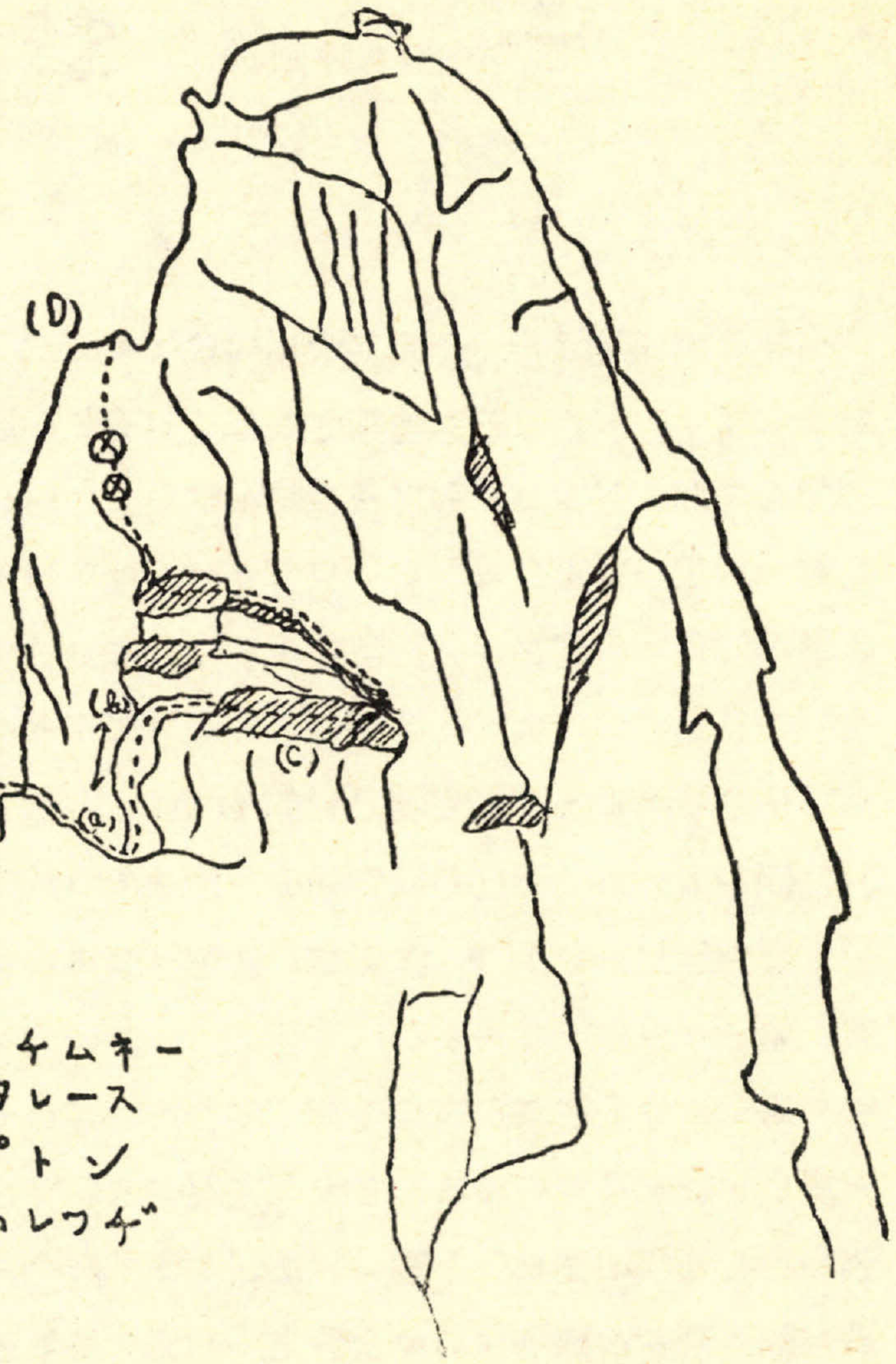
去年の夏(昭和二年)中島君外三名の友と共に大町から薬師岳を通り、大槍に出た時自分は初めて小槍を西鎌尾根から眺め、登りたいなーと云ふ氣持を持つた。その氣持は中島君も又同じであつた。かくて我々は是非、來年は小槍の登攀をしやうと約束した。其の去年の計畫を決行するため、今年は八月六日八ツ峯登攀の歸途、只一人上高地に入り。すつかりモダーンになつてしまつた上高地に一泊して、翌七日大槍へと向つた。去年は轉んだり辷つたりして、瞬く間に下つて了つた槍の雪渓も登るとなると大變だ。殺生まで雪渓の下から二時間か一時間半も掛つたらう。漸く四時半頃槍の肩の小屋へ着いた。肩の小屋は初めて泊つて見たのであるが、中々立派なものだ。二階の寢室兼居間に旅裝を解き、一服して後槍ケ岳へ登つて見た。しかし霧が四方を覆つておるので何も見る事が出來なかつた。霧の中に端座すること十分餘りもして晴れさうにも無いので小屋へ降り、二階に横になつて霧の晴れるのを待つた。午後六時頃窓際の人が槍の頂上が見えた、と叫ぶ聲に外を見れば霧は全く晴れて大槍、小槍共に全容をあらはして居る。頂上には瑞西の國旗ででもあらうか、赤の旗地に白く星を染め抜いた、旗が風に飜つて居る。登つて來る時殺生に居た三人の外人が頂上をきわめたらしい。それ晴れた、と云ふので小屋に居た人は皆頂上へと行つた。僕も又小屋に居ても詰まらないので小槍の下檢分でもして置かうかと思ひ。槍の肩から直ぐ左へ大槍の裾を搦んで行くルートを取つて、大槍へ登る半途の處から出て千丈澤に落ちて居るガレを横ぎり、續く大槍の裾の岩壁に沿ふて大槍のザツテルに出た。

遠くから見ると手掛りも足掛りもない長方形の岩が立つ

A
南面



B
北面



(A)－(B) チムキー
(C) テレース
⊗ ピトン
(D) アンカレフチ

て居るやうに見える。小槍もいざ近かくへ來るとホールドも充分あり、又足掛りも充分あるので、明日の成功を樂しみに小屋に歸る事にした。歸りは途を變へて千丈澤に落ちて居るガレを登つて大槍の中途へ出た。しかしこの路は登りのためか大分困難を感じた。逆に肩からザツテルへ出る時この路を下つたら蓋し一番樂な路だらう。小屋に戻れば丁度晩飯思はぬ御馳走のわらび、カレー等に思はず食べ過ぎ滿腹の腹を抱へて、二階の部屋で越後の人のおけさ節等を聞いておる中疲勞の爲め、ぐつすり寢込んでしまつた。

翌くれば八月八日風は少しあるが仲々良い天氣だ。六時半頃目を覺ますと昨夜騒いだ連中も誰れも居ない。連中は今朝早く穗高へ向つたさうだ。僕も計畫を實行せんと七時半頃からザイルをリユツクに詰め、ドロツプを頬張つて輕裝で小屋を出て、昨日様子を見て置いた肩から左へ折れる路を取りザツテルに出て此處で暫く休息した。

暫時の休息の後愈々小槍登攀に掛つた。以下圖に從つて説明しやう。

初め南面を登らんとしたがルートを間違へ、(イ)の所に出て了ひ甲南高校の伊藤氏が打たれたとかいふハツケンに手が屆かないので殘念ながら引返へした。かくて面を變へて今度は北面を登る事にし、小槍の裾の岩壁に沿ふて少し下り、奥の深いチムニー(圖a—b)を登り(c)の可成廣い長方形のタレースに出て、此處に又暫く止まつた。風が少しあるので何んだか氣味が悪かつた。タレースから二段の石段の様な石を次々と登つて行かうとしたが、高さが胸位ひ迄も有るし、又苔で手に餘り力が入らないので、そこを登るのは思ひ止まり、タレースの處から出てをるヒダに沿つて斜に登り漸くにして二段目の石段の上に出た。今度は少しくオーバハング氣味の岩壁を登り、更に左手の稜の處を登つてアンカレツヂに達することが出來た。此處は人三人位は充分居れる所である。このオーバハング氣味の岩壁は神戸高商の人が打たれたとかいふ一本のハツケンと他の一本のハツケンに依り、容易に登ることが出來る。

アンカレツヂからは縱に大きなヒダを利用して容易に小槍頂上を極めることを得た。リユツクの中のドロツプを出してロに含みながら暫し四方の景色に眺め入つた。西の方には双六、蓮華、笠等の諸山間近く横はり、藥師は遠く雲

フスの王者らしい處がある。又北は巍々たる北鎌尾根が大槍からずつと下がつておる。

この壯大なる景色と頂上をきはめた愉快さに思はず「山の歌」を口づさんだ。大槍の頂上に目をやれば多くの人が僕の方に手を振り聲を上げて聲援して居てくれた。僕も之に答へて八ツ峯で習ひおぼへた「エホホー」を早速應用した。十分も頂上に居て後漸く降りはじめた。降りはザイルから小屋に歸つたのは午前九時少し過だつた。ザイルをダブルにし頂上とアンカレツヂに有つた上等の捨繩を利用して北面のヒダに沿ひ、アンカレツヂで一回の休憩をして後、ザツテルまで殆んど一氣に下りてしまつた。ザツテ又普通の山では到底味へない實に愉快な氣持を味ふことが出來る。

要するに少しの注意を怠らなければ小槍登攀等は實に安全なものである。身體は餘り疲勞せず、頂上を極めた時は出來る。

三、一二、五

寶川遡行

中島嘉一郎

本年六月、所謂奥上州の最奥部をなす、清水峠以東尾瀬に到る大利根水源の上越國境山脈縱走を計畫した。相當面密な日程と準備とを期したけれど、時既に梅雨に入つて、烈しくは無かつたが連日の陰雨と、折柄田植時であつたのを擇むだのが寶川である。尤も、國境尾根に出づるには、最

水越えも考へて見たが、距離も可なり遠く、變化に乏しい。又寶川の他には、大芦から尾根を天ケ立に出で、菊石谷及び布引谷のセリを經て、朝日岳に達する、越後道なるものがある由だが、切開けの不明で、其の困難は寶川の比ではないと思つたのである。

寶川は上野から越後に越える清水峠の東方國境から、南に派出した支脈笠岳（一九四五m）と、其の東北方朝日岳（一八二〇m）から東南に延びた尾根が、一六六〇mの圏を最高點として、南に其の肩を張つた布引山との間に起つて、東南に流れ、笠岳の南方一八五二mの三角點附近から東に出る支流廣河原を合せて、やがて南に向ひ、布引山の東、天ケ立（一六二七m）の南から發する大支流イタイウ澤（地圖に記號のある澤）を初め北を限る天ケ立の尾根と、南を受る笠岳より連る、一八五二、一六〇八、一四一九、一三三八mの三角點を持つ長大な尾根との間に、南北から數多の小澤を集めて、上楢平上流に於て屈曲南流して、寶川温泉を經、利根本流と一畝田附近で會流してゐる。

寶川温泉は地圖にある樣に、寶川の落合から六丁餘の處にある細やかな温泉で、湯は川の兩岸に出てゐる。右岸に吊橋を渡ると温泉宿で、煤けた二階建の本屋に川べりに下つて湯殿がある。ラジウム泉とかで、色々効能はある由だが、緣のなさそうなものばかりだつたので忘れてしまつた。左岸道に面して湯口は二つ許りあつて、石で固めた湯壺には、草ぶきの屋根と疎らな板圍ひがしてあるばかりだが、これさへ朽ちて、外から全く見通しである。久保やに派出した支脈笠岳（一九四五m）と、其の東北方朝日岳（一八二〇m）から東南に延びた尾根が、一六六〇mの圏を最高點として、南に其の肩を張つた布引山との間に起つて、東南に流れ、笠岳の南方一八五二mの三角點附近から東に出る支流廣河原を合せて、やがて南に向ひ、布引山の東、天ケ立（一六二七m）の南から發する大支流イタイウ澤（地圖に記號のある澤）を初め北を限る天ケ立の尾根と、南を受る笠岳より連る、一八五二、一六〇八、一四一九、一三三八mの三角點を持つ長大な尾根との間に、南北から數多の小澤を集めて、上楢平上流に於て屈曲南流して、寶川温泉を經、利根本流と一畝田附近で會流してゐる。

寶川温泉は地圖にある樣に、寶川の落合から六丁餘の處にある細やかな温泉で、湯は川の兩岸に出てゐる。右岸に吊橋を渡ると温泉宿で、煤けた二階建の本屋に川べりに下つて湯殿がある。ラジウム泉とかで、色々効能はある由だが、緣のなさそうなものばかりだつたので忘れてしまつた。左岸道に面して湯口は二つ許りあつて、石で固めた湯壺には、草ぶきの屋根と疎らな板圍ひがしてあるばかりだが、これさへ朽ちて、外から全く見通しである。久保やに一畝田あたりの子供等がお晩過ぎに來て、樂しそうに此原始的ないで湯にひたつては戲れてゐるのを眺めながら、延んびりと煙草でもくゆらして居ると、山旅の門出といふ樣な緊張した氣持も、每日思はしくない空の鬱たうしさも忘れて仕舞ふ。又此の春から經營者が變つたとの事で、若い主人の氣輕な親切も、うれしいものの一つである。

此の温泉への道は、久保から畑の間を一畝田へ行く途中から、左へ吊橋によつて利根の本流を渡り、寶川の左岸に沿つて行くのが本道で、温泉迄は立派な道である。今一つ地圖にもあるが、久保に入る前、横田を過ぎて間もなく、利根川を右岸に越して直接に温泉に到る近道もあるけれど、前者に比べて遙かに道は惡いらしい。大した廻り道にもならないから、本道を行つた方が賢明であらう。

其の岐路の入口にも、次の様に書いてあつた。「寶川温泉ニ行クニハ、此ノ橋ヲ渡ラズニ、久保ニテオ尋ヲニナルノガ便利デス。」

寶川溫泉から上流は急に悪くはなつても、上楢平あたりまでは明かに道と云ひ得るものはあるが、それ以上は全く踏跡となつて、甚だ不明瞭となつて仕舞ふ。僕等U、Y、K と僕と四人が、永い滞在の遺瀬なさから脫れて、溫泉を出發したのは六月二十八日であつた。早朝天氣が悪くて雨さへ降つたので、久保からの人夫二名が約束の時間に來らず、漸く勢揃ひして出掛けたのは、既に九時を過ぎてゐた。思出の湯の宿を振返り、又振返り、寶川左岸の小徑を辿ると間もなく黒い砂の禿地を通る。此の寶川には廢鑛があると聞いてゐたが、多分此のあたりは其の一部分であらうと思はれる。何を採掘したものやら、何時頃のことやらその爲進行までも妨げられる程の藪ではない。二十分餘聞いても見なかつた。宿から三十分も來ると、徑は、下楢平の手前で直角に右に曲つた河が直ぐに又殆ど直角に舊に復するところに出る。其の外側に沿つて、十間許り足掛りの悪いところをへつる様に過ぎると、もう下楢平に入つて居るのである。地圖で見ると、溫泉から來た點線の道が盡きるところに、小さい平坦地のあるのがそれで、楢や柳の中に入る。十分も歩むと再び河岸に出る。狹いながら河原をなしてゐる。ショ澤落口の二丁餘下手になつてゐるので、アイノ澤、ヘネコ澤等は既に過ぎてゐた。他圖の寶川

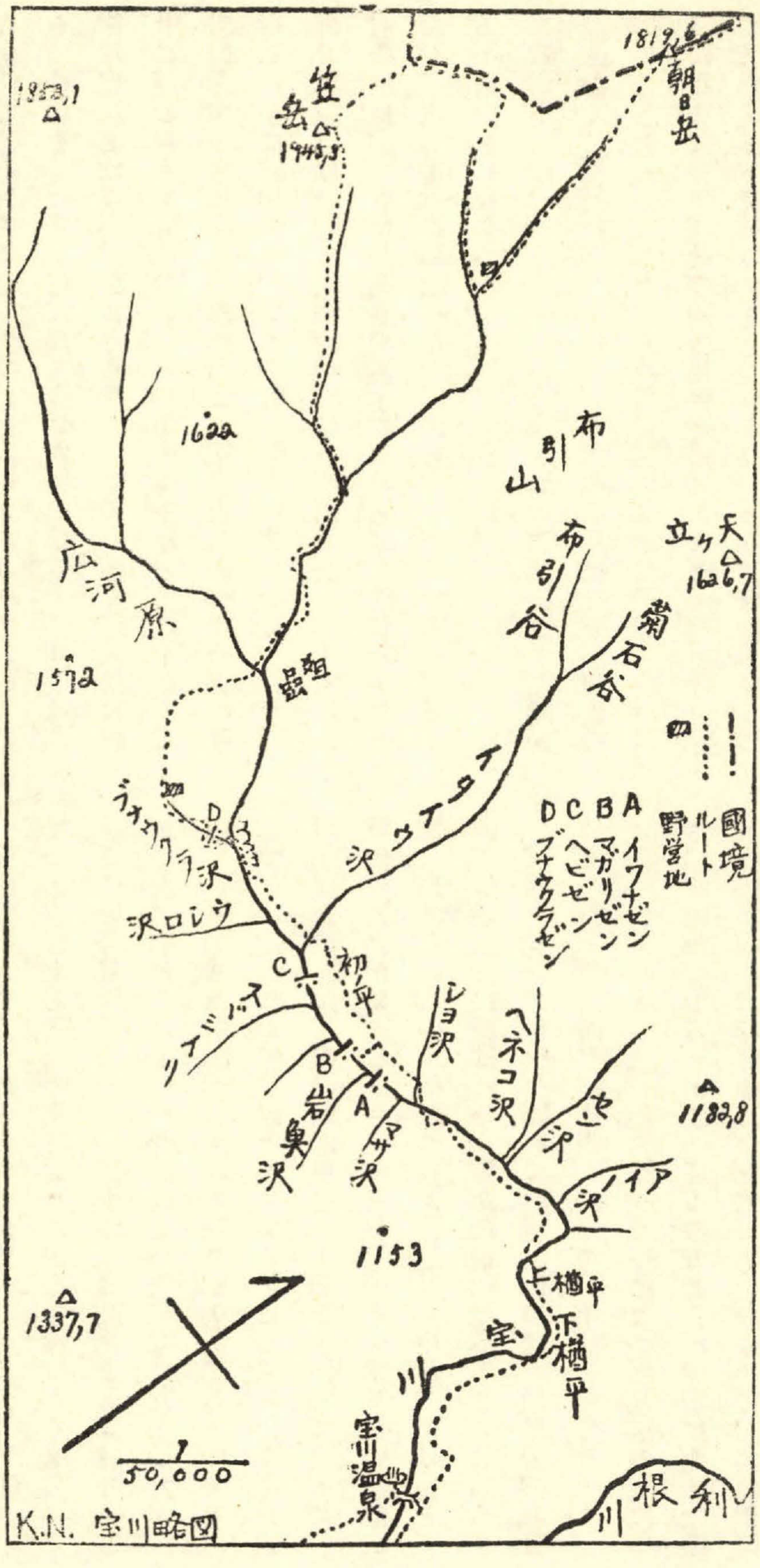
とある寶の字のところへ落ちるのが間ノ澤で、ヘネコは川の字の右へ落ちる、二股の澤の西のがそれで、東のはセン澤といふ。「セン」とは此の地方で瀧のことをいふので、瀧に富むから此の名がある由である。センヘネコ澤と上流に續いてゐる。一町も行けば此の岩盤は河の全幅に平は地圖で見ると、一つになつて寶川に落ちてゐる樣に見えるが、實は雨澤の落口は二十間程離れてゐて、其の中間にる。地圖にある、天ケ立から東南に延びた尾根が、一四〇は、天狗岩とでも名を付けたい樣な形の大きな岩が突出してゐる。

武田久吉氏は、「山岳」第十六年第三號に載せられた寶川の遡行記に、地圖の如く雨澤が合してゐるものとしてゐられるが、温泉で會つた山口の吉野辰次さいふ鯰釣りも、僕等の人夫も共に落口は別であると云つて居るし、此の河原から見た樣子も、前記の樣に接近してはゐるが、獨立してゐるものと思はれるのである。

寶川本流は、喝水期であれば途中二三の瀧はあるが川沿ひに岩から岩へと大した苦勞もなしに行ける由で、寧ろ其の方が樂だとの事だが、此の時は大出水では決してないが、水量の豐富な時期であるため、左岸一〇〇m許り上にあるショノ平を通ることにして、シヨ澤に入る。一間幅の底の平な澤なので何の邪魔もない眞只中へジヤブ〳〵踏み込んで、狹くなれば右手の藪を行くと、間もなく荒地になつた、小さな平地に出る。其處で澤は右へ切れて、僕等は眞と、足場は良くなり、へつりながら再び右岸の濕つた藪の中に入る。五分許りで又河原に出る。赤黄色に染つた、白質の平らな岩盤が、河の中程から左に寄つて、高く細長く上流に續いてゐる。一町も行けば此の岩盤は河の全幅に平にひろがつて、水は五寸位の深さに、一面にさざ波をたて〻穩かに流れる樣になる。此處で左岸に移ると、右から同じ岩盤の續きが其の底をなしてゐる小さい澤が入つてくる。地圖にある、天ケ立から東南に延びた尾根が、一四〇〇mのところから南にきれて寶川に落込む南面から、流れ出るショ澤である。此の北にある猫の湯へは此の小さな澤を遡ること十三町との事だ。

ろを登つて行く。大きな樹の三四本突立つてゐるあたりから次第に尾根は廣くなつて來るが、これから上が初ノ平で、其の入口に當つてゐる。十一時二十五分此の木の下で晝食をとることになつた。本流からは一〇〇m位上に當る處で、丁度此の下に曲りセンが落ちてゐる。急斜面を澤近くまで降ると、とう〳〵の音も凄く、二段にくの字なりに曲つた此の瀧は、相當な觀ものである。寶川の此附近は瀧に豐富で、少し下流にイワナゼン、上流にヘビゼン等がある傾斜といふのみで、濕つぽい藪續きで、餘り良い感じのする處ではない。小さい流れを三つ横切つた。踏跡はこのあたりを過ぎると、もう全く見當らなくなる。四十分でイタイフ澤にぶつゝかる。相當大きいけれど、倒木や岩でごちや〳〵した、如何にも醜い澤で、水量は少なかつた。急斜面を滑り降りて澤を渡り、對岸を又攀き登る。これからは本當の藪分けで、偃松泳ぎよりはよいが、荊棘の攻撃も仲々侮り難い。横につゝばつた小枝を踏み越えたり、潜つたり、幾分疲勞を覺えて來た身體には樂な仕事ではない。イタイウ澤から一時間近くも可成な斜面を搦んで行くと、河に、小さい岩ばかりの淺そうな所を見出し、右岸に渡る。

イタイウ澤から此處までの間は距離も所要時間も長くはないが、最も困難な場所であつたとへ水が渇れてゐて河を遡つても、餘り樂だとは思はれない。ブナウクラ澤と本流との間に狹まれた尾根を、先端近く乘越してブナウクラ澤に出る。丁度落口近くにあるブナウクラゼンの下で、渡渉して左の斜面を搦んで瀧の上に出る。此の瀧は取立てゝ云ふ程のものでもなく、越えるにも大した骨は折らない。小さい澤なので之を中心に、左岸に越え右岸に渡つて、瀧木の少



ないところを擇んでは、大體西に向つて高みへ高みへと進む。小枝を分けて一時間餘も歩いたが、豫定の時間とは非常に遅れて仕舞ひ、藪抜けも仲々困難ではあり、人夫は頻りに荷の重きを託つので、五時半やゝ平なところを卜して野營をする事にする。思つたより案外苦しかつた今日の遡行をこゝに打切つて、ブナや杉の大木の間に荷を下した。野營地附近は一帯に東に向つて緩い傾斜をなし、大木の疎林の間は、一間位の高さの灌木に埋められて陰氣なところだが、水も手近に細流をなし、倒れたブナの枯木に、薪にも不自由をしなかつた。

寶川本流は、ブナウクラ落合から、廣河原落合までの間が最も悪く、遡行は甚だ困難で、人夫の話では殆ど不可能の様なことを云つてゐた。その爲、ブナウクラ澤が一般の通路になつてゐて、此の西の尾根を乗越して廣河原の合流點に出で、再び寶川の本流をつめるのである。笠岳へ登るには、三角點から東南に本流へ落ちる澤に由つてするものと、廣河原落合から尾根傳ひするものと、廣河原を遡つて一八五二mの三角點を持つ峯へとりつくものとが考へられるが、初めのが最も容易だと思ふ。

梅雨季に入つた此の頃の天氣には、全くうんざりして仕舞つた。打上と寶川溫泉で四日の滯在を餘儀なくせられ、今又此の野營地で二十九、三十の二日間止まらねばならなかつた。七月一日も、餘り思はしい天氣ではなかつたが、雨も止み、時々雲間から洩れる朝日が雨に濡れた天幕を照らす様になつたので、愈々出發することにする。今迄氣が付かなかつたが、野營地からは木の間をとほして東方に、至佛や大高が見える。今年の三月、一本の木もない、眞白な、聖者そのものの様だつたそれ等の山が、今は何といふ、黒い密林に覆はれた、穩かな山に見へることだらう。

天幕を疊み、荷物を纏めて出發したのは、最早十時五分前だつた。前と同じ様に西へ向つて、小枝を押分け〳〵、高みについて進む。一時間許りで平になつた尾根の上に出る。此處から山腹を本流へ降るのであるが、密に生えた灌木に邪げられ、時には濕つた土に足を滑らせて、其の困難は並大低ではない。傾斜は次第に急になつて、小さな流れの窪にそつて、廣河原の落合に降りたのは十一時五十五分だつた。水も廣く流れて、廣河原の渡渉は何でもない。兩澤に挟まれたじめ〳〵してゐる草地を横切り、本流の右岸

に出でて、岸沿ひに藪の中を登る。此の附近からところどころ殘雪が岸にくつ付いてゐて、通過を容易ならしめてゐる。暫く進むと、河は右岸に沿つて淵をなして足掛りのない岩が立つてゐるので、止むなく左岸にうつり、五、六間の高さのところを搦んで行く。じめ〳〵して滑り易いが、二、三寸の草地で、時々藪の障害はあつても比較的歩きよい。人夫の一人は先刻の淵を臍のあたりまで水にひたして渡り、右岸沿ひにある、雪の棚をどん〳〵遡つて行くので、少し自分等は後になる。やがて渡り易そうなところを見て、皆右岸の雪の棚にうつる。時々足をかけた雪が、バサッと突然崩れ墜ちるには驚かされる。兩岸の雪棚は次第に接近して、やがて一面の雪渓となつて、非常に進み易くなる。もう邪魔になるものは何もない。間もなく笠岳の三角點から東北に出る雪渓の出合に着く。午後一時だ。こゝへ來る少し手前で、クラシ、の子を見付けた。向ふも人間樣の姿を見て、膽をつぶしたのだろう、左手の藪に驅け込んで行つた。二人の人夫は鐵砲があつたらなあと、しきりに悔しがつてゐた。彼等は獵師なのである。

晝食を濟し四十分出發。本流と分れ笠岳へ雪渓を登る。すぐ左右に岐れるのを右にとり、次第に高さと傾斜とを增して、繩のない自分等は危險をさへ感ずる樣になつた。左右兩側ともシヤクナギ等の灌木で、右手には大きな岩壁さへある。勿論搦んで行き得る樣な段はあつた。左手は岩にはなつてゐるが、聳えてもゐないので之を取る。Y君だけは一足先に右へ行つて仕舞つた。シヤクナギの繁みに縋つて岩を攀登るのは仲々骨が折れる。度々岩の上に腰を下し、寶川の東に長い平らな布引山や、その後に顏を出す天ケ立を眺めて息を入れる。Y君は向ふ側の繁みの中で、惡戰苦闘をしてゐるが、こちより困難な爲め僕等よりは下の方に居る。頂上とおぼしいところはすぐ近くに見へるが仲々捗どらない。繩さへあれば苦もなく登れるのに、何の邪魔もない雪渓を横に見て、青息吐息である。向ふ側は中程から上は草尾根になるので、頂上へ着いたのはY君の方が少し早かつた。四時漸く三角點の東北の平な草地に荷を下す。高山植物の白や黃のきれいな花が、二、三寸の青い草原の中に咲き誇つて、今迄苦しんで來た自分等を甘い、平和な氣分に涵してくれる。頂上までは直ぐで、ちよつと盛上つた、偃松とシヤクナギに取りまかれた峯に、二等三角點が

ある。風も強く、霧が湯檜曾川の谷から舞上げてくるので、二十分で頂に別れを告げ、再びリュックサックを肩に國境に向ふ。西北の尾根に出ると古い切開けがあるが、すぐ消えてひどいシヤクナギや偃松の枝泳ぎとなる。少し右へこぼれながら進むので、度々乗つた枝から滑り落ちて、腹の底からへばつて仕舞ふ。三十分もかゝつてやつと國境に出で、直に朝日岳との鞍部に下る。此の右への尾根は低いため、霧でもまいて見透しが利かないと、清水峠の方へ行つて仕舞ふ恐れが多分にあると思はれた。途中から草地に到ると應々にして忘れて居るのがある。澤遡りのみを目的とするならば、岩魚釣りを業としてゐる者を傭つた方が、便利だらうと思ふ。日當は食料先方持ちで三圓だつた。之は少し意外であつたが、田植時の手不足につけ込んでボツたのだらう。時期としては、寶川が中流以上悉く雪に埋められて、尾根の偃松泳ぎの必要のない四、五月が最も好いと思ふ。獵師等も、獲物の關係ではあるが、皆此の頃山に入つて縦横に駈け廻るのである。

× × × × ×

寶川を目的として書いたのだから、こゝで打切ることにしやう。此の行には、久保の林力及び深津與吉二名を人夫として行つた。力さんの方は地理に明るく、力もありそうだが、二人共に無口で無愛憎である。でも決して人は悪くないから却て良いかも知れない。彼等は獵師であるために、澤の名に到ると應々にして忘れて居るのがある。澤遡りのみを目的とするならば、岩魚釣りを業としてゐる者を傭つた方が、便利だらうと思ふ。日當は食料先方持ちで三圓だつた。之は少し意外であつたが、田植時の手不足につけ込んでボツたのだらう。時期としては、寶川が中流以上悉く雪に埋められて、尾根の偃松泳ぎの必要のない四、五月が最も好いと思ふ。獵師等も、獲物の關係ではあるが、皆此の頃山に入つて縦横に駈け廻るのである。

翌二日は午前中は天氣も良く、本流の雪渓をつめて、朝日岳に達した。傾斜ゆるく殆ど最後まで雪渓を行く事が出來たので大變樂で、野營地から一時間であつた。

八ツ峯行

磯野計藏

八月一日

今日で二日目だ。毎晩、夜晝となくランプをとぼして飯を食ふ外はする事もなく、皆少々氣が變になつて居るらしい。七月は上高地であの大雨に遇ひ折角の西穗高も小槍もすつとんで仕舞つたうめ合せのつもりで來たのに又この御難とは、劍の頂上へ登つた日馬鹿に天氣が良過ぎて白馬藥師あたりに笠雲がかかつて居たのがいけなかつたらしい。おそろしい勢で風雨があたる、硝子をこはされた明取りから、その度に大粒の雨が吹込むでその下は食糧品やござをかけ下る。二十五分にして長次郎澤出合に至り登りにかかる。八ツ峯にさへぎられて谷の內はまだ眠より元氣も出ない。食ふだけ食つて横になるとそれでも、何時しらあらしの音も眠りをさそふ子守歌の様に聞へて居た。

八月二日

ふと目をさます。ランプはススで眞黒になつたほやの中ツテル日がけて愈々登り出した。岩の壁にホールドを求め

て一足〳〵登る時のジツヘルな感は自分の心の奥底のあるものに觸られる様な氣がした。少時してザツテルに立つ。ここから見る長次郎澤はお庭と云つた感じだ。雪は奇麗だし岩も奇麗で。三窓の方はと見れば一面の霧でただ、その霽れ間〳〵にやせたふら第一峯はほとんど尾根の上をはひのが見るのみ、ここから第一峯に向ふ三窓側を行松づたいに行つた。すぐ引かへして二峯に向ふ三窓側を行つて頂上に出だ。全て一つ一つのピークに積石がしてある第三峯の登りは相當長く且岩も堅く氣持が良かつた。第四峯の下りは、三窓側には、ハクサンイチゲやミヤある捨繩は相當古びて信用出來なかつたのでダ、ブ、ル、でア、ザ、イ、レ、ン、して降りた。第五峯とのコルは八月の事とて三窓側から來て居る雪渓が岩からはなれて居て足場惡く、雪渓の頭にステツプを切つて通つた。第五峯の下りは長次郎雪渓に取り雪渓に下つた。長次郎の下の方は傾斜がにぶくホトンド馳け下りる様になるのでひどくつかれる。出合の源次郎の裾でねころんだ。ブン〳〵云ふ蜂の羽音や青空を行く薄雲にすつかりゆつたりなつて、ついさつき迄居たあの岩峯をふりかへつたのであつた。兵次は岳わらびとあさみをとつて來た。あさみの皮をむいたりわらびをそろへたりして長い〳〵雪渓を小屋へ歸つて行つた。

八月三日

今日昨日よりすこし早く七時前に出發した。長次郎の出合から見る鹿島鑓は何度見ても美しい。朝日が空を紅に染め、天を突く双峯がシルエツトの様に見える。今日はキレツト迄登るので大部登り出がある氷の上をクランポンの爪がカラ〳〵と鳴る。約一時間二十分の後、第五峯と第六峯のキレツトに着き第六峯のあの長いリツヂを登る。長いのであき〳〵する頃頂上に着く。ここからの源次郎尾根の眺はすてきだ。第一峯の左肩に立山が雪の上に浮び長次郎谷に靜かに霧が上つて來る。早速一枚寫眞を取る。これから上ははひ松もなくなり岩の間には、ハクサンイチゲやミヤマキンバイが咲亂れて居る。一つ〳〵のピークもがつしりとしていかにも八ツ峯の名にふさはしい。第六峯より第七峯に至れば左に劍のドームを望み行手には三窓に落る物凄いリツヂ尖、峯奇峯數知れずこの縱走は八ツ峯のそれよりもさらに興味ある様に思はれた。第八峯より第九峯に至り「やつほつほー」を叫ぶ。劍の頂上には二三人の人が動いて居る昨日やつて來た長次郎の一行らしい。誰か落したのだらう。源次郎尾根の上を岩が非常な早さで跳て行く。カン〳〵と云ふ金屬性の音がいつ迄もこだました。下へ〳〵と展開する八峯をふりかへつてパイプに火を付ければ誰からともなく山の讃歌がおだやかな長次郎谷にみなぎり、心は已に都の友の上に飛んで居た。

山小屋



こゝには登山の漫言を最も短い筆で書かれたものを載せたい。山男にも辛味もあらうし甘味もあらう。硬苦しい事ばかり云つてるのが人間の能ではない。さゝやかな山小屋の燈傍からもれて來る山の讃美の聲はごんなに喜ばしい事だらう。

此の欄はこういふ意味で諸氏の自由の氣分に開放し度い。

△

友と四人、三保の松原を出端れた所、駿河灣の興津に面した波打際を歩いて居た。一月半ば、午後四時頃。

何處までも澄み切つた青空に富士は冬の裝ひもうるはしく雪に裹まれぬ此の地方に雪の美しさを見せて居る。富士は雲の上に聳えて初めて其の崇高さを示す。富士川の右岸、漸く五六百米突の金丸山の尾根と、其の昔難所で有名であり、今は何の事も無くトンネル二つで通過してしまふ東海道薩陀峠の上の二等三角点のある濱名岳の二つの平行した山脈の陰より起した左の裾はやがて山頂近く肉眼ではやつとそれとわかる可なり大きな岩塊にまでせり上り、劍ヶ峯から御殿場への降り口の所の隆起から急に今度は右側の斜面となり、寶永山の湧り一寸した窪みを見せてからは四つ五つの小隆起を接空線上に浮出させて愛鷹山塊の王者、越前岳の左裾と結ばれてゐる。そして南面した急なヒラが直接駿河灣に洗はれてゐるのが見える時、即ち富士の全容が明ら様に僕等の眼前に展開して居る時、富士は決して僕等には崇高なものとして認める事が出來ないのである。こんな場合富士位、組し易い山は無い。それが假令内地で一番高い—南の北の槍より—山であらうと三、七八八米突と陸測地圖は敎え様とも、そんな事は僕等を煩はすに何物でもない。

ほかの山でも同じ事、而して富士は特に、中腹ためぐらす帶の様な雲が出て上部と下部だけを僕等の眼に現はして奥れた時、實にそれは實在以上に高くして崇むべきものとして君臨するのである。遙かなるもの、雲の上のもの、人間の手にけがされぬもの、足によつて征服し得られぬものとして僕等の胸に迫るのである。

然しそれも雪あつてはじめて云ひ得る事柄で、「萬古に變る事なき」といふ富士に對する形容詞は雪を戴いてから後の話で、カサ〳〵した夏の終りの富士は又別の意味のものとなるであらう。

△

無は有に通ず。そして白は總てし色を其の内に藏す。冬の日の夕陽は釣べ落しよりまだ速かに沈んで行く。久能の海岸で燒津の後の小さな山影に落ちて行つた夕陽、此處では有渡山の右肩、日本平に最後の栖色を殘して行くのであつた。

雲の上に無言不動の實在の富士は一秒毎に其の色を變へる。白より黑に至る總ての色は此の瞬間に昧ふ事が出來るであらう。

△

波打際を歩いてゐる。文珠岳、瀧爪山濱石岳金丸山、富士愛鷹山箱根そして右に伊豆の山々！

大阪のYは云つた。

「些んな海岸、それも足許にこんな奇麗な小波とも云ふ様な穏かな波が寄せて居るこゝを歩いて居てまでも、そんなに山の事を、山の美を讃えたいかれ。何故、此の美しい海の色、波の私語、夕陽のかげを讃美する氣になれないのか。さつきから一言も水の色はほめずに、わざ〳〵眼を上にして遙かな山を見て喜んで居る。

俺が水を海を讃美する時君等の返事は、只「ア、」とか「サン」とかいふ氣の無さ相なものだけぢやないか。全くいくら山男さは云ひ條、それぢやあまり氣が利かな過ぎるさいふものぢやないかれ。」

云はれてはじめて自分には海が見え出し、そして波打際を歩いてゐるのに氣がついた。（いちろう）

大阪

大阪へ來て直ぐ彼は高い處へ登つて見た。屋根の上の彼は煙の空と瓦の波との間だつた。圓く尖つた電話局の窓の多い白い建物は丸の内のと同じだつた。堂ビルは海上ビルだ。商船ビルは丸ビルだ。けれども烟つた空を貫く初夏の太陽にギラ〳〵鉛色に輝く瓦の波や、ヒカ〳〵金色に光る船の上の荷物に彼の心は思ひ當る何物も持たなかつた。新しい經驗だつた。違つた世界だつた。

友さ別れてたゞ獨り大阪へ來た彼にも、此處へ來なければ會へない人があつた。彼はその人に會つて世の中が明るくなつた。この次ぎ會ふときの事を約束して二人は別れた。振りかへつて彼はいつまでもその人を見てゐたけれども、その人はそのまゝ角を曲つてしまつた。彼は今まで忘れてゐた知らない世界にゐる事に氣が付いた。

暑い仕事の一日に疲れた身體は電車に乘つてぐつたりする。どうして自分だけこんなに疲れるんだらうさ思ふ。電車が彼の降りる處へ來て止まつたけれども、彼にはもう一杯の人を押し分けて出口へ進む氣力がなくなつてゐた。彼と出口との間の人のかたまりは疲れ切つた身のこれから越えなければならない幾つもの山を思はせた。けれども彼の前の男は「やゝこしいことなつさろで」といつて動き出した。彼はその男について元氣よく動け出した。遂つた世界に自分を見出してわけもなく彼はうれしかつた。

煙と瓦の大阪へ來て彼の寢る處は田甫の中の西の宮だ。六甲の山と香櫨園の海に近い。疲れて歸る彼にはつきり見えても霞んでゐても六甲を仰いで胸一杯に松の綠を吸ふのが樂しかつた。青い田を行く一本道でたくましい犬に曳かれてゐる男に會つた。運動させるために連れ出された犬は首の繩に引き戻される。滿足は兩方になり動するために連れ出した男は手の繩に突き出される。何のために犬と男とは一緒にゐなければならないんだらう。でも彼にそんな事を思はせるのは、彼と男連れの犬さの間の小さな犬だつた。犬は男を引摺つて小さい犬に飛びかゝつた。犬は滿足した男は諦めた。小さい犬は問題でなかつた。男が犬をしかる言葉は見物の彼にいふ自己辯護だつた、自分の犬に持つ訪りでもあつた。小さい女の子が走つて來て見物は二人になつた。その泣き出しさうな顏に彼は小犬の主人を見た。六甲の下、青い田の中、犬の喧嘩、泣きさうな子、總て彼には新しい組合はせだつた。自分さこの世界さは全く別のものだつた。それだけに　はどうしてよいか分らなかつた。自分はこの世界に何の力も持つてゐなかつた。小犬は大犬の下に身體をまるめて足を震はせてゐる。もう聲も立てない。小さい主人は泣き出した。そして涙と共に「ジョンよ」といつた。彼の心は急に輕くなつた。新しい經驗の世界にジ

ヨンは彼もよく聞く犬の名だつた。

×　×

彼は大阪に彼を見ようとした。けれどもそれは駄目だつた。彼は又彼に大阪を見ようとした。けれどもそれもうまく行かなかつた。畢竟それは無理だつた。遖つたものを結び付けようとする空しい努力だつたのだ。そして彼は又昔の心に歸る事が出來た、物をそのまゝに受け入れる心に。彼の心は山に歸れた雲と共に空しく山と共に高い。その方が結果を豫定して置いてその方へ自分を導からうとする事よりもどんなに樂だらう。

×　×

朝の心は鏡の中に蒸汽のいそがしく上り下りする中之島になごやかだ。晝の心は橋の上から釣舟の靜かにたゞよう淀川にのどかだ。夜の心は大阪の街を步いて後からさす自動車の强いあかりにくつきり浮んだ小供の顏にはれやかだ。（渡邊九郎）

叡山

語り明かした一夜のために網棚に忘れたくだものゝ籠を三條の京阪まで取りに歸つた。朝からこんな事ぢやこまると思つた。だけども今日は朝から俺らしいなと思つた。加茂川の水に柳の糸と靜かに流れてゐる。

八瀨で電車はケーブルに代つて菱形の箱は吊り上げられる。山の線　押し分けて柴道の石が白く朝の光にぐん〳〵登る。人の力は强いなと思つた。窓下の線の中には赤と黃巴の花が植えてある人の心は美しいなと思つた。眺めが段々ひろくなる。前の山との谷合ひはもう廣い野原の線になつた。峯を飾るのは影を投げながら步く空の雲だ。野原を飾るのは黃巴に光りながら走る人の道だ。箱の登りののろいのは眺めのひろがりのゆるやかさだ。見下す眺めのなどやかさは人の心の靜けさだ。

ケーブルの終りから四明岳の頂上は若木の中のゆるやかな徑、曲り角の涼しい風に汗ばんだ顏は山を思ふ。

急でなくても近くても頂上はうれしい。目の下に湖がしつとり霞んでゐる。これなら鐘もよく渡るなと思つた。色とり〴〵には つきりした大勢の人が、銀ねずにひとつぼんやり大きい湖を見てゐるその景色が美しい。高い處へ來ると人間もいゝなと思つた。

四明岳から徑は杉の谷間へ降りて行く。見下すと杉の波に大きな屋根が浮んでゐる。屋根のあかゞねは杉の色よりも古い。根本中堂だ。杉の香をくゞつて堂の前へ出た。柱の朱が山の氣にしつとり濕つてゐる。こゝはこのお堂を建てる樣に出來てたんだなと思つた。徑は又谷間に降りて行く。緣に埋れて僧房の障子が白い。

道が廣くなつて土が新しくなつたと思つたらケバ〳〵しい洋館の前に出た。阪本口のケーブルだ。高い處から突き落された樣な氣がした。いやな物を見たと思つた。でもケーブルには さつきも乘つた。そして俺はいゝなと思つたつけ。根本中堂とケーブルとは世界が違ふだけなんだ。箕の水が緣の中に靜かに流れるか、ベンテキレーターの風車が秋の空に威勢よく廻るかの違ひなんだ。

それでいゝんだ、それでいゝんだ。みんな見えない手に導かれ

て出來た美しいものなんだもの。（九郎）

聯想

僕は近頃部室に關した或る一事から色々の事を聯想して思ひ出に耽ける癖がついてしまひました。過日も色々と結び付けて獨り喜んで居りました。諸君仲々面白いものですよ。そしてれ「アレ」と云へばすぐ「アレカー」と頷く人が澤山あるらしいです。そしてそのお方がどんな事を「アレカー」と頷かれるかは必ずしも衆人其の軌を一にするものあるとは云へますまい。

例へば「部室とおなら」「部室とビンボン」「部室の棚とコソ泥的」「リユックサックと野澤温泉」「廻轉式の部室のドア」「圖書館の屋根」「猫と家鴨」「熊と狸」「ナタとビンボン髭」「パツタとペンギン」「何處かの讀書會とビンボン」「焼き」「ふさんむし」「青大將」「酒屋のお湯と腦」「會田屋の二階」「にやつと一笑ひ」「上高地と力餅」「消化不良」

いやはや數え來れば限りがないですれ、まあ以上あげた丈でも少くとも良心のあるお方は成程〳〵と肯いたり喜んだり後悔したりするでせう。又知らないお方は妄想をたくましゆうする事でせう。それは皆樣のお勝手です。

空澄み渡る秋の日、雪降りしきる冬の夕べ妄想や後悔の種がどしく〳〵增えて行く事でせう。そして是等の大事件を中心として山男の輪も段々擴がつて行く事でせう、限りもなく！嬉しい事です鬼の目いや狸の目からでも涙が出ます。（たぬき）

狸の化された話

北海道は釧路浦見町邊り、此夏さゝやかに自炊して居た狸公或る日一人の友人と、その日のエサにとて河岸へ烏賊を買ひ出しに行つた。而して豫れて烏賊買出のヒケツとて教はつて居た掛聲を魚屋にかけたものだ。

「何ばいだい」と狸公。「三ばい二十錢です」と魚屋ちと之れでは面白くない十錢て二三ハイ買ふつもりが大當はづれ、色々掛合つた末が彼一流の押しの一手も遂に效なくさう〳〵云ひ値で買つて了つた。さてそれを買つて戻り、いざ料理せんとすれば、こは如何に烏賊の肢に斷然爪がある。烏賊に爪があるとは如何にも不思議と洒落れて見ても何とも仕方がない。そこで土地の人に聞けば爪烏賊さなん申し肢は食し得ず甚だ安きものなりとこそ云へり。世人之れを見て狸河岸のむじなに化されたりとはやしたり。（五郎）

押入寢臺に就て

僕は今迄山へ行つて居るお蔭に、山小屋の冷い寢床の味もキヤンプの狹い毛布の中にもぐり込む味も知つて居る。斯うしていさゝか常人よりも變つた寢床の味を知つて居る譯だつたが、さすがに押入に寢た事はなかつた。處が今度初めてその經驗な過然にも北海道は釧路市に於ける親愛なる部員近ちやんの御別邸に於て得る光榮に浴したでその初めての經驗の思出記を拙き筆もて書き下し而して大いに押入寢臺の時に甚だ便利である事をお知らせし度い。そこで先押入は無論空でなければならぬ。從つて通常の御家

庭では先利用出來得ないかも知れぬ。最も此の寢臺利用の可能性と價値ある場合は從來空家であつたものに二三人それも僅々數日間自己を存在せしむる時等であらう。さてその空の押入に綿を布でくるんで閉ぢたもの、要するにふとんを縦に二枚折にして數く普通のふとんであれば之れで丁度押入一杯に數かれる、若しそれ一枚の外に寢具を占有しなかつた場合には、その二つ折の間にキヤンプの要領でもぐり込む。若！他にあつたならばそれを用ふ。之れで簡單に寢床の用意は出來上つた譯である。そこでその特長であるが先第一に萬年床になし得る便利ある事。第二に斯く萬年床であるにも拘らず押入の戸を閉める事により外觀優美なる事、第三に戸の開閉の度により春夏秋冬その季節に應じ氣溫の調節を計り得る事であり實驗は夏季に於て實行せられたが相當の効果を認め得た。尤もいさゝか缺點もある。第一に理論的には認識し得ないが實驗的に蚤の安住を許すやうである。然し之れは蚤取粉の散布によつて妨ぎ得ると思ふ。第二の缺點は往々建築粗製のため押入の壁等は甚だ脫落し易く、その爲め砂の雨が降る事である。然し之れも壁に紙　貼布する事により避け得る缺點である。更に第三の缺點は此の寢臺には入つた後夜中過然知人の訪れた場合呼んでも聞へず中には入つても居ない、爲に用事をなし得ない或ひは又あらぬ疑をかけられる事である、之れは事實近らやんの親しく味つた處の缺點であつて理論的にもうなずかれるものである。

さて之れで一應實驗報告は終つた譯である。

處で若し萬一此の押入寢臺を利用せられ御便利を感ぜられたお方は何卒發明者近ちやんに感謝狀をお送り下さい氏は目下それが百枚に達したら、前述の缺點を補ひ以つて社會的奉仕をなすべく其等の缺點防備裝置製造會社を起さるべく息込んで居られます。

（五郎）

一橋山岳部と專門部

どうして專門部の人達は山岳部へは入らないんだらうか。一體山へ行かないのか知ら又は山が好きではないのか。斯う私は時々考へる。實際專門部生で部員になるものは少い。僕が初めて山岳部に顏を出し初めた頃、專門部生は僕一人だつた。それから約五年經た今日に於てもたつた一人である。僕と此の一人の間の年級には居たには居たが僅か二三だ。全く醫科本科に比して少い。

その理由は何處にあるのであらうか。現在の部員も又幹事も決して專門部生の入部を拒みはしない。それならば所在地が離れて居るためだらうか。一體山岳部の本據が常に一橋の地にあつた爲國立の地にある專門部生に知らるゝ處が少なかつた。此の爲めに專門部生の入部が少なかつた事は認め得らるる。然し私に　更に根本的な理由があるのではないかと思はれる。つまり一種の專門部氣質と云ふやうなものがあつて之れが山へ行くと云ふやうな事を許さないし、又從つて部員になる人も少いのではないか知ら。

よく專門部生はせゝこましいと云はれる。此の氣分が山行の氣分に合致しないのかも知れぬと思ふ。

事實僕自身が專門部時代周圍にその氣持は屢々感じられた事であつた。

斯うした氣持を私は決して不可とは云はない。然し若き學生にとつて、もつと自由な心持が持たれて好いのではないかと思ふ。

（五郎）

ラブ　イン　アイドルネス

今日もまた十一時だ。よく眠れる。慥か昨夜は九時頃から寢床だつた。合計十四時間。お蔭でいさゝか、頭がよいようだ。學校の午後は騷しい。ピンポン、玉突き、小さい野球、かくして樂しい學校での生活が終る。

昨日はそれでも九時に目が開いた。十一時學校着、同僚は圖書館へ、僕は食堂で紅茶で十二時半頃まで雜談、午後は例の通り。明日は、午前七時に床を離れるだらう。但し昨夜は就床が午前二時半であらうが、それは都會の感傷にしたるだらう爲に、都會の感傷！　○と○の交響樂。その雰圍氣？

× × ×

急激に、迅速に、疾急に、身は下る。上る。降る。より急に、より速に、益々。長い傾斜を一瀉千里に。夕日に輝くスプールを跡つて。

突然、果然、斷然、クリスチヤニヤ。目前に大なる深き、今更に脊の荷の重さを知る。

山下の家々の光、點々と散在、眞白き雪の反射と共に。

身が自然に震へる　寒い　益々寒い。雪を入れる。どんく入れる。大きなスコップで。湯が熱いのだ　まだ熱い「もういゝよ」一日の疲れもこれで休まる。

外はチラ〳〵降つてゐる小さい粉雪が。內は雜然たるものだ。あち〳〵に着物、シヤツ、洋服、手拭、長いもの、短いもの。白いもの、黑いもの。たれてゐるもの、かためてあるもの。

四つの炬燵は、種々雜多な　ごす黑き顏　赤き顏たゞれた顏が。思ひ〳〵に集つて。あみだで買つた饅頭をほゝばりながら

○談　快談　失敗談　五目　將棋　トランプ　花合せ　錢廻し　ジエスチヤー

何れも明日の勇躍　快走を心に藏きながら

雪中の　スキーの豪快！

（化猫）

放言二題

一、○

或山の本に山岳病として左の記文があつた。「便秘や食慾の變化等は健康體にもありがちであるから、決して心配する必要はない。放○頻繁になるとのことであるが、私にはその體驗はない。勿論それは婦人達には聞くべきことでもないが。」原文は露骨に○の所が抹消して無いが小生は婦人達に敬意を表して此處には省いた。そこで題も○さなつた譯だが要するに丸いものには違いない。そして甚だ名譽だか缺禮だか知らないが私にはその體驗がある。併し未だ自分のならば我慢するとしても人が之を發する時は實に嫉惡の情を起すものである。

連日の苦闘が報いられて今日はあの憧れの山嶺に立てる日だ。心も晴々として最後の登りにかゝる。今や正に一列をなして險崖を攀じてゐるのだ。右手には這松を摑み、左手は突出た岩にすがり。右足は岩の割目に確保し左足は今前に立つパーティの一人Uがあげた脚の跡の足場へかけてぐいつと一歩上つた。前のUの股へ殆んど顔がすれ〳〵になつた。俄然Uの足が少しづつた。あつと思ふまもなく。千尋の谷底めがけて落ちたものを諸君は何だと思ふ。それが今こゝに言ふ〇だ。幸この〇は瓦斯體であつたので後に續く僕の生命には別條なかつたがその時の僕を想像して見給へ。以來これが度重なつて僕の顏は黃色くなつて行つた。

これで諸君は我山岳部に二人の〇の體驗者がある事を知られたであらう。そして光榮に存ずる事には先輩にも此の體驗者が一人居られる事だ。しかも同先輩は最近御夫人を迎へられたが、御二人連で登山の折には御婦人には聞かれぬ此の放〇を御夫人に對して同輩が如何に處分されてゐるか近く一席の御講演を願ひたいと思つてゐる。

二、〇

水は方圓の器に從ふ。一度丸く出た以上誰かに切りなほして貰はない限り四角とはりそうにも無い。そこで又、〇と言ふ題だ。今度の〇は人世の悲喜を一人で握つてゐると言ふ恐ろしい〇だ。是有るが爲人は泣き苦しみ生活苦はまざ〳〵しい現實となつて世相を彩るのだ。未だ多額を所有して困つた體驗あるを聞かず。少き爲苦しき體驗して勿論婦人にも聞かれぬと言ふ點前題の〇とは天地雲泥全く相反する〇である。故に曰く、此の話たるや述ぶるに、縷々人に接するに深刻なる正に生きたる小說に非ずして何ぞ。

御代は大正の八月でありました。汽車は全速力の氣を吐いて帝都に向つて矢の樣に走つてゐます。ものうけに腰掛けてゐる山男の心は旬日に亘る樂しかつた旅の思出に耽つて居ります。深い〳〵綠の森、あくまで靑く澄みきつた湖、谷の中に忘れられた樣な湯の宿、そして淋しい山小屋、久戀の山を極めて今はたゞ家路を急ぐのみです。早く東京に着けばよいと思ふ身にこれは又何と暑い車中でせう。涼しい山中と懷しの我家。其間には何と言ふいやな汽車があるのだらう。さう思ふとたまりかねて驛毎に氷だアイスクリームだと何の不安もなく僅に殘つた〇は殆んど使はれてしまひました。

はつと思つた時はもう間に合はなかつた。列車から解放されて帝都の玄關から騷々しい町中へ吐出された山男はシヤツの破れを隱す爲に上着のボタンをしつかりはめたり、しい姿で石疊の道を電車の音を聞きつゝとぼ〳〵と歩いて行きます。汗を振拂つて電車の停留場を眺めた眼は自づと堅く握られた手の中に向けられました。其處には〇の中に皮肉にも又小さな〇があいてゐる五錢白銅が一個握られて居りました。(だだ)

ウエストンさん

ある九月の雨の日、田中薰先生をクロムウエルロードの御宅に

お訪れしたハイドパークの青葉を一目に見渡すお室には、すごい引延し器械が置かれてあつた。やがて出ていらつしやつた先生は相變らずの御元氣で、色々話をして下さつた。東京の話、今年の山の天氣からスイスの事等、そして話は日本アルプスの命名者ウエストンさんの事に移つた。先生は何度も彼の家を訪問されて色々世話にもなつて居られるとの事にお願ひして一緒につれて行つて戴く事にした。近所のレストランで晝飯を食つて出掛けた。ウエストンさんの家は先生の所からすぐで、ケンジントン、ハイストリートの停車場からすぐだ。女中に取次を賴むと奥の室から牧師さんの服を着た男が出て來た。それがウエストンさんだつた。思つたよりずつと若く元氣で、自分には西洋人の年はよくわからないがせいぜい五十代の人の樣に見へた。目に少し變な所がある が大變丁寧で今あいにくお客が來て居ると云つてしきりにわびられるので、突然おしかけた自分ははなはだ恐縮して仕舞つた。室の中には簞笥あり、かけ物あり、その他日本に關する書物も大部あつた。田中さんに奥さんの病氣を尋れ、もう快いと聞いて我事の樣に喜んで居られた。後で聞けば魚屋から八百屋迄紹介してくれたさうだ。是非もう一度來てくれと云ふので次の月曜の午前十一時を約して家を辭した。田中さんにお急がしい所を御手數かけたお禮を云つてお別れした。

月曜いの朝何か日本の山の寫眞を持つて來て居るかと云はれたのを思ひ出して寫眞はないがせめてその代りにと思つて自分のまづいスケッチのあつたのを幸ひ持つて行つた。

アンダーグラウンドの乘換にまご付いて十分ばかり遲刻したのでおわびを云ふと何自分も今迄お客があつてかへつて遲れて來てくれて都合がよかつたと云ひながらスケッチブックを手に取つてスケッチを見初める。一々説明を求めて批評を加へる。大河原から赤石の大屋根のたそがれを寫したのを見てこの景色の寫生は初めてだと云つて熱心に見て居られた。それから今年やつた山の話などするとボロ〳〵になつた「ジヤパニーズアルプス」を持出してこられて色々その當時の事を話してくれた。前穗高岳川の名前をわすれてゐたと云つて聞かれたり、横尾谷の話や、そのくはしいのには今更ながら驚いた。さては秩父の宮さまのお話、殿下の御達筆な御署名のあるス御寫眞を前に置いて御立派なマウンテンサンデンヤーだつたさその時の事を追懷したり、ミスター、マキがロンドンが大變すきだつたから今日のタイムスの附錄のロンドンハーバーを送つてやるんだとか、ミスター、ウラマツのウエツターホルンの話にはその時のルートを書いた寫眞を見せてくれたり、さてはミスター、マツカタの事。その名刺を見せて大變いゝ人だから歸つたら尋ねて見る樣にと云つたり。近頃の日本の事もなかゝくはしく、僕がSouth Manchurian Railways と云ふとそれはマンテツだとかマルビル、ブンカアパートメント迄よく知つて居た。何か記念にと思つてスケッチブックに署名を賴むと the first honorable Member of J. A. P. Member of A. P. と書いて下に山人にふさはしい祈禱文を書いてくれた。そして自分の山に對する心持もこれだと云はれた。その間にも自分の家の手製だと云つて菓子を

くれたり煙草をくれたりしきりにもてなしてくれたのに思はず時を過したので日本へ歸つたら秩父の宮樣のお寫眞の入つたアサヒスポーツと部報を送る事を約束して別れを告げた。外は天青く道白くロンドンにはめづらしき秋晴れであつた。（KEY）

△

自然への逃避、都會の煩瑣な離れるとそこには悠久の自然の大きな實在があり、そしてその姿に見とれることは山男の一つの悦である。奇しき語り傳へも一本一草の印象も私にとりては思出のよすがであると共に山への感謝の一つである。日本アルプスとか又其他各所が年々開けてゆくに反し都の近くにも自然の素朴な姿の山々が殘つてゐるのは嬉しい。丹澤もその一つである。

此の春の旅に青根で聞いた事を次に記さう。

蛭ヶ岳から大群山への尾根の一峰金山谷の頭と呼ぶ一四三〇米の山の下の澤では昔金を産したので此の名を得たと云ふ。此の下の澤の上流には坑道の入口に木を井桁に組んでくずれた土砂の中に僅かに殘るとかそして十數年前山師が來て賞金を懸けて吹き分けた塲所を村人に捜させたが見つからなかつたとか。同じく丹澤の東の土山峠の金鑛の悲劇の傳說に思をはせる。

蛭ヶ岳より流れる神の川に長者舍と地圖にある。之は昔平家の落人が山を越えて來て住んで居たのを村人は慘酷にも殺してしまつた。父は鍬ヶ峰に母は社宮神姫は織化姫に祭られた。近年ごの跡に牧場を作つて失敗した人があり震災前は五十家もあり學校さへあつたが今は見る影もない。又丁度之と同じ話が丹澤の東側の布川の邊に長者邸と云ふ同名の所で同じく平家の落人が殺されたと云ふ。この似かよつた話は史實との何か關係を物語るのではないか。丹澤は或意味に於て昔榮えた凋落の山である。明治二十年頃迄は早戸川を登り不動ヶ峰に出て蛭ヶ岳の藥師樣に詣でた講中があつたさうだが今は語る人さへ無くなつた。震災は此の山塊に致命傷を與へた。山々はむごたらしい姿である。道は失はれ、山稼人は職を失つた。月の滿ちたり缺けたりするに從て成長し又、ち切れてしまふ「カハノリ」も失はれた。川には砂がたまつて八丁の瀧は高さ三丈位になつてしまつた。いつか此の山が昔の姿に反つて吾等の魂を引きつける時が來るだらう。自然に直面するといつも大きな力で人間を壓迫される樣な感がする。（串川の子）

△

亡き叔父のアルバムの中から一枚の繪葉書を見つけた。其の表にはこんな事が書かれてある。

或る夏の日、一人の植物學者がアルプスの山嶺に採集をした。珍らしい花を見出した彼は、岩角を攀ぢた。

其の夕、高山の月は、彼の骸を谷の中に冷たく照した。珍らしい美しい花は、彼の動かぬ手に握られてゐた。

彼の骸は月のみが知つてゐた。

其の美しい花は、人に知られず、今も尚、ユングフラウの一角に夏毎に美しく咲くのである。

大學の理科で植物を專攻にしてゐた叔父は、こんな事を頭に描きながら山を歩いてゐたにちがひない。

幼かつた私は、叔父を氣難かしい恐ろしい人さのみ思つてゐた。小さな甥とうちとけるには餘りに謹嚴な叔父であつた。

併し、叔父は謹嚴のみの人ではなかつた。ロマンテイストでもあつたのである。不幸にして生前、私は其を知る事が出來なかつた。美しい高嶺の植物の傳說を心に描きながら、岩尾根を攀ぢた事もあつたであらう。涙ぐましい程の感激に浸りながら、霧こむる白樺の林を獨りさまよつた事もあつたであらう。

叔父は、同じ樣に山に憩かれる甥に、頭に殘る一の冒葉すら與へずに世を去つてしまつた。

互に語り合ふべき多くの共通點を持ちながら、今は、二人の間を死の帳がたち切つてしまつた。(しんいち)

彫られた名前

俗人の多く行く山の頂などには、よく岩に名刺がはつてあつたり、木に個人や團體の名前が彫りつけられてある。つまらぬ事だがその中で滑稽なのは他人の名前まで彫る奴のある事だ。

今年の夏、部員K氏と二人で本栖湖と精進湖の間のパノラマ臺なる處に行つて、そこのベンチに刻まれた文字を一つ一つ讀んでゐた。と、その中の一つに二人の四つの眼がすひつけられた。

「昭和三年四月、商大豫科、S、N外三名」と部員二人の名前が見事に彫られてあるのだ。僕等はS氏とN氏と二人でこんな處に來たのを聞かない。不思議に思つて歸つてから聞いたら、矢張行かないさうだ。變な事をする奴もあつたものだと、二人で妙に感心したものだつた。(きよし)

燒　岳

近頃上高地が有名になつて、人が多勢行くやうになつた。そして上高地に行つた人は皆燒に登るやうだ。自然燒は素人の登る山になつてしまつたので、吾々が行つて見ると種々な滑稽やら醜態やらが演ぜられてゐる。

燒岳乘越から上　可成急傾斜で、赤い土と石がごろ〳〵してゐて、しかもよく辷る。頂上近くにはそれ程でもないんだが、噴火口の煙と音とで、度膽を拔かれてしまふ者が多い。東側から登ると火口の傍二三尺の所を通る。風向きによつては人の顏に煙がピユーツと吹きつける。よせばよいのに、火口をのぞきこまうとして煙に吹かれて「駄目だ駄目だ、あんな處に行つたら死んぢまふとか何とか云ひながら、惜しさうな顏をして頂上に行くのをあきらめてしまつたのがあつたつけ。

二三人づれで草履をはいてきたのがあつた。登るには登つたが下る時に餘程恐しかつたとみえて、白いズボンの腰を地につけてソロリ〳〵さいざりのやうにして下りて行つた。すると下から登山靴が登つてきた。やはり恐しいのだらう、手を地についてよつんばひになつてゐて、そして云ふ事が奮つてゐる。「勇壯ですなあ、男性的ですなあ」だつて。四つんばひい登山靴と、いざりの

草履との對照が愉快だつた。

兎に角誰でもあの頂上に腰を下してゐると、少したつと下りたくなるから面白い。

僕等が行つた時には、草鞋をはいて、用意萬端怠りなかつたのだが、四ケルの出來そこないを持つて、あの邊に賣つてゐるピッつんばひだのいざりだのを尻目にかけて得々として下つてきたら途中でヒッケルをつき損じていさゝか足をすりむいた。ゲートルをつけて行けばもつとよかつたのだ。

燒岳乘越に小屋が出來た。稱して猥談小屋といひ、主人を猥談博士といふ。女學生がノートに「あら困つたわ、家に歸つてもお父さんに見せられないわ」と黄色い悲鳴をあげてゐたとか。（きよし）

失敗してうまくやつた話

これまでの惡い天氣（これも入梅季としては當り前だつたが）の埋め合せか三日目の朝は馬鹿に天氣がよかつた。枝先を輕く垂れたコメツガの葉末には雨の滴が太陽にきら〳〵と輝き、森の中では駒鳥が朗らかな囀りを繰り返してゐた。龍喰山から南アルプスや奥秩父の連峯を一眸の下に收め得た三人の男はその日の暮方には小雲取の下にある甚助小屋に着いてゐた。小屋といへば名だけはいゝが實際は犬小屋と變りないものだつた、が彼等には立派な安息所に思へた、一休みした後、これから夜の支度をと棚に並んだバケツを下げて水場に下つて行つた。「山行記」の小屋下一町位の所の澤の源頭をあてにして小屋のすぐ下に右手に通ずる道を二町も行つたがそれらしいものさへなくてあたりは伐採し盡されて赤く禿げた斜面で到底水があらうとは思へない。こつちやあろまいと小屋眞下の道らしいのを下りて見る、三十度もありさうな急斜面がぐつと二百米以上も下の茂りまで續いて、そこからは澤の音が聞えて來るが、途中にはとても水がありさうにもない。だが勇敢な剛ちやんと呼ばれる男が眞先にかけ下りて行つた。然し暫くして「なあい……」といふ悲しい知らせがかすかに耳に入つた。水が得られないで三人の男はすご〳〵小屋を後に林道まで上つて行つた。段々險惡になり出した空から可哀相に彼等はぽつり〳〵と降りかゝる雨粒を受け乍ら、彼等は七つ石の前で堂所小屋を搜し出すべく「山行記」を讀み合つてゐた、けれど彼等には小屋を見出す要件となる小平地も見付からなければ、ある筈の標柱もなかつた。長い尾根を下りながら始めの中は互に慷慨悲憤の聲を交はしてゐたがそれも絶えて唯ラヂオンタンの光りをたよりに石ころの多い坂道を、下に点在する鴨澤の燈火を目がけて下つて行つた。部落で一番先に見付けた家で宿を尋れると態々提灯つけて案内してくれた宿屋は雜貨店兼業で建てゝから間もない眞新しい家だつた。

造作の出來上つたばかりの二階に通されて、二間打つ續けて占領した彼等には鮎のうま煮を始め數々の珍味が振舞はれた。やがて敷かれた夜具も彼等が最初に使ふといふきれいな奴、多摩川の瀬音を聞き乍ら間もなくぐつすりと寢てしまつた。……

翌日勘定が全部で二圓五十錢といふのに益々驚いた彼等は無理に三圓置いて意氣揚々と鴨澤を後にして東京府に歩み入り、多摩川沿ひに二俣尾へと向つて行つた。

結局の處、甚助小屋の失敗鴨澤の好待遇を生むてなことになつたのだ。（蓋し甚助小屋で小屋下の右手への道は直きに水場を通つてゐるのだつた。）（ふじを）

烏帽子嶽紛失のこと

ブナ立尾根の登りも案じた程ではなかつた。七時に濁りの小舍を出て烏帽子小舍で晝飯を濟ました位だから割合に早く來たわけだ。一時半頃から烏帽子を訪れることゝする。小舍からだら〳〵の坂を少し登つて、尾根筋を北へ行く。此の頃から時々霧が湧いて來る。でも天氣は決して悪くない、明日も晴天と推定された。行く手に我々の訪ねる烏帽子と覺しき突起がある。餘り近いんで皆んな一氣に登つた。でも此の突起が全然エボシの形體をも備へて居なければ又、有名な凄い岩もない。變だなあと思つた。然しほかに突起がないので仕方がない、是を烏帽子嶽に決めた。烏帽子型に尖つてないのは眺める方角に依るものと無理に肯定してしまつた。それからみんな岩を撫で廻しながら初めてアルプスらしい山に來た喜びを共にした。斯うなると勢ひ記念撮影とならざるを得ない。本三のS氏が技師でパチン。

此頃から霧が霽れて來た、南から稍西に三ツ嶽、野口五郎、赤岳等の山群、あす我々の足の下に踏まるべき山々、岳々が一續きに見渡たされた。目を轉じて北を見れば如何？　奇蹟、奇蹟、今迄なかつたげにも素晴しき突起が現はれた、然かも目の前に迫る樣に現はれた。實に氣持よく尖つた岩峯である。

「あッあれが烏帽子だ」K君が第一番に悲鳴をあげた。

自然は驚くべき偉大な力の所有者だ、僅か數分にして、「無」を「有」に變ずる。然し同時に我々の知識の「有」を「無」に變ずる。烏帽子と思ひ込んだ山の怪しげな知識の「有」は瞬間に覆へされて「無」に變じたのだ。我々は地圖を注視することをうつかり忘れて槍ヶ嶽圖幅中の烏帽子嶽の字の左よりの突起を本物の烏帽子嶽と無理にきめて、岩を撫で廻はしたり記念撮影をしたりして喜んで居たのだ。

ふつくらした濃松の間から一匹の野兎がちよつと姿を見せて、また雪と岩との間の濃松の茂みに隱れた。兎公おかしさに堪えかねて出て來たのかも知れない。（たけを）

石井神よりの歸途

秋の眞中の午後四時頃である。石神井の豊島醫院の前をまつ直ぐ南に坂を下つて行く二人の學生が居る。田圃を過ぎて切通し的の緩い坂を登つた。

「まつすぐ行かうか」「いや上高地を通らう」

坂を登つて雜林木を過ぎた時に二人は小さな玩具の樣なお稻荷さんのところから左へ曲つた。路の兩側は栗やどん栗の林で左手二三間の下は田圃。ぎん栗の實をぷつ〳〵と氣持よく踏んで行く

と左下の田圃が白く河の様に、急流の様に光る。この林の茂みの間から白く光る田圃が此處を通る學生達の、殊に山男の所謂、梓川である。而してどん栗林のしつとりした路が梓川岸を縫ふあの懐しい路にそつくりなのである。かるが故に此處をば上高地とは云ふのである。

上高地を過ぎて、分れ路を右にとりしばらく行くと薄暗い森のトンネルをくゞる(此處で栗の收獲を試みたことがある)。トンネルを出て左の分れ路をとり大根畑の中を行く。やがて石神井から阿佐ヶ谷、中野へ通ずる嬢な自動車道へ出る。此處は埃が立つてほんとに癪に障るところだ。二丁程行くと左側に間口二間半、奥行二間半位のお堂の様な髪床がある。これが彼等の所謂「セヴイヲの理髪師」なのである。是の「セヴイヲの理髪師」は音樂にも何にもならない頗るきたない床屋さんなのだが客が滅多にないのが彼等には妙に嬉しいのだ。

此處から數分で八成橋を渡る、こゝに素晴しい水車が怠け者の彼等を嘲りながら毎朝毎夕ごとん〳〵を繰返して居る。實に懐しい水車なのだがまだ名前がない。その内生れると思ふ。

橋を渡つて直ぐ右にまがり、直ぐまた左の新道へ折れる。この道は巾三間程で井荻驛迄五百米位の直線コースだ。競技部あたりの連中ならトラックとでも呼ぶ所だらう。兩側とも廣々とした畑である。あたりに立樹や森がないので實に茫漠たる感がする。夏は麥、秋は大根の收獲が自動車などで大量的に行はれる。この間の抜けたオープンな感じが實に彼等が此處をカルフオルニヤと稱する所以なである。

カルフオルニヤに達した二人は右手遙かに秩父の連山を眺めて立ち停まつた。遠く、南の方、大山から丹澤山塊、富士、それから大菩薩、雲取、武州御嶽などの、物語りと詩趣に豊かな秩父連山の姿に、たまらなく魅せられたのである。

今しも富士は上半身に雪を帶び、雲取が夕陽に一段と光つて、名にし負ふ秩父の森林と溪谷までも見窮め得る様だ。

「カルフオルニヤの秩父は素的だなあ」と一人が云つた。他の一人は何んとも答へなかつた。秋の夕陽が弱いエネルギーを費し盡して丹澤の脊中に休まんとした時、二人は思ひ出した様に歩き出した。

それから數分の後井荻驛から高田馬場行きの西武線の電車に乘る二人の姿が見出された。

蓋し「上高地」の名付け親は進ちやんで、「セヴイヲの理髪師」は僕、「カルフオルニヤ」の名付親は瀧ノ川の住人らしい。(たけを)

烏帽子槍を縦走して

○赤牛の脊に跨つた藥師樣
　わしもへばつたのつけて下され
○烏帽子岳登り行く友その帽子
　烏帽子に似たりと皆々笑ふ

木曾雜詠

○かれてより憧れ居りし木曾の地よ

テントを叩く山峡の夜の雨

○眞夏にも氷の如き瀧の水に
　打たるゝ行者見て驚きぬ

○秋の陽は甲斐の駒より出でにけり
　木曾の御岳あか〳〵と染めて

○脉々と南の空に濶りぬ
　日はうらゝなり木曾駒ヶ岳

○色々とかまひ果れたる宿の乙女
　深き情けは忘れさらまし

　此の一首を井蛍先生の靈に捧ぐ

○大槍の嶺より落つる梓川
　盡きせぬ恨みに激しく流れよ（かぼちや）

笑　品

一、咏　山

「照りては即、砂塵濛々忽ち天に柱する方數里に及び、降りては即、泥沼濁流忽ち歷を沒する全市に亘る。其絶景に次ぐ絶景は眞に分變秒異、暇餘の暇有らず」と言ふと又かと思ふ人も有るだらうが、實際いくらグチつてもダベつても氣が濟まぬは東京の街だ。殊に今年の樣に暴威を振ふ時は前者の虎は逃るゝも後者の狼を如何せん。帝都一面に第四紀層の上に大震紀層と言ふ最新紀層があつて細菌發生に好適などろ〳〵の帶壤地となつてゐるのだからやりきれない。こんな灰より外に含有物の無い紀層の處を毎日鑛山の樣に掘返しては鐵、銅、鉛等を採埋してゐるのだから話にならない。そこでつく〴〵今夏の籠城を嘆じて曰く、「宜なる哉予輩鉛の空と薄鐵（近來流行の鐵筋コンクリートと見せたるモダン木筋トタンクリートバラックのそれだ）に覆はれたる黃金の都市よりも白銀の山に憧るゝを」

二、みち

山に入つて道が無ければ歩き易い所を平氣で行く。時には目的まで忘れて歩き好い方へ進んで了ふ事がある。道がある時も同じだ。大きな好い道の方には行き度くなるものだ。諏訪の町で春宮から秋宮に行く時、ひよつと好い道に出た。小さな、汚れた道を行きかけたが思ひ返して好い道を通つた。妙な處だなと思つたら妓樓が並んでゐた。と云つても心配しないで呉れ。紅燈絃歌の巷に非ずして貸座敷組合事務所の看板のみ眼につく眞晝中だ。がつちやり、がつちやりナーゲルが忠實に麗らかな秋空の下を進んでがつちり秋宮で淨化された。

三、渡　渉

秋晴の暖い陽の下を三人の山行姿が峠を越してぶら〳〵と歩いて行きました。下り坂を下りきると必然に出會ふのは川です。目的の山が對岸にあるので三人の者は川を渉らなければなりません　Aは川上の中洲に誘惑されて其處を渉ると言ひました。Bも之に贊成しました。Cは川下を斜に渉ると主張しました。三人はざかり腰を下して河原に時ならぬ議論の花が咲きさうでした。併し花は咲かぬ前に必要がなくなりました。

村人の案内で三人は續いてぢやぶ〳〵水の中に歩き出しました村人を始め三人共ズボンを脱いで足は全くむき出しです。對岸近くなつて川は益〻深く水勢急となるに及んで村人はひよいと片足を上げて腰の白布を取去りました。所が都の方に住ひぞなす三人の腰間のそれは踵まで下されば取去る事の出來ぬものでした。それでも身長の高いCはその儘少しも濡らさずに渉り終へました。AとBは如何ともする能はず歩きながら洗濯して渉りました。敢て登山法研究者に新知識の一として御注意致す次第であります。

（だちやう）

年　報



(Nov. '27——Oct. '28)

△大菩薩峠へ　　金田一郎

一一、三

△新部員紹介兼映畫相談會（於如水會館）

一一、一九　本日の出席者左の如し

如水會員　奥野綱重、松倉榮司

部員　五十嵐數馬、吉澤一郎、松木謙三、矢作太郎、三富福之助、曾田莊太郎、高木英二、近藤恒雄、赤城鈴太郎、宇佐美敏夫、手塚晴雄、久保田禮治、横倉吟三郎、河相薫

金田一郎、中島嘉一郎

新部員　平井貞一

△大菩薩峠紅葉狩　　中島嘉一郎、河相薫

一一、二三

△如水會山岳會一橋山岳部懇親會

一二、三（如水會館）

當日出席者（部長）木村惠吉郎先生（顧問）田中薫先生

如水會員二十八名　部員三十三名

△山とスキー映畫の夕

一二、三（如水會館）

「スキーの驚異」「十和田湖」「尾瀬」等

△冬季スキー合宿日記（於野澤温泉）

一二、一七

上野驛出發（後一〇、〇二）1金田一郎　2圓山德三郎

一二、一八　晴

豊野迄雪無し、野澤に於て約二寸の積雪、練習不可能。

一二、一九　晴

3雪宇佐美敏夫　4中島嘉一郎温泉着　積雪二尺Aのみ練習可能

一二、二〇　晴

夜來積雪更に二尺、スキーマンは商大四名他二三名のみ。

一二、二一　時々雪

宿より人夫二名上境驛に出す。本日の到着者左の如し。

5高木英二　6赤城鈴太郎　7手塚晴雄　8横倉吟三郎

9磯野計藏　10久保田禮治　11中森長太郎　12太田又一

13清水達雄　14増山清太郎（以上部員）15海保英男

16國分健男　17關守三郎　18大熊純三　19水木一郎

20丸茂平造（以上部員外）

人員激増の爲練習場大困亂。Bも多少開拓して小康を得たるもCの早くすべる樣になるのを切望す。夜に入りて例のしるこの振舞あり。

一二、二二　快晴

午後野澤峠行同勢十二名。法政來る。本日スキー破損者多數に昇る。温泉着　部員21平井貞一　部員外22森山秀二　23大井光男　24鈴木英雄

練習の歸途太井氏スキーを見失ふ夜に入りて發見。

一二、二三　小雨後晴

午前中練習に出でざるもの多し怠業者リーダー赤城鈴太郎以下十一名（申譯―赤城氏は指をくじき、久保田氏は昨日の野澤峠行でへばりしなり）午後は數名パラダイスに行く。

此の日宇佐美氏はドテラのまゝ湯に飛込む。

一二、二四　早朝より大吹雪

昨日の埋合せに午前午後吹雪を冒して猛練習。

25小栗吉雄温泉着

一二、二五　晴

一二、二六　雪

議論沸騰後高木英二以下十六名毛無山に向ふ(前八、〇〇)

平井暫々落伍し此の日待に元氣なかりし金田と共に峠より引返す、前毛無手前にて晝食後直に道を失し中島日本男子の本領を發揮すれど一同歸心失の如きものあるを如何せん名殘を惜くも引返す。

一二、二七

山岳部の猛者打揃ひて到着。26五十嵐數馬　27吉澤一郎
28松木謙三　29渡邊九郎　30村尾金二　31近藤恒雄
32高橋要二(以上部員)33福室泰三　34吹原不二雄(以上部員外)

本日合宿者最多數に達し夜に入りて大懇親會を催す。チンパンヂー事横倉會計係の開會の辭に始まり餅菓子密柑しるこ等豊富。例により宿のおかみさんの珍談あり。

一二、二八

毛無山登山同行吉澤、五十嵐、村尾、渡邊、高木、近藤、高橋、金田、宇佐美、磯野、中島、園山、中森、關上ノ平に至る頃烈風起り吹雪天を覆ふ。吉澤、高木、宇佐美磯野、中島、園山、中森の七名頂上を極め記念撮影後下山、他は上ノ平より引返しスイスに行く。下界は雨の爲雪重し。

本日の歸京者　久保田、平井、清水、増山、丸茂、鈴木、中森(夜)

一二、二九　雪

積雪多量なり午後パラダイス行本日の温泉着　35鈴木敏雄
36阿部輝太郎　37山口一郎(以上部員外)
酒屋の餅つきぽ　餅の御馳走あり。

本日の歸京者　宇佐美、横倉、海保、關、大井、田口

一二、三〇　雪　積雪一尺

雪質良し、畑スキー　本日の歸京者　太田、小栗、森山、國分、阿部。午後出發の金田、磯野、手塚、中島汽車不通の爲引返す。

一二、三一　曇

朝及晝大部分歸京。トン、ペン、コン、ネコ及利坊は正月二日野澤の合宿を切上げて赤倉に向ふ。

△卒業生送別會

一、一〇　會田牛肉店にて

先輩—奥野綱重、中川孫一、松倉榮司
卒業生—吉澤一郎、村尾金二、渡邊九郎、五十嵐數馬
矢作太郎、松木謙三、小栗吉雄、村瀬和四郎
外學生本科豫科多數

△早大山岳部員追悼會參列

一、一九

近藤恒雄、高木英二、手塚晴雄、中島嘉一郎四名參列。

追悼文を贈る。

△五色溫泉スキー練習　中島嘉一郎、宇佐美敏夫、磯野計藏、金田一郎他一名

二、一〇　上野發

二、一一　雪　板屋驛—五色温泉　猛練習

二、一二　雪　午前中練習午後歸途に就く

磯野はスキーを折り足を傷め、金田は杖を折り頭を傷めた。雪質良し。宗川族館にて虐待を受く。但吾人はソーセージを飽く程食つた。

△春期スキー合宿（於野澤温泉）

三、九

1中森長太郎　2關守三郎　3園山德三郎　4增山清太郎　5國分健男到着す。午後は畑スキー雪は堅くてよく滑る。崖から二度も立たず。原因は子供がジヤンプする二度墜落して首玉を折り損ねた我が勇敢なるスキーマン、其の名は秘す。

三、一〇

6太田又一　7江平林司　8青柳新一到着す。中森シヤンツエでジヤンプを試み一度も立たず。原因は子供がジヤンプするのをみて發心せしなり。

三、一一

9高木英二　10久保田禮治　11平井貞一、到着列車が遲れて迎に來た人が待ちくたびれて歸つてしまふ。午前中中森、關野澤峠にゆく山にゆくと直降滑其他が著るしく巧くなる。

三、一二　晴

六、七名にて午前中はシヤンツエの上を上の方迄登つて歸る。午後は峠からスキスに行く、兩方に行つた者は一寸くたびれた。毛無は素的によくみえた。12白井次郎、13野村治信、14西川善一、15丸茂平造、16清水達雄　17鈴木英雄到着す。

三、一三

Cの上の方よりボーゲンと直滑降をやる。

三、一四

午後峠から鐵索を高木下る、峠で分れて中森、平井、關、久保田水尾山を經てスキスに至る爽快なる直滑降を味ふ。中森奮鬪スキーを折る、18時田憲治到着す。中森歸る。

三、一五

ゲレンデで練習。

三、一六

午後高木歸る。早朝園山御大、鈴木、太田、增山等を卒ゐて赤倉に向ふ急に淋しくなる。

三、一七

久保田歸る途中高橋松井福室小牧に逢ふ。而後二十三日迄練習す。

△三月の尾瀨スキー登山

宇佐美敏夫、中島嘉一郎、手塚晴雄、金田一郎、磯野計藏、品田孝一

三、一二　上野驛發（後一一、一〇）

三、一三

高崎驛（前二、三〇—五、四〇）—沼田驛（七、〇〇—九、三〇）—

自動車にて―鉾田（一二、三〇―一、二五）―戸倉（六、〇〇）

三、一四　雪、風あり

戸倉（九、〇〇）―十二ヶ平（九、四〇―九、五〇）―大カッパ澤（一〇、三〇）―田代ヶ原（一一、四五―一二、一五）―赤澤峠（一、三〇）―菖蒲平の西にて尾根を乗越す（二、五〇―三、一〇）―牛首舟淵（五、〇〇）―關東水電小屋（六、五〇）

本日同行者關東水電社員　大谷氏、人夫　杉浦斗一

三、一五　雪

スキー練習

三、一六　雪後晴

スキー練習

三、一七　晴

本日品田及人夫下山

至佛登山　小屋（八、〇五）―舊關東水電小屋跡（八、二五）―川上、猫又合流點（九、四五）―至佛山裾（一〇、〇五―一〇、一五）―針葉林の上端（一一、一五―一一、四五）―北の肩スキーデポット（一二、〇〇―二、一五）―肩（二、三〇―三、〇〇）―山裾猫又川（三、二〇―三、三〇）―山鼻小屋へ立寄る―關東水電小屋（五、二〇）

三、一八　晴一時曇

景鶴山登山　小屋（八、一〇）―山裾（八、三五）―右肩（一〇、三〇―一一、〇〇）―景鶴頂上（一二、〇〇―一、一五）―肩（一、二〇）―山裾（一、四五）―小屋（二、〇五）

三、一九　晴時々曇

三丈瀧を採れて只見川右岸を彷徨す

三、二〇　晴

小屋（一二、三〇）―沼尻（四、〇〇）―長藏小屋（五、〇〇）

三、二一　曇、山頂にて吹雪

小屋（九、三〇）―沼尻（一〇、〇〇）―燧岳（一二、二〇―一二、四〇）―沼尻（一、一〇）―小屋（一、四〇）附近にて練習（三、三〇―六、三〇）

三、二二　晴

長藏小屋（一〇、三〇）―三平峠（一一、一〇）―柳澤との合流點（一二、三〇）―山の神（三、〇〇―四〇〇）―戸倉（五、〇〇）

三、二三　晴

戸倉―沼田驛當日夜行にて歸京

△丹澤地方の春の山旅

中島嘉一郎、金田一郎、久保田禮治

四、五　晴

根小屋より佛果山往復

四、六　晴

根小屋より石老山往復

四、八　晴

根小屋（七、四〇）―鳥屋（九、二五）―長野（一一、二〇）青根上野田（七、三〇）―大室指（九、一五）―九六〇米の瘤を越た鞍部（一〇、〇〇）―大群山頂上（一、四〇）―大室指

（四、〇〇）—竹の本道志館（五、五〇）

四、一〇　雨

竹の本（八、四〇）—道坂峠（一〇、四五—一一、〇〇）—谷村（一一、〇五）—八王子（四、三〇）

呑氣な旅をと選んだ。佛果山は煤ケ谷村の正住寺の開祖僧佛果がこの突出した頂上で座禪したとか。今はひどい藪で歩き悪い。半原峠を越して向ふの經ケ岳は經石と云ふ御經を納めたと傳へられる眞中に穴のあいた大きな岩が今にも倒れさうに西の方の崖に臨んでゐる。

大群山は雪が深くて途中苦勞した。大室指をはずれて大室澤を登る道もあり。又、東澤、澤との間の尾根を行つて少し藪があるがゆける。加入道の方の登路は一ノ瀬屋の前の細入澤をのぼるとのこと。道坂峠では一老木に「オシヤゲジデンタ」「イヌオモダカ」「ビロウドシダ」「シダ」等のシダ類が着生して居た。

△四月の榮兵衛小屋

手塚晴雄、平井貞一

四、七　飯田町驛（後一〇、〇〇）

四、八　晴

猿橋驛（前二、四一—二、五〇）—葛野橋（四、一〇）—和田（六、〇〇—七、二〇朝飯）—川場（八、一〇—八、三〇）—板小屋（九、一〇）—七丁坂九四〇突三角點（九、五〇—一〇、一五）—山ノ神（一〇、四五）—白草ノ頭一三二六米突（一二、四〇）—長峯より口（一、三〇）—榮兵衛小屋下り口（一、三五）

四、九　曇風

小屋（九、〇〇）—小菅大菩薩峠（一一、三〇—二、〇〇）—笑兵衛小屋　三、三〇）

四、一〇　雨

小屋（九、〇〇）—板小屋（一二、〇〇）—猿橋（四、〇〇）

四、一一　晴

岩殿山往復歸宅

備考

榮兵衛小屋以上雪あり、三尺。大菩薩は所々禿げた如く土色をなす。

榮兵衛小屋—猿橋六里　榮兵衛小屋—大菩薩峠一里

△廐生徽現行　高瀨進三

四月七日　飯田町發（午後一一、三〇）

八日　猿橋驛（前二、四〇—二、五五）—葛野川最初の橋（四、一五）　駒宮への分枝點（四、四五）—駒宮（五、〇〇）—廐生澤（朝倉五、二〇—六、二〇）—檜原尾根第一峯（九、二〇）—廐（七、五〇）—尾根が大寺山に分れる峯（九、五〇—一〇、一〇）—ひろれ（一〇、五〇—後生山（九　五〇—一〇、一〇）—一二、〇〇）—權現山三角點（〇、二五—〇、四〇）—權現堂（〇、四五—〇、五五）—雨降山（一、二〇）—二本杉（二、一〇—二、四〇）—芦垣（三、三五）—若宮橋（四、二〇）—上野原（六、〇〇—六、二四）—新宿

△新入部員歡迎會（於石神井豫科）

四、二一

出席者左の如し

「先輩」吉澤一郎「本科」近藤恒雄、宇佐美敏夫、手塚晴雄
金田一郎、久保田禮治、磯野計藏、中島嘉一郎「豫科」芋川
稔一、高瀨進三、中森長太郎、野村治信、園山德三郎、吹原
不二雄、關守三郎、增山清太郎、清水達雄・太田又一

△暮の仙元峠川乘山へ　吹原不二雄

四、二二　雨

二俣尾(一〇、二〇)—小舟波(一二、三〇)—氷川(二一、〇〇—三、〇〇)—日原山上旅館(四、四五)

氷川に近い白丸邊は地崩がして材木を束れて僅に道を通じて居るし、日原道にも五坪許り崩れた所があつた。日原道には烏帽子岩、トボウ岩、地藏岩等の巨岩が對岸に聳立してゐる。

四、二三　晴後曇

旅館(七、四〇)—茶尾、九、〇〇—仙元峠(一一、〇〇—一一、三〇)—蕎麥粒山(一一、一五)—日向澤の峯(一二、五〇—一、一〇)—山毛欅山(二、〇〇)—川乘山(二、二五—二、四〇)—山毛欅山(二、五〇)—八四〇米突の圏(三、三〇)—古里附(五、一〇)—二俣尾(七、一五)

茶尾の裏に廻ると殘雪斷續橫篤尾根北端一杯水附近では一尺二三寸の雪になつた。篤尾根は南方西方の眺望頗るよい。仙元峠には石祠あり、蕎麥粒山は頂上に大きな岩(燧石質)が五つ六つある。雪に埋れて三角標見附からず、眺望大いにし。日向澤峯まで來ると殘雪斑々となる。川乘谷及び川乘山は丸坊主になつて居るから却つて頂上の眺望は利え、東京市の切開きに釣られて入川の頭に出る。其處から二百四五十米

△晩春の八ケ岳縱走　關守三郎、吹原不二雄、松本益雄、卜部千代

五、二四

新宿驛(後一一、五二)

五、二五　曇

小淵澤驛(七、〇五—七、一五)—火見櫓(八、二〇—八、三五)—開墾地の林傍に大石あり(一〇、三〇—一〇、五〇)—殘雪發見

(二、〇〇)—大石のゴツ（四、一五—五、三〇）—編笠小屋（五、三五）

五、二六　曇後雨一時雪

小屋（六、一三）—編笠山頂上（六、四三—六、五〇）—小屋（七、〇五—七、一五）—ギボシ（七、四五—七、五五）—櫛現岳力利天宮（九、〇〇—九、〇五）—岩の頭（九、三〇—一〇、四五）—馬の背への分岐（一一、〇〇—一一、五〇）—赤岳小屋（六、一〇）

五、二七　曇後雨

小屋（八、三〇）—横岳頂上（九、五〇—九、五五）—大ダルミ（一〇、二五—一〇、三五）—硫黄岳（一一、一五）—夏澤峠（一一、三五—一一、四五）—本澤温泉（一二、二五—四、二〇）—小海驛（九、一五—九、四〇）歸京

櫛現編笠の鞍部への道と編笠へ直接登る道との分岐點は分らず上り、水場を過ぎて二二〇〇米突附近の密林中は三、四尺のブクブク雪で悩まされた。一二日獨りで編笠山へ行って來た。雲海を隔てゝ方々の眺望が馬鹿にいゝ。櫛現岳では金田兄に注意された通りに道を見落して眞直ぐに行ってしまって又引返した。と云ふのは濃霧の爲馬の背が全然見えなかったのだ。赤岳小屋の中にはまだ雪が澤山あった。雪に埋れてゐる薪は中々燃え付かなくて弱つた。横岳への途中ちよつとした雪渓あり大ダルミにも可なりの雪渓があつたがまあ軟かい雪だ。夏澤峠の頂上から本澤温泉までは四五尺の雪だがこれも隨分軟かい。温泉でゆつくり休んで出掛けたはいゝが途中林のある處で眞直ぐ行つたら湯川を渡つてドン〳〵南下して海尻のはずれに出てしまひ二里程まはり道をして仕舞つたが途中白樺と唐松の林でキャンプに適當と思はれる氣持のよい所があつた。（吹原記）

△上毛三山方面　高橋要二外二名

五、二五

水沼驛（九、三〇—一〇、一五）—一ノ鳥居（一〇、四〇）—茶屋（一一、〇〇—一二、三〇）—二ノ鳥居（一二、五〇）—利平茶屋（一、三五）—小沼（三、一〇）—赤城神社（三、五〇）青木屋（四、二五）

五、二六

青木屋（八、三〇）—敷島一一〇五〇米ノ點（九、〇五）—敷島へ九〇〇〇米（一〇、一〇）—六〇〇〇米（一二、〇〇）—敷島驛（一、五五）同發（二、四三）—澁川着（二、五四）—伊香保着（三、四五）

五、二七

叶屋（八、〇〇）—ヤセオネ（九、〇五）—榛名富士頂上（一〇、三〇）—天神峠（一一、五〇）—榛名神社（一二、一〇）—榛名山町（一、三〇）—天神峠（二、二〇）—伊香保驛（三、三〇）—電車にて—澁川（五、五〇）—高崎（六、四五）—磯部（七、四五）—磯部館（八、〇〇）

五、二八

磯部館（八、三〇）—妙義町（九、〇〇）—一本杉（一〇、三〇）—大砲岩（一一、四〇）—日暮シ（一二、三五）—神社（一二、五〇）

—轟岩(一、四七)—妙義町(二、四〇)—上野着

△八ケ岳川俣川行　　手塚晴雄、中島嘉一郎

五、二六　飯田町驛(一〇、〇〇)

五、二七　曇後小雨

甲府驛、前二、五八—六、三二)—韮崎驛(七、一〇)—自動車にて—長澤(八、四〇)—弘法水(九、四三—一〇、一五朝食)—船久保(一一、一二)—躑躅ヶ原幕營(三、三〇)

五、二八　晴

野營地(一一、一〇)—川俣川に降る(一、三〇)—河原にて野營

一八〇〇米突附近(四、一〇)

五、二九　晴

野營地(七、五〇)—赤岳より出る左手の尾根に登る(一、三〇)—赤岳直下にて野營(三、三〇)

五、三〇　晴時々曇

野營地(九、三〇)—左に平行に巻きて權現赤岳間の尾根道に合す(一〇、四五)—赤岳(一二、四〇—一、三〇)—赤岳小屋(一、五〇)

五、三一　晴

小屋(九、三〇)—硫黄岳(一二、〇〇—一二、三〇)—本澤溫泉(一、四〇)

六、一　曇後雨

本澤溫泉(八、三〇)—夏澤峠(九、四〇)—約一時間半休憩の後天狗岳白駒池蓼科方面の計畫を放棄し茅野に下山同夜歸京す

△四谷山附近　　芋川稔一外一名

△八ケ岳川俣川行　　手塚晴雄、中島嘉一郎

五、二六　飯田町驛(一〇、〇〇)

五、二七　曇後小雨

甲府驛、前二、五八—六、三二)—韮崎驛(七、一〇)—自動車にて—長澤(八、四〇)—弘法水(九、四三—一〇、一五朝食)—船久保(一一、一二)—躑躅ヶ原幕營(三、三〇)

五、二八　晴

野營地(一一、一〇)—川俣川に降る(一、三〇)—河原にて野營

一八〇〇米突附近(四、一〇)

五、二九　晴

野營地(七、五〇)—赤岳より出る左手の尾根に登る(一、三〇)—赤岳直下にて野營(三、三〇)

五、三〇　晴時々曇

野營地(九、三〇)—左に平行に巻きて權現赤岳間の尾根道に合す(一〇、四五)—赤岳(一二、四〇—一、三〇)—赤岳小屋(一、五〇)

五、三一　晴

小屋(九、三〇)—硫黄岳(一二、〇〇—一二、三〇)—本澤溫泉(一、四〇)

六、一　曇後雨

本澤溫泉(八、三〇)—夏澤峠(九、四〇)—約一時間半休憩の後天狗岳白駒池蓼科方面の計畫を放棄し茅野に下山同夜歸京す

△四谷山附近　　芋川稔一外一名

五、二六　晴後曇時々雨

新宿驛(六、五八)—二俣尾(八、四四)—上野着

二、〇〇)—越澤氷川分岐點(一、〇三—一、二五)—昭味橋(三、二八)—御前岩(三、五一)—小管日原分岐點(四、一五)—トゥ岩(四、五四)—無妙橋(五、二〇)—日原(五、三〇)

五、二七　曇

日原(八、一〇)—瀧ヶ入峯(九、三〇)—倉澤分岐點(九、五八)—一杯氷(一〇、四〇—一一、四〇)—鷹(一、一〇)—小舍(一五—一八〇米突の突起と一六六〇米突の突起との鞍部にあるもの)(一、三〇—一、四〇)—酉谷山(二、一五—二、二五)—小舍(二、五五—三、三〇)—步道とのクロス點(四、〇〇)—炭燒小屋(四、三〇—四四〇)—氷神橋(六、〇五)—三峯道分點(六、五七)—影森驛(七、一五—七、五五)歸京

△陣馬山

渡邊九郎　近藤恒雄　高木英二　大高利作　金田一郎

丸茂平造

五、二七　晴

新宿(八、三五)—上野原(一〇、三〇)—橋詰(一一、三〇—一、一五)—和田峠—陣馬山(二、四五—四、〇〇)—案下峠(四、三五)—甲瀨(六、〇〇)—新宿(八、二四)

△四阿山白根山方面　　久保田禮治、芋川稔一、園山德三郎、丸茂平造、

五、三一

上野驛發(後一一、一〇)

六、一　曇後雨
小諸驛（五、四五―六、三〇）―西原（七、〇八）―一一八二米突突起の東方（九、〇二）―一ノ城戸平（九、五七―一〇、〇七）―二ノ城戸平（一〇、三〇―一一、三〇）―三方ヶ峯鞍部（一、〇〇―二、二〇）―（濃霧の爲道を失ひ彷徨す）―地藏峠（四、一五）―鹿澤温泉（四、五〇）―新鹿澤温泉（五、四〇）

六、二　雨
猛雨の爲一日滯在

六、三　晴後曇
新鹿澤温泉（七、一〇―一〇、五〇）―古永井（七、五〇）―小舍跡（一〇、二五―一一、三〇）―一七二〇米突（一一、一八）―四阿山頂（一二、一八―一、三〇）―浦倉山（三、一八―三、四五）―萬座川渡渉ひ引返す（一〇、〇〇―一〇、四〇）―萬座への道を途中暗夜の爲め失（七、〇〇）―小舍（一〇、五〇）

六、四　晴一時曇
小舍（前五、二〇）―吾妻鑛山分岐點（七、一七）―萬座温泉（八、一五）

六、五　晴時々曇ゐ
萬座温泉（八、一〇）―白根山（九、五五―一一、三〇）―草津驛（後二、四五―三、〇五）―小瀨驛（六、三〇）―小瀨温泉（六、四〇―九、〇五）―峰の茶屋（一〇、四七―一一、〇〇）

六、六　曇
淺間山中腹約二二〇〇米附近（前一二、一五―一二、二〇）―濕霧の爲淺間登山は中止―峰の茶屋（一二、五五―一、〇八）―沓掛驛（二、三五―三、四一）歸京

△天神峠附近　太田又一、勝田一郎、增山清太郎、人夫　田村彦太郎

五、三一
上野驛（後一一、一〇）

六、一
高崎驛（二、一二―五、四〇）―後閑驛（七、二一―七、三五）―乘合自動車―小日向（八、一〇）―谷川温泉（八、五四）

六、二
兩天滯在

六、三　曇
谷川温泉（八、三三）―高壺澤（一〇、一〇）―天神峠（一一、〇五―一一、三〇）―一七二〇米突附近の露岩（一二、一〇）―一五二五米突附近（一、三〇）幕營

六、四　曇時々雨
幕營地　五、三〇）―天神峠（五、五〇―六、四〇）―谷川温泉（六、一一、〇五）―後閑驛（一一、四五―一一、五五）―高崎驛（一、五五―二、一〇）―下仁田驛（三、〇九―三、一五）―乘合自動車―虻田（三、三五）―一本杉（五、〇〇―石門其の他見物―七、〇〇）―妙義町（八、三五）―松井田（一〇、〇七―一一、三〇）歸京

最初の計畫では谷川から谷川岳に登り、萬太郎山に野營して翌日仙倉山、平倭山、大源太山、三國山を縱走して三國峠から法師の湯に出る筈であつた。天候不良のため豫定の半分も

遂行出來なかつたのは眞に殘念だ。尙同コースは大正十五年六月松木、五十嵐、渡邊の三先輩が縱走せられてからまだ誰も行つた者はないさうである。

登山期は五月がよい。秋には雪がないので山中に二泊する必要がある。人夫は田村彦太郎と云ふ者の外、人夫らしいのは居ない。土地の人は非常に山を恐れてゐる、谷川岳より先へは行かうとしない。（S・M）

△塩見赤石縱走

高木英二、近藤恒雄、磯野計藏、人夫　松尾伊之助

六、六　飯田町驛（一〇、〇〇）

六、七　晴

辰野（五、五九）―伊那大島（八、〇〇）―部奈（九、〇〇―一〇、三〇）―大河原（二、〇〇）

六、八　晴

大河原（七、〇〇）―米山（八、一五）―シヨ澤（八、五〇）―テラ澤（九、三五）―小河内澤トノ分レ（一〇、一〇）―樋口（一一、二〇）―豊口山ガレ下（一、〇〇）―宮内省三角點（一、四五）―三伏峠（四、三〇）―三伏小屋附近幕營（五、一〇）

六、九　晴後雨

三伏小屋（七、〇〇）―本谷山（八、〇〇）―櫛右衛門平（八、四五）―鹽見岳（一一、一八―一二、〇八）―鹽見澤雪渓合流點（一二、二六）―三伏小屋（二、二五）

六、一〇　晴後大雨

幕營地（六、五〇）―富士見西方鞍部（七、五〇）―富士見岳（八、一五）―中山（九、〇〇）―小河内岳（一〇、〇〇）―小日影山分岐點南方鞍部（一二、〇〇）幕營

六、一一　晴

幕營地（七、三〇）―板尾岳（八、三〇）―第一ピーク（九、〇〇）―西俣谷（一〇、四〇）―西俣幕營地（一一、三〇）

六、一二　晴

幕營地（六、三〇）―荒川岳（九、〇〇―九、二〇）―魚無河内岳（九、三〇）―惡澤岳（一〇、四〇―一一、〇〇）―魚無河内岳（一一、四〇）―荒川岳（一一、五五―一二、四〇）―大聖寺平石室（二、三〇）附近幕營

六、一三　曇後雨

幕營地（六、三〇）―赤石山頂（七、五〇―八、〇〇）―幕營地（八、二五―九、〇〇）―廣河原小屋（一一、〇〇―一一、三〇）―小澁湯（二、三〇―二、四五）―大河原市場（五、一五）

六、一四　晴

大河原滯在

六、一五　晴

大河原（六、三〇）―部奈（一〇、五〇）―伊那大島（一一、四五）―辰野（三、一三）―新宿（一〇、五〇）

△豫科山岳部總會兼新入部歡迎旅行相談會（於石神井）

六、一三

出席者　中森長太郎、芋川稔一、園山德三郎、關守三郎、小川竹夫、增山清太郎、勝田一郎、太田又一、清水達雄、丸茂平造、大村健一

△常例集會

六、一五（金）

第二回常例集會を如水會館に開催。夏期登山計畫に就て談す。

△梅雨季の秩父へ　吹原不二雄、關守三郎、他一名

六、二〇　新宿驛（後一一、五二）

六、二一　曇後雨

鶴山驛（四、二五―四、四五）―踊石（六、一〇―六、四〇）―雲峰寺（七、四〇―七、五〇）―柳澤峠（九、四〇―一〇、〇〇）―板橋峠（一一、二〇）―川浦峠（二、四〇）―笠取小屋（五、〇〇）

柳澤峠よりは東京市の林道を通つた。五里位はあるが、途中の眺望は中々よく、秩父一帶南アルプスがよく見えた。

六、二二　雨

小屋（一〇、〇〇）―水神社奥宮往復（一〇、四〇）―唐松尾三角點（一、二二―一、三五）往復―牛王院平（二、五〇）―將監峠（三、〇〇―三、一〇）―牛王院小屋（三、三〇）

一日林道を歩いたが林道から奥宮へは五町、唐松尾三角點までは六町としてあるも各々往復に休憩時間を入れて四十分、一時間半を要した。將監小屋は植林人夫がゐて塞つてゐるので三町離れた牛王院小屋へ泊つた。

六、二三　晴後曇

小屋（八、〇〇）―將監峠（八、一〇―八、一五）―龍喰山（九、一五―九、二五）―大ダルミ（一〇、〇〇―一〇、五〇）―飛龍山登口（一一、四五―一二、二〇）―飛龍山三角點（一二、三三―二、四〇）―三ツ岩（一、三〇）―雲取山（三、四五―三、五五）―小雲取山（四、〇五）甚助小屋（五、〇〇―五、四〇）―鴨澤（八、二〇）

大ダルミまでは尾根を傳つて行つたが龍喰山大ダルミ間は小突起が隨分澤山ある。大ダルミからは林道と合し登り口までに水場が二ヶ所ある。登口から二十四間突き出た禿岩あり、眺望がいゝ。飛龍山の頂上では方角に注意の事。登り口から少し行くと飛龍權現あり尙行つて三條湯へ下る道が右についてゐた。甚助小屋には水が湧いてゐるのだが見付からず頑張つて鴨澤まで下りて新しい雜貨店に泊る。

六、二四　小雨

鴨澤（九、四〇）―小河内温泉（一一、一五）―氷川（二、四〇）―二俣尾驛（六、四〇）

四月通つたとき修造中の氷川、白丸間の道路は未だ出來なくて對岸の道を通らされた。尙此の方面の參考書としては「針葉樹」第二號及び「山行記」がいゝ。（吹原記）

科學親旅行（大菩薩峠）

芋川稔一、圓山德三郎、小川竹夫、太田又一、增山清太郎、清水建雄、丸茂平造、大村健一

六、二二　新宿驛（後一一、五二）

六、二三　晴

猿橋驛（二、四五―三、〇〇）―七保橋（四、二〇）―瀨戸河原（五、一〇―六、一五朝食）―カモレ橋（七、一五）―西原峠（九、三〇）―奈良倉山東南清水の地點（一一、三〇―一二、三〇晝

食)—大田和の小舍(三、三五)

六、二四　晴後雨

小舍(後一二、三〇)—椹ノ尾山、大菩薩峠分岐點(二、一〇)—途中晝食のため四十五分休む—小菅、大菩薩峠分岐點(四、〇七—大菩薩峠(四、二五—五、三〇)—(峠より最初の熊笹の斜面を日川谷に下る)—第一の合流點(七、〇〇)—中日川峠よりの道との分岐點の先にて道を失ふ。直に引返し炭燒小舍に泊らんとせしも時既に十時を過ぎ雨は益烈しく、止むなく雨中に露營す。

六、二五　雨後晴

露營地(五、三〇)—中日川峠(六、一〇)—奥牛山峠(八、〇〇)—嶮峨鹽鑛溫泉(八、一〇—後七、三五)—初鹿野驛(一〇、〇〇—一二、五〇)歸京

三日目に余りゆっくりしてしまひ、其の上澤下りで意外に時間を取られてしまったので到頭雨の中で、テントもなしに露營しなければならぬ樣な事になってしまつた。一晩中雨に濡れてゐたのも今で考へれば惡くもないが、其時には余り感心したものではなかつた。

懇親旅行としては此んなのが却つて適してゐるかも知れない。

(S. I)

△鹽川笠ケ嶽より柄澤山まで

横倉吟三郎、宇佐美敏夫、中島嘉一郎、金田一郎、人夫二名

六、二三　上野(一一〇五)

六、二四　高崎(二、三〇)—五、四〇)—後閑(七、二〇—一〇、〇〇)—大穴(一一、一〇)—打上、柳澤(三、三〇)

六、二五　雨時々晴　人夫の都合にて滯在

六、二六　晴　打上(九、一五)—久保(一〇、〇〇—一一、〇〇)—寶川溫泉(一一、三〇)

六、二七　曇雨　人夫の都合にて滯在

六、二八　晴　久保まで人夫を呼びに行く、寶川溫泉、(九、〇二)—下檜平(九、五五)—上檜平徒渉(一〇、一七)—ショ澤入口(一〇、四〇)—曲リセン(一一、二五—一二、一〇)—イタイウ澤(一二、五〇)—ブナウクラ落合下(一二、一五—三、一五)—澤の途中にてキヤムプ(五、三〇)

六、二九　雨　六、三〇　雨　滯在

七、一　晴　野營地發(一〇、〇〇)—廣河原落合(一二、〇〇)—笠ケ嶽頂上(四、〇〇—四、二〇)—朝日川峠(六、一〇)—寶川に下り野營(六、〇〇)

七、二　晴後曇　野營地發(八、一〇)—朝日岳(九、一五—九、四〇)—矢木澤の頭(一一、三〇)—柄澤山との鞍部(三、〇〇)—柄澤山(三、一五)—柄澤に下る(四、〇〇—四、〇〇)

七、三　曇　野營地發(八、一〇)—道に會ふ(九、〇〇)—清水の少し南にて清水越の路に出る(九、四〇—一〇、〇〇)—兎平(一二、〇〇—一二、四五)—清水峠(三、〇五)—武能(五、〇〇)—湯檜曾(七、二〇)

七、四　晴　湯檜曾溫泉(一〇、三〇)—ガソリンにて鹿野澤(一

一、三五）—建設列車にて後閑（一、五〇—二、〇五）—上野（六、四五）

雨と人夫の都合との爲に豫定を全然狂はせて甚だ殘念だつた

△甲斐駒、仙丈、白蛇三山、地藏縱走（第六班A）

リーダー手塚晴雄、久保田禮治、河相黨、大岳遥

人夫　中込政房、水石島吉

七、八　曇時々晴

日野春（四、〇三）—柳澤（五、二五—七、二〇）—駒岳神社（八、二三—八、五〇）—中尾澤（一〇、三五）—胸突（一一、四〇）—笹ノ平（一二、〇三—一二、三〇）—屏風小屋（三、一〇）

七、九　晴

小屋（六、二五）—七丈小屋（七、五〇—八、二五）—大日大聖不動明王（九、一〇—九、二五）—岩上に劍ある所（九、五〇）—頂上（一〇、三〇—一一、三〇）—駒津峯（一二、五五）—仙水峠（二、〇〇—二、一五）—北澤小屋（三、一〇）

七、一〇　晴

小屋（五、四〇）—北澤峠（六、一〇）—小仙丈（九、〇〇—九、一〇）—仙丈頂上（一〇、二五—一一、一五）—蕗ヶ平（一、二五—一一、五〇）—荒倉岳（二、一〇）—弘法池（二、二〇）—横川岳（三、四五）—兩股小屋（四、四五）

◎雷鳥が二回も飛び出して思はぬ所で時間を潰した。

七、一一　晴

小屋（五、四〇）—前日の尾根（六、三〇—六、四五）—三峰（九、五〇—一〇、三〇）—間ノ岳（一一、二〇—一二、二〇）—間ノ岳

小屋（一、二〇）　農鳥往復—小屋（一、四〇—二、五五）—小屋（三、五〇）

七、一二　晴

小屋（五、三〇）—間ノ岳（六、三〇—七、一〇）—北岳（九、二五—八、二五）—間ノ岳（一〇、四〇—一一、一〇）—大樺池（一二、〇五）

廣河原小屋（二、〇五）

大樺池の邊りに新しい縣設小屋が出來て居た。

七、一三　晴

小屋（六、二〇）—白鳳峠（九、一五—九、二五）—高嶺（一〇、一〇—一〇、五〇）—賽ノ河原（一一、二五—一二、一〇）—大日岩往復（一一、一五—一一、五五）—北御室小屋（一、一〇）—五色ノ瀧（一、三〇）—青木湯（三、四五）

七、一四　晴

青木湯（八、〇五）—鳥居峠（八、五五）—祖母石（一〇、二〇）—韮崎（一二、三二）

（河相生記）

△赤石聖王岳縱走（夏期登山第七班）

リーダー芋川稔一、園山德三郎、太田又一、丸茂平造

人夫駒瀨保一、田城岩夫、小林德十

七、一一　飯田町發（後一〇、〇〇）

七、一二

辰野驛（五、五八—六、一二）—（途中福岡驛附近にて電車脫線し危く顚覆せんとす。一時間半を無駄にす。前兆頗る惡し）—伊那大島（九、三〇—九、四八）—天龍橋（一〇、一五—一〇、

三五)—物見松(一一、二五—一一、五五)—部奈(一二、三〇—一一、二五)—釣橋(トロッコ道を小澁川左岸より右岸へ)(五、〇〇)—桶谷橋(五、二〇)—鹿鹽橋(五、五五)—丸川旅館(六、三五)

七、一三　晴夕立あり

大河原(七、三七)—三伏峠小澁川分岐點(九、四五)—三正坊大上藏(八、〇三—八、二〇)—ヒナタ休ミ(九、一五—九、二五)—ヒルヒナタ澤(一二、〇四—一一、〇〇)—權現(一〇、〇〇—一一、一五)—ス澤合流點(五、〇〇)—廣河原小澁湯(一二、三五—一一、一五)

原小屋(五、三〇)

廣河原の小舍は昨秋新築されたもので硝子窓さへある五間に三間の素晴らしいものである舊小舍の少し下にある。

七、一四　晴後曇午後雷雨あり。

廣河原小舍(八、二五)—途中晝食にて一時間休む—舟窪(二、一五—三、一五)—大聖寺平野營地(五、一五)

七、一五　晴後曇(夜は數知れぬ星がふる)

野營地(八、三〇)—魚無河内岳鞍部(一〇、五〇—一二、〇〇)—魚無河内岳(中岳)(一二、一三)—鞍部(一二、四五)—悪澤岳(一、三五—一、五〇)—鞍部(二、二五)—鞍部(二、〇〇)—魚無河内岳鞍部(二、〇〇)—野營地(四、一〇)

大倉喜七郎氏登山のため大聖寺平附近には大變な道が出來てしまつた。平から魚無河内岳の頂上までは元の樣に尾根を通らず東側の斜面を大きく卷いて後、最後の小尾根をジグザックに樂に鞍部まで登れる。あのガラ〳〵な尾根を通る必要もなし二つの突起を越す事もなくなつた。魚無河内岳から悪澤岳までも樂な道が出來てゐる。

赤石の頂上までも新道が通じてゐる。平から拜み所まで立派な道が出來てゐるから樂であらう。

今年の新道は椹島から直接千枚澤岳に登り悪澤魚無河内を經て大聖寺平に下り赤石岳に登つて去年喜八郎氏の時の道に依つて再び椹島に下るのである。

七、一六　霧深く風强し

野營地滯在

七、一七　濃霧風益々强し

大聖寺平石室に引き上ぐ

七、一八　未明より雨を加へ風益々强し

大聖寺平石室(一一、一〇)—舟窪(一一、五〇)—廣河原小舍(一、二〇)

天候回復せず、食料も續かぬので風雨を冒して下る。

七、一九　雨

廣河原小舍(七、四〇)—ス澤合流點の少し下にて徒渉斷念す(八、五〇)—道と合する地點(但道とは大雨の時小澁川を渡渉せず右岸を通る道にして廣河原の小舍の上に出づるもの)(一一、〇七)—高山裏への道の分れと合す(三、四〇)—高山裏道分岐點(四、〇〇)—板尾谷(四、四五—六、〇五)—小澁湯分岐點(六、四〇)—釜澤(七、三〇)—上藏(八、四五)—大河原(九、〇五)

今日の行程の詳細は針葉樹四號本文をみられたい。

七、二〇　雨一時晴
大河原丸川（後四、三〇）—落合（五、〇〇）—北條坂下（五、四〇）—敷島ヤ（七、一〇）—部落（八、〇〇）—伊奈大島（九、四〇—一〇、二四）—赤穂（一一、二二）
七、二一
赤穂（四、二四）—辰野—歸京
△白嶽三山、仙丈、駒岳縦走（第六班C）
リーダー　吹原不二雄　闕守三郎　松本益雄　加賀行三
卜部千代
人夫　深澤信光　深澤清逸　深澤義近
七、一三　飯田町發
七、一四　晴　雷雨あり
甲府驛（五、一三—五、三〇）—青柳（六、一五—六、四五）—矢川（九、三〇）—出頂茶屋（一一、四〇—一二、四〇）—飴茶屋（二、四〇—三、二五）—西山溫泉（六、三〇）
卜部は腹工合悪く途に日影森の手前で歸る。西山へは飯富迄自動車で行き、それからトロで行く道があるとか。西山の人夫は一日二圓七十錢（組合維持費二十錢を含むで）案内者は三圓。人夫は五貫、案内者は三貫目背負ふ定である。尚地下足袋を人夫一人につき一足づゝ要求する等余り感心せぬ組合である。
七、一五　晴後曇
西山溫泉（八、二〇）—奈良田（九、二五—九、四〇）—吊橋（九、五〇）—廣河内に入り左岸に渡る所（一〇、一五—一〇、四五）—雨池山直南の澤にて晝食（一一、三〇—一二、二〇）—右岸に渡る（一、二五—二、〇〇）—大籠澤を渡り八丁坂にかゝる處第二回晝食（二、四五—三、〇〇）—小雨あり—大門澤小屋（五、二〇）
七、一六　晴後曇
小舍（六、三五）—南澤を渡る（六、五五—一〇、一〇—一〇、四〇）—澤ゝ左岸に上り晝食（一一、三〇—一二、三〇）—鳥形殘雪の下で第二回晝食（一二、五七—一、一五）—農鳥岳（一、四五—二、一五）—間岳小舍（三、三〇）三〇二二〇のピーク（二、二〇—二、四〇）—南澤の直ぐ上から殘雪あり。中澤の谷は全く殘雪に蔽はる。昨年八月に建てられた間岳の新小舍はタルキが雪で折られ、屋根も眞中はトタンが引剝れて通風頗る自由。
七、一七　強風濃霧　滯在
七、一八　滯在
夕方散歩がてらに吹原、加賀、滋賀の人、及び人夫二名と間岳往復。
七、一九　雨
小舍（七、四五）—荒川本澤に出遭ふ（九、〇〇）—大岩下にて焚火（九、三〇）—三ツ瀧の上（一、五五）—河原にて焚火（三、三〇）—北澤落合の岩陰露營（六、〇〇）
七、二〇　雨
露營地（七、〇〇）—野呂川と荒川との合流點（一二、〇〇）—鮎差（三、二〇—四、五〇）—廣河内に入り左岸に渡る所（一〇、一五—一〇、四五）—廬倉（七、三〇）—野呂川との合流點の小舍に泊る筈だつたが、行つて見たら無か

つた。鮎差の製板所の小舎も大半焼けてゐた。

七、二一

蔦倉(一〇、〇〇)—百々(一二、四五)—甲府(二、〇〇)

有野で乗る筈だつたが仲々來ないので百々から乗合に乗つた。

△甲斐駒、白峰三山、鳳凰（第六班B）

リーダー　高瀬進三　清水達雄　外四名

人夫　牛田重義　水石寅夫　尾澤隆義

七、一七　飯田町發（後一〇、〇〇）

七、一八　雨

日野春(四、〇〇)—柳澤(六、四五—九、二五)—駒岳神社前宮(一〇、四〇—一二、二〇)—笹ノ平（二、五〇—三、一〇)—刀利天狗(五、〇〇—五、一五)—屏風小舎(六、一〇)

七、一九　雨　滞在

七、二〇　雨　滞在

七、二一　雨

小舎(九、三〇)—七丈小舎（一〇、五〇—一一、三〇)—駒岳(一、二五—一、五〇)—六方石(二、二五—二、四〇)—小松峰(三、〇〇—三、二〇)—仙水峠(四、一〇)—北澤小舎(五、一〇—一〇、一〇)—仙水峠（九、三五—九、四〇)—二一八〇mノ鞍部(一〇、三〇)—雨の爲引返す—北澤峠(一一、〇〇)—小舎(一一、二〇)

七、二二　晴後雨

小舎(九、一五)—北澤峠（九、三五—九、四〇)—二一八〇mノ鞍部(一〇、三〇)—雨の爲引返す—北澤峠(一一、〇〇)—小舎(一一、二〇)

七、二三　曇

小舎(六、五〇)—仙水峠(八、〇〇—九、一〇)—小松峯(一〇—一〇、一〇)—駒岳頂上(一二、〇〇)—七丈小舎(一二、一〇—三、五〇)—駒岳神社前宮(六、〇〇—六、二〇)—柳澤(七、一〇—八、五〇)—日野春(九、五〇—一〇、二〇)—歸京

食糧之〻く豫定を變更してアサヨ岳、早川尾根を廻ることにしたが、仙水峠の一町手前で柳澤からの人夫に遭ふ。聞けば吾々を迎へに來たといふので下山に決めた。大武川は増水で行かれないので一昨日の道を戻ることにした。

△燕槍岳方面（第二班）

リーダー　手塚晴雄　山崎久夫(如水會員)　大村健一　他五名

七、一七　飯田町發（後一〇、〇〇）

七、一八　雨

有明(八、〇〇)—自動車—有明温泉(九、〇〇)—中房温泉(一、一〇)

七、一九　雨

中房温泉(一〇、四〇)—合戰澤小屋(一二、五五)—燕小屋(二、三〇)

七、二〇　雨

小舎(七、〇五)—燕岳往復(三〇分)—小舎(七、四五)—大天井岳（九、四〇)—西岳小屋（一一、五〇—一一、一五)—殺生小屋(三、四五)

七、二一　雨

小舎(九、〇五)—槍澤小屋(一〇、二〇)—一ノ俣小屋(一一、五

七、二二　雨　滯在

七、二三　雨

清水屋（一〇、〇〇）—德本峠（一二、五五）—島々（六、〇〇）

△常例集會

七、二〇（金）

如水會館にて第三回集會を催す、學生の參加者なし。

△上高地キヤンプ（第十班）

七、二一

飯田町發、磯野計藏　中島鞍一郎。

七、二二

上高地入り。

七、二三

中島ナタで足を斬る。

七、二四

負傷のため中島、磯野人夫を伴ひて奈渡川より下山、松本へ

七、二五

吉澤一郎　村尾金二　近藤恒雄　磯野計藏　德本より上高地入り。

以後數日滯在、岳川及び槍澤に遊び下山。

七、二三　雨

手塚晴雄、如水會員山崎久夫氏、石黑四郎三人燕槍班の解散後清水屋よりテントに移る。

七、二四　雨

山崎氏歸京、石黑、乘鞍登山のため平湯へ行く。テントの中に俺一人でガンバッテて居る。

七、二五　晴

上高地跋涉

七、二六　晴

七、二七　晴

素晴らしい紺碧の空、穗高の岩壁がくつきり其の中に浮かんで居る。誰か早く來ないかなあ—。

七、二八　晴

七、二九　晴

テントの中で高山の日を受けて眞い氣持になつて寢て居る所を起された。外には中森長太郎、小川竹夫、勝田一郎、增山清太郎、新川傳助、等の烏帽子班の連中が立つて居た。

七、三〇　晴

增山、勝田、の二人乘鞍出發、小川、中森、歸京、豫科の福井外一名と專門部の立石信吉來る。

七、三一　暴風

新川、立石、驚ろいて白骨へ退却、俺と福井は歸京することにした。（手塚）

△烏帽子、槍方面（第四班）

リーダー　中森長太郎　小川竹夫　增山清太郎　勝田一郎　他一名

七、二三　飯田町發（後一〇、〇〇）

七、二四　晴

大町（九、〇〇—九、三〇）—軌道終點（一一、一〇—一一、三〇）

葛湯(一二、二〇—二、〇〇)—不動瀧(三、四〇)—濁小屋(三、五五)

七、二五　晴

小舎(七、〇〇)—ブナ立三角點(一〇、四五)—烏帽子小舎(一一、四四)

二時頃から烏帽子岳往復。

七、二六　晴

小舎(六、三〇)—三ツ岳(七、三五)—野口五郎岳(九、〇五)—眞砂岳(一〇、二〇)—赤岳(一一、三〇)—ブリモノ澤ノ頭(一、二五)—鷲羽岳(二、〇〇)—三俣蓮華小舎(二、五五—三、二〇)

双六小舎(五、四〇)

七、二七　晴

小舎(六、三〇)—樅澤岳(七、一三)—硫黄澤乘越(八、一五)—槍肩小舎(一〇、五五—一一、三〇)—槍岳頂上(一二、〇〇—一二、四〇)—大槍小舎(一、〇〇—一、二〇)—夕立に遭ふ—清水屋(八、〇〇)

七、二八　晴

上高地キャンプ滞在

七、二九　晴

キャンプ(後一、二〇)—焼小舎(二、五〇)—焼岳頂上(三、二〇—キャンプ四、三〇)

△劍、八ツ峯(第五班)

横倉吟三郎　宇佐美敏夫　磯野計藏

人夫　佐伯兵次

七、二七　晴

富山驛(六、五〇)—千垣(九、〇〇)—芦岸寺(一〇、〇〇—一一、三〇)—藤橋(一、〇〇)

七、二八　晴

藤橋(七、〇〇)—熊王清水(八、〇五)—美女平(八、四五)—ナナ小屋(九、三〇)—桑谷(一一、一五)—弘法小屋(一二、三〇—一、三〇)—追分(二、一五)—鏡石(四、二五)—室堂(六、〇〇)

七、二九　晴

室堂(九、三五)—一ノ越(一〇、二五)—雄山頂上(一一、三〇—一二、一〇)—大汝(一二、四五)—硯池(二、二〇)—別山平(三、三五)

七、三〇　晴後雨

別山平(六、五〇)—平藏谷ノ頭(八、二五)—劍岳頂上(八、五五—一〇、一〇)—平藏谷ノ出合(一一、〇〇)—別山平(一二、〇〇—一、二〇)—夕立に遭ふ—清水

七、三一　暴風雨

滯在

八、一　暴風雨

滯在

八、二　晴

別山平(七、二〇)—平藏の出合(七、三〇)—長次郎の出合(七、三六)—第一峯と第二峯との間の小雪溪の下(八、〇〇)—第一峯と第二峯とのザッテル(九、〇〇—九、一〇)—第一峯(九、二〇)—第二峯(一〇、一五)—第三峯(一〇、三〇)—第四峯(一

〇、五〇）—第五峯（一一、一〇）—
一、五二—一二、〇〇）—長次郎澤出合（一二、二五）—別山平
（一、〇〇）

八、三　晴後曇

別山平（六、四〇）—長次郎澤出合（七、〇〇）—キレット（八、二
〇）—第六峯（九、五〇—一〇、一五）—第七峯（九、一〇）—第八
峰（一〇、三〇）—第八峯の上の三窓側のピーク（一〇、五〇）—
その小雪渓の下（一一、三〇）—熊ノ岩（一一、四〇）—出合（一
二、〇〇）—別山平（一、〇〇）

八、四　晴

別山平（六、五〇）—別山乗越（七三〇）—雪鳥澤と秩父谷との
合流點（七、五五）—地獄谷（八、一〇）—鏡石（八、四五）—追分
（九、五五）—弘法茶屋（一〇、二五—一一、〇五）—桑谷（一一、
四〇）—ナナ小屋（一二、三〇—一二、五〇）—美女平（一、一〇）
—熊王清水（一、三〇）—藤橋（二、〇〇）—芦峅寺（三、二五—四
、〇〇）—千垣（四、三〇）

△乗鞍岳

七、三〇　晴後曇、強風

増山清太郎　勝田一郎

上高地（六、〇〇）—中ノ湯（七、二〇）—安房峠（九、〇五）—平
湯（九、五五）—二合目（一〇、五〇—一一、三〇）—烏帽子岳（一
二、五〇）—鶴池（二、一〇）—筒木小舍（二、五五）

七、三一　雨、強風

小舍（七、〇〇）—番所原道との分岐點（八、二〇）—エリザシ峠
（九、三〇）—白骨（一〇、三〇）

八一　曇小雨

白骨（七、〇〇）—澤人（七、五〇）—上高地（一〇、三〇）—直ち
に松本へ

△小槍（第十一班）

横倉吟三郎

八、六

松本—島々—上高地清水屋泊

八、七

上高地—槍ノ肩小屋泊

八、八

槍ノ肩小屋—小槍—槍ノ肩小屋—上高地清水屋泊

八、九

上高地—松本（時計破損の爲め時間不明）

△雌阿寒岳

八、一五

河寒湖畔—雌阿寒岳—阿寒湖畔

◎常例集會

八、一七（金）

先輩が二、三名集合したのみで第四回集會は淋しく終る。

△大雪山、及び雌阿寒岳

近藤恒雄　宇佐美敏夫　外三名

八、二一

釧路驛發

八、二二　美瑛驛―下字莫別―志比內―忠別―松山溫泉
八、二三　松山溫泉―旭岳―間宮岳―北鎭岳肩―黑岳小屋―黑岳―層雲峽鹽谷溫泉
八、二四　鹽谷溫泉―旭川驛―網走驛
八、二五　曇　網走驛―北見相生
八、二六　晴後曇　北見相生―阿寒湖畔井上旅館
八、二七　滯在
八、二八　湖畔―雌阿寒頂上―旅館
八、二九　雄阿寒岳登山　金田一郎
八、三〇　湖畔―ピリカネップ―舌辛驛―釧足驛
△大眞名子ご日光白根山
八、二三　曇後雨　上野（六、四〇）―日光（一一、〇〇）―荒澤（一一、二五）―裏見瀧（一一、〇〇）―小屋（三、〇〇）―志津小屋（五、一〇）
八、二四　雨後晴後雨　小屋（六、三五）―大眞名子（七、四五―八、〇〇）―小屋（八、三五―九、〇〇）―御澤太郎山との分岐點（九、五〇）―梵字ノ瀧（一〇、三〇―一一、〇〇）―光徳沼（一一、四五―一二、二〇）―湯元道（一二、四〇）―泉門池往復（一、一五―一、四五）―湯瀧（一、五〇―二、二〇）―兎島―湯本板屋泊（三、〇〇）
八、二五　曇　板屋發（八、〇〇）―前白根（一〇、一五―一〇、四五）―奥白根（一一、四五―一二、二〇）―前白根（一、一五）―湯本（三、〇〇）
八、二六　晴後曇　板屋發（八、一〇）―金精峠（九、五〇―一〇、二五）―菅沼（一一、〇〇―一一、三〇）―丸沼（一二、〇〇―一、〇〇）―大尻沼（一、〇五―一、四〇）―白根溫泉星田館泊（三、一五）
八、二七　晴　白根溫泉發（八、一五）―鎌田（九、一五―九、四五）―沼田（一一、二〇―一二、一七）―上野（五、一七）　勝田一郎
△八ケ嶽
九、二　上野發
九、三　小海（八、〇〇）―松原湖畔迄自動車―本澤溫泉（一一、三〇）―晝食―夏澤峠（一二、三〇）―横岳（二、三〇）―赤岳（四、〇〇）―赤岳鑛泉（六、〇〇）
九、四　鑛泉（七、〇〇）―穴山（一二、〇〇）―茅野（一、三〇）　中森長太郎、他二名

九、三　上松着（後五、三九）―寝覚床キャンプ
九、四　寝覚床（七、二〇）―上松　七、五〇）―王瀧口（九、二〇）―大又（一一、〇〇）―小梅（五、五〇）―中小屋（一二、〇〇）―田ノ原小屋（一二、〇〇）―御岳頂上（五、〇〇）―田ノ原（六、三〇）
九、五　田ノ原小屋（四、二〇）―王瀧口（七、〇五―一二、三〇）―上松（二一、一〇）―寝覚床（二、四五）
△八ケ岳
高瀬進三　岡山徳三郎　堺山清太郎
九、四　新宿發（後一一、〇〇）
九、五　小淵澤（七、〇五）―高架線（八、〇五）―二番目の切開け（九、三〇）―九、五〇）―約千五〇〇m（一一、〇〇―一一、四〇）―道に合す（一、一五）―水場（三、三〇）―編笠岳（六、一五）―權現鞍部の小舎（六、三五）
九、六　小舎（八、三五）―第一ピーク（八、五〇―九、三〇）―權現岳（九、五五）―地獄谷小舎（一一、二〇―一二、三五）―赤岳頂上（二、三五―二、五五）―横岳（四、一〇）―硫黄岳（五、一五―五、二五）―夏澤峠（五、四五）―本澤温泉（六、二二）
九、七　本澤温泉（一〇、五〇）―鞍部（一一、一三）―約一六六〇m（一二、一〇―一、〇〇）―小梅（五、五〇）―八那池（二、三〇―五、〇〇）―松原（二、一五）―八那池（二、二六）
中森長太郎外一名
△木曾駒岳
九、五　上松（後五、三〇）―徳原（六、一〇）
九、六　徳原（五、三〇）―五合（七、三〇―）八、二〇）―玉久保（一一、〇〇―一一、二〇）―頂上（一、〇〇）―宝剣岳―玉久保（一、四〇―五合（二、五五―三、三〇）―上松（五、五〇）
△常例集會
九、二一（金）
吉澤一郎氏の名古屋轉任送別會を兼ね第五回集會を如水會館に開催。横倉氏の小槍、宇佐美氏の八ッ峯の談あり。豊富な寫眞と共に夏期中の登山談に花が咲いた。
△小佛月見宴
九、二九
午後二隊に分れて淺川驛着「澤之鶴」二升を仕入れて、黄昏漸く第一壘道附近にテントを張る。本科、豫科十余名參加して折柄の細雨に月の影も姿も見えぬにかゝはらず一同大いに飲み且食ふ。
九、三〇　午後雨の中を新宿へ
△丹澤山塊縦走
近藤恒雄　中島嘉一郎　金田一郎

一〇、一四　曇後小雨
興瀬着(七、三〇)—道志川渡渉晝食(一一、〇〇—一二、〇〇)—長野(一、〇〇)—焼山(三、〇〇—三、三〇)—井戸澤小屋跡露營(四、一〇)

一〇、一五　雨
小屋跡(八、三五)—原小屋分點(九、四五)—蛭岳(一一、〇〇—一一、三〇)—丹澤山(一、一五—二、一五)—塔岳(三、〇五)—澁澤驛(六、五五)

道志川は橋が流失してゐるので渡渉。原小屋澤分點の手前に左側に小屋がある。又原小屋澤への道を行けばクロガマの小屋及官行造林小屋がある由。前者は三町後者は六町位との事なり。地藏澤の小屋は今はないとの事だ。井戸澤の小屋も本年の三月登山者が失火してないので自分等は假小屋を急造したが、姫次原を越えて下り切つた處にある小屋か、原小屋澤の造林小屋、又はクロガマの小屋に第一夜の宿泊所を求めた方がよいと思ふ。蛭岳の手前四十分位の處及び鬼ヶ岩と不動峯との鞍部にも小屋がある。丹澤頂上の小屋は來年迄は持こたへないだらう。

△常例集會
一〇、一九(金)
第六回集會を五十嵐數馬氏の上京歡迎會を兼ね開催。

昭和四年二月十日納本
昭和四年三月一日發行

本號編輯責任者
中島嘉一郎
手塚晴雄
金田一郎

發行者　中島嘉一郎　東京商大山岳部内　定價　八拾錢
印刷者　中村守雄　東京市神田區三河町一丁目七番地
印刷所　東京旭印刷株式會社　東京市神田區三河町一丁目七番地
發行所　一橋山岳部　東京商科大學内

春・夏・冬山の道具！

テント・ザイル・ラテルネ

夏スキー・リュックザック・等・等



山岳スキー

美満津製

合名會社 **美満津商店** 東京・本郷前 赤門

電話（小石川）㊦八四五・二〇七一



スキー靴と登山靴

比無全
牢完
堅水防

東京市本郷三丁目交叉點

太田屋靴店

電話小石川四七一二
振替東京六一二七

スキー靴

弊店獨特ノ製品

登山靴



優美堅牢
完全ナル防水

スキス製 {トリコニー / クリンケル}

東京市牛込區肴町六十番地（電車通）

津布久

（振替東京四一八八四番）

斯界の専門家指導の下に

都下唯一

天幕

リユックサック

専門製作

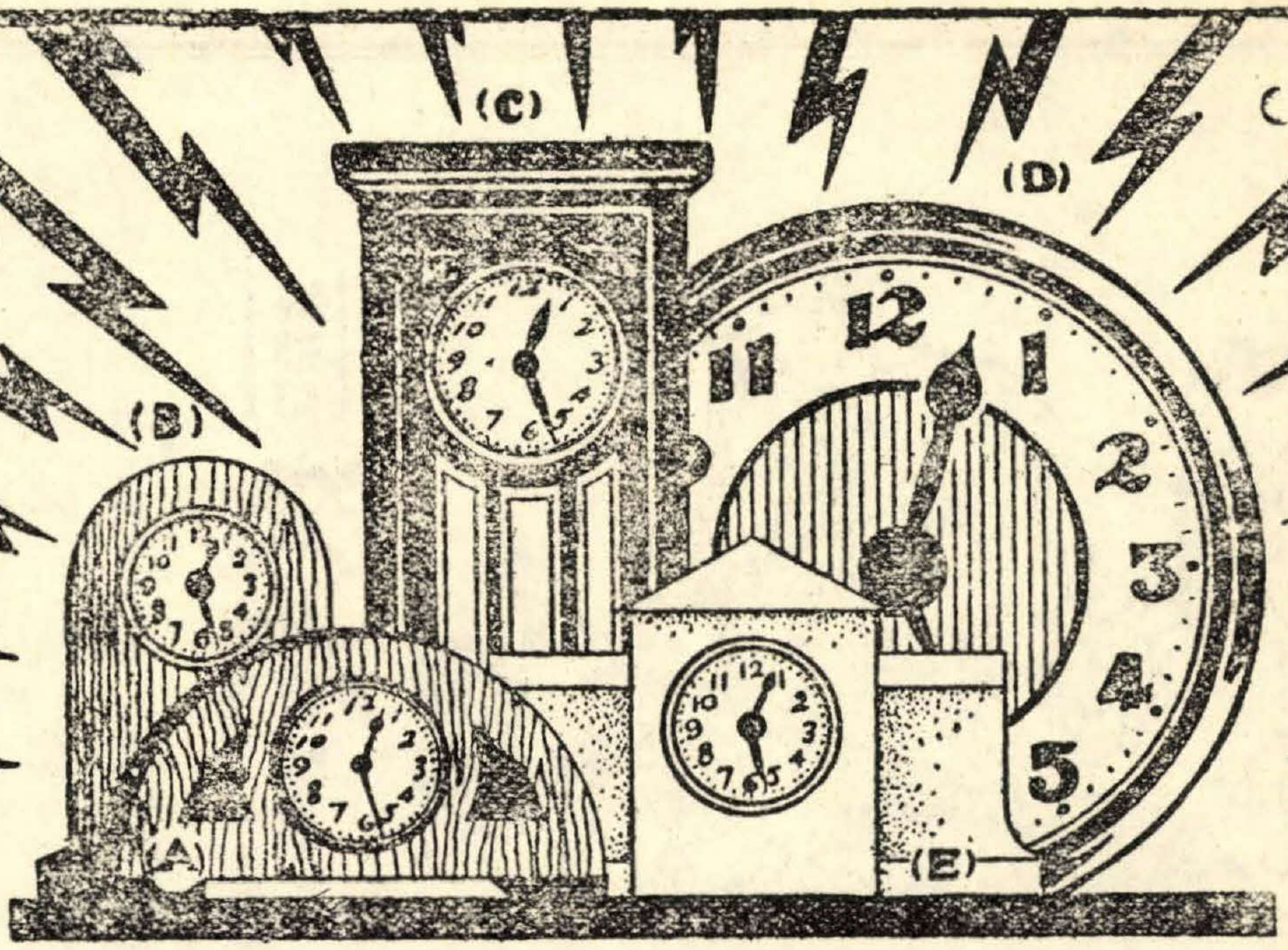
店

!!!

京橋區新富町三ノ二

片桐商店

電話(56)二〇一三



ナゼ電氣時計は狂はないか？

（1）彈機よりは電力の方が機械の動作を均齊にする故に！

（2）短時間しか機械を動かす力の無い彈機よりは長期間（少くも二年間）原動力を持續する電力の方が機械の各部の動作を圓滑にし且つ和らかにする故に！

（3）時計の狂ふ最大原因は當然免ぬかるべからざる彈機を卷く時の不正確と卷き方の强弱の不均等であるが、電氣時計は電力の方から免かれるが故に！

官公衙學校病院、個人の親時計に數個乃至數十個の子時計を配するプリエ式又はブウル式電氣時計の家庭小事務所には單個のアトウ式電氣時計を準備して時間の規律を正しくし生產或は事務の能率を增進するを得。

佛國製 アトウ式 電氣時計

（A）木製マホガニ塗置時計 價貳拾八圓
（B）木製マホガニ塗置時計 價參拾圓
（C）木製仕上スリゲル掛時計 價五拾五圓
（D）金枠黑塗十吋丸掛時計 價參拾六圓
（E）大理石置時計 價五拾五圓

◇此の他新意匠の優秀品多種新着・型錄御申越次第送呈

プリエ式親子電氣時計（子時計十個乃至數十個附）

詳細は御申越次第型錄及見積書送呈

納入先一部

◇富士製紙會社 ◇第一徵兵保險 ◇外國語學校 ◇府立工藝學校
◇東洋紡績會社 ◇宗吾靈堂 ◇國民中學會 ◇明正小學校
◇松屋呉服店 ◇市田商店 ◇府立第三中學校 ◇番町小學校
◇日本酸素會社 ◇麹町區役所 ◇上六小學校 ◇早稻田小學校
◇青山病院 ◇赤坂區役所 ◇麹町小學校 ◇學習院
其他三百有餘

合名會社
天賞堂本店
東京市銀座尾張町
日本橋支店
大阪支店



旅行、競技、登山などにて

起り易き内外の病傷手當てに必要な藥品と繃帶材料を取揃へたる優美なるポケット小函

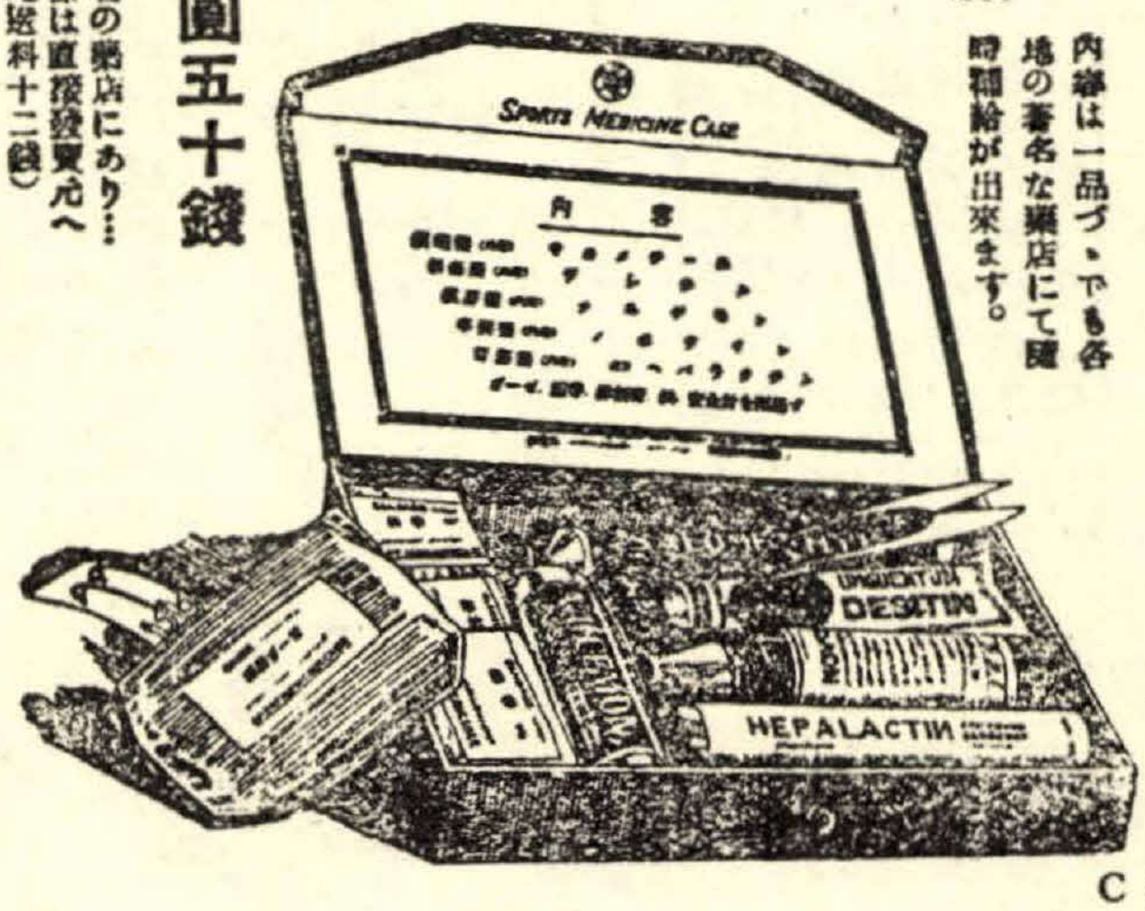
スポーツ救急函

日本及獨逸製高級製品のみを

クロース小函に納め……

一組……正價 金三圓五十錢

各地著名の藥店にあり…
品切の節は直接發賣元へ
（內地送料十二錢）



內容は一品づゝでも各地の著名な藥店にて隨時補給が出來ます。

醫師の來るまでの應急處置に
旅行の安全を保障するために
小さき病傷の手當てに……

その用途は頗る廣く、醫師諸氏より常に多大の推奨と好評とを博して居ります。



サロメチール

—發賣元—

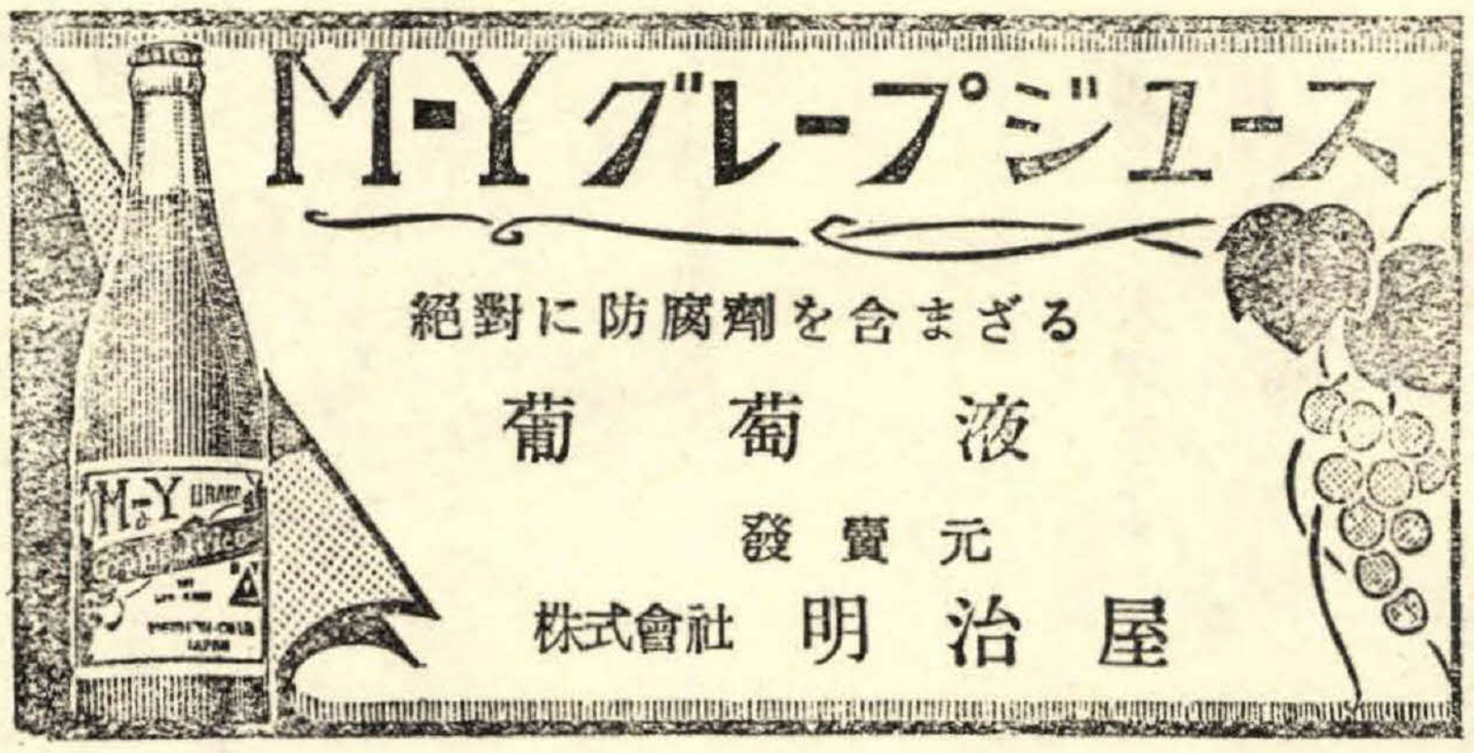
東京市日本橋區本町四丁目

株式會社

田邊元三郎商店

振替東京一六六三番

C 15



寫眞

密着燒は單にスケッチに過ぎません引伸してこそ寫眞の面白味が出るものです。引伸は特に當店の得意とする所一度御試しを。親切叮嚀迅速に致します。

——機械・材料・現像・燒付——

親切●丁寧●迅速に致します

神田 **宏盛館**

神田區通神保町二
電神(25)一三九六



リビー コンドビーフ

全國信用ある和洋酒、食料品店にあり御買求を願ます

今日は 新妻の大好きな
リビー コンドビーフをうんと
買ひ込んだ
早く歸つて 喜ばせて
やらうかな

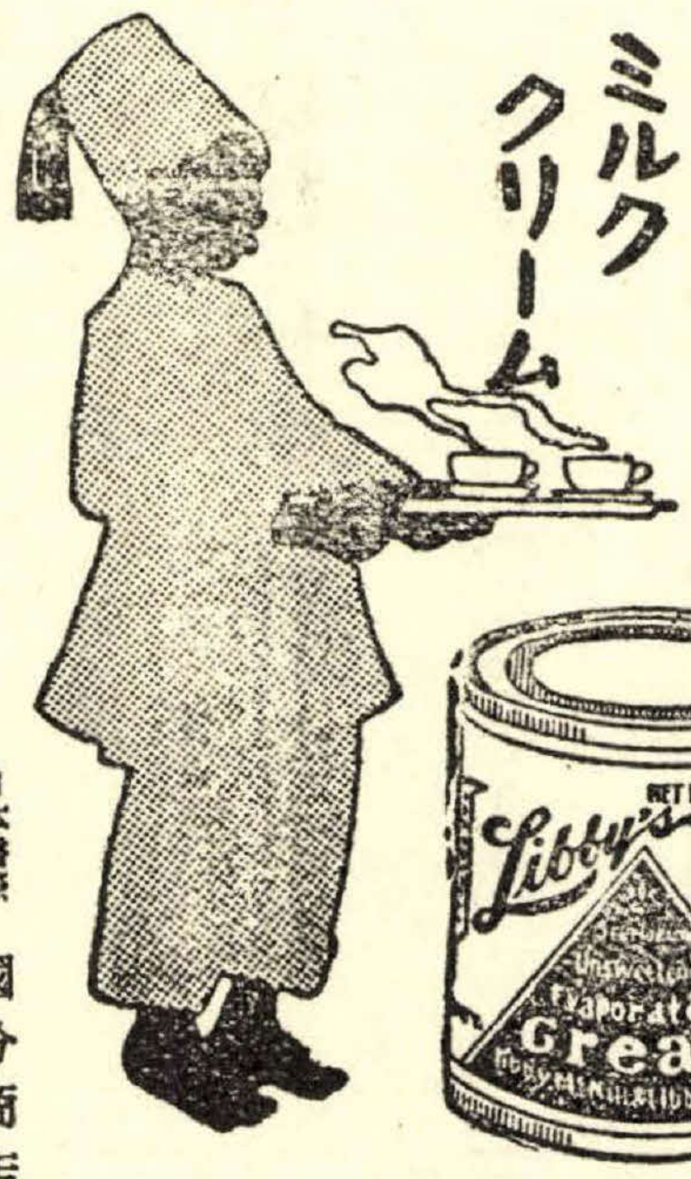


元賣發
日本橋際 國分商店 社會名合
貿易部

世界の優良品

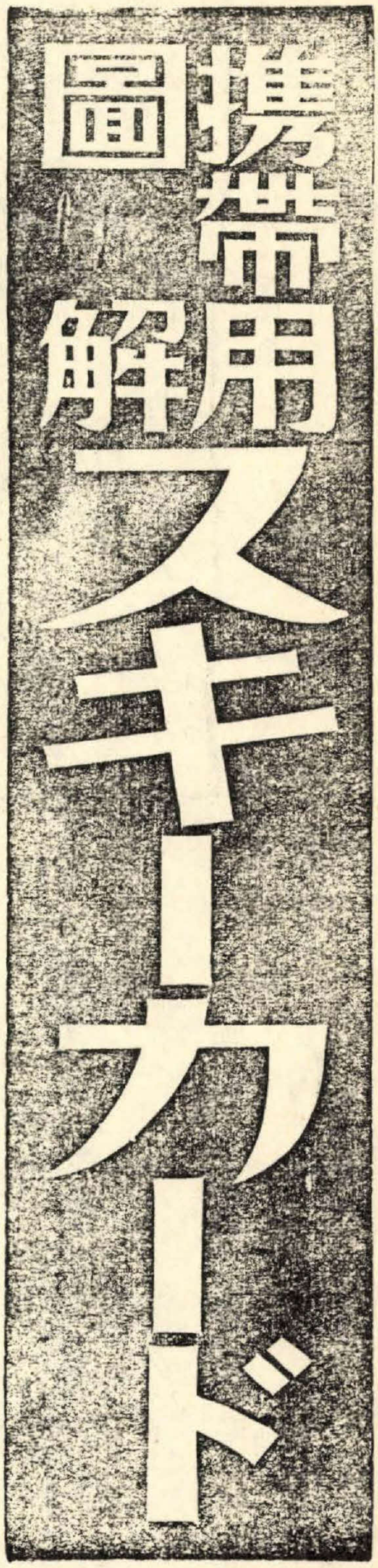
コーヒー紅茶に

リビーの
ミルク
クリーム



日本橋際 國分商店

最新刊



工學士 黒田正夫先生著

△三六判袋入
△カード十四頁　圖解十八個
解説書一冊附　金五拾錢

（錢四金料送）

◉便利で重寶なる本邦唯一のスキーカード既る!!!

ウインタースポーツの典型スキーヤーの福音

ヴイウイアン・コールフイル氏のスキー廻轉やその他全世界スキー權威者の名著を一部のインテリゲンチヤの獨占に委ねることは罪惡であるを慨する著者はこれ等の著者に更に進歩した凡ゆる方法を錬り加へて、之れをその實演の際ポケット携帶出來るやう簡單なるカードとして便ならしめ更にそれが明快なる解説をなせる別冊を附してある。本邦での最新唯一の寶典であるばかりでなく、スキーを愛好するあらゆる方々に貢献する事を信ずるものである。運動家の此の冬を！此の書で有意義ならしめて貰いたいものである。

理學士 五代正友先生著

スケーティング

四六判△定價一圓三十錢
全一冊△送料十錢

笹川速雄先生著

スキーイング

四六判△定價金二圓也
洋布製△送料十錢

東京市京橋區南傳馬町二丁目

振替第八二口座東京九番

發行所 日黒書店



多年の熱心なる研究的製作の結果

輕快な競技用スキー……
健實な登山用スキー……
安價な練習用スキー……

總て外國品に劣らぬ確實なスキーが出來る様になりました。
是非一度は御試し下さい。

越後長岡市學校町

小島吾作スキー店

上野驛より草津温泉驛まで九時間

爽快なる緩急斜面豐富



草　津　温　泉

大阪屋旅館

—低廉親切—

スキーメン、登山家を歡迎す

- 奥上州の未知の山々へ
- 野反池附近へ
- 澁峠を經て澁温泉へ
- 横手山は眺望無比
- 草津白根へは一日のコース
- 花敷を經て四萬へ

夏は絶好の避暑地
冬は痛快なスキー場

全富 完豊 備量 設湯

上野驛夜行に乘車信越線豊野驛



乘換飯山線上境驛下車徒歩一里

内湯

酒屋旅館

信州野澤温泉

（電話十八番）

日歸行樂一泊探勝

靜養湯治の好適地

相州箱根底倉溫泉

高山園 蔦屋旅館

電話宮下一

三七五

七六四六

番番番番

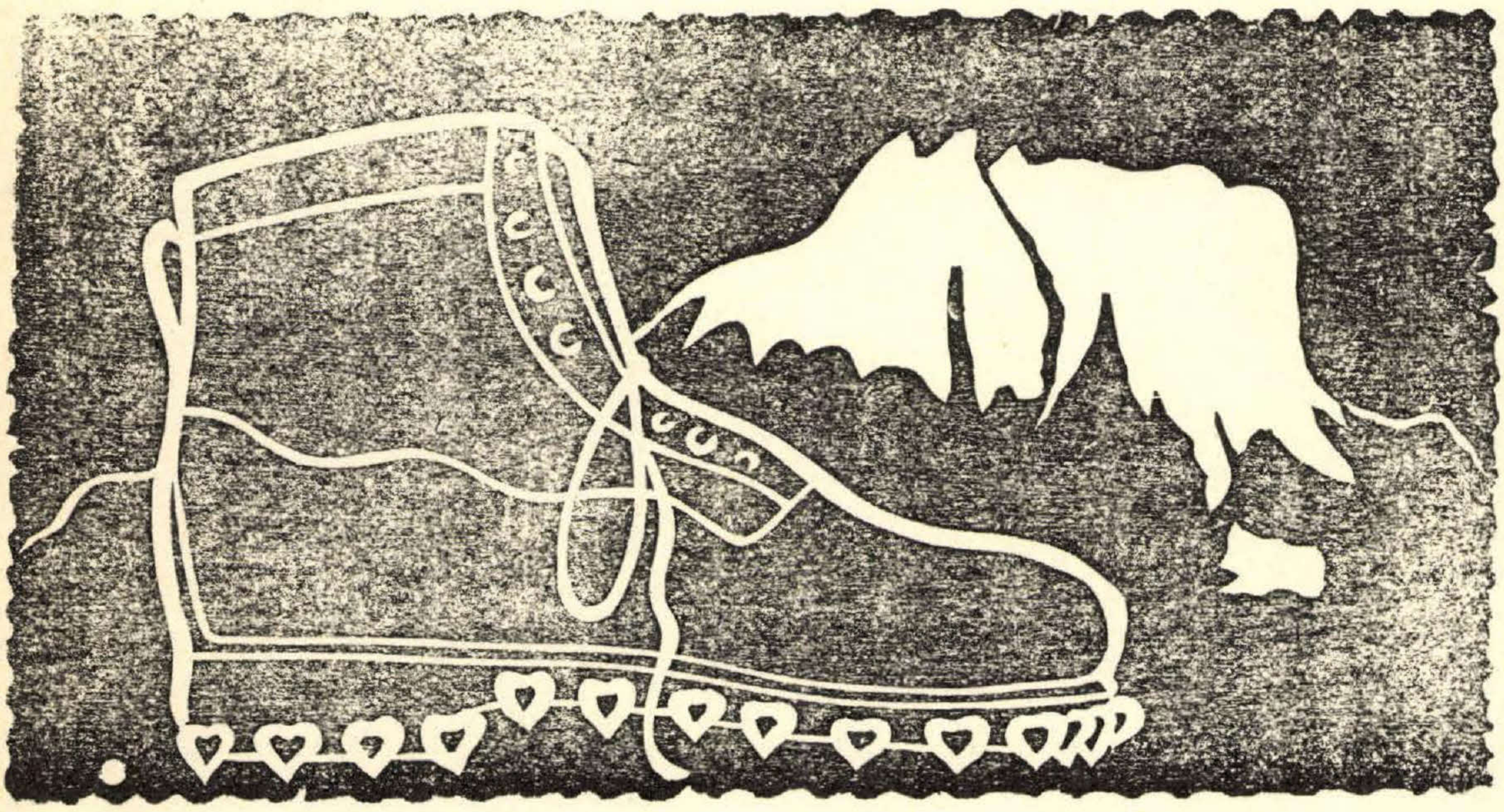
（茶代謝絕）

秩父宮殿下
高松宮殿下
竹田宮殿下
北白川宮殿下
山階宮殿下

賜御用命

於大禮記念國產振興東京博覽會

國產優良賞牌受領



登山靴とスキー靴

——御申越次第カタログ贈呈——

山崎靴店

東京四谷大横丁角

妙高山麓の高原について
理想的なスキーゲレンデ
スキーを初めてお穿きの
方々にも經驗者にも
絶好のスロープ
温泉は天下の名湯

信越線田口驛妙高温泉
内湯　石田旅館
電話二番

同　池ノ平温泉場
同支店
内湯　妙高閣

なだらかな雪原と
鋭い妙高の峯が
皆様をお待ちして居ります
冬の赤倉は
雪の子の踊り場です

妙高山麓赤倉
赤倉ホテル

杜の灯

高田へ

の影へ

高田スキー館

電話九六〇番

貸スキー
乾燥場
玉突
浴場完備

（學生諸君ハ特ニ優待）

夏は避暑
冬はスキー

一度來た人は其の味を
忘れる事が出來ません

上州
谷川溫泉
谷川館

お出の節は是非お立寄り
下さいませ。
お待ちして居ります。

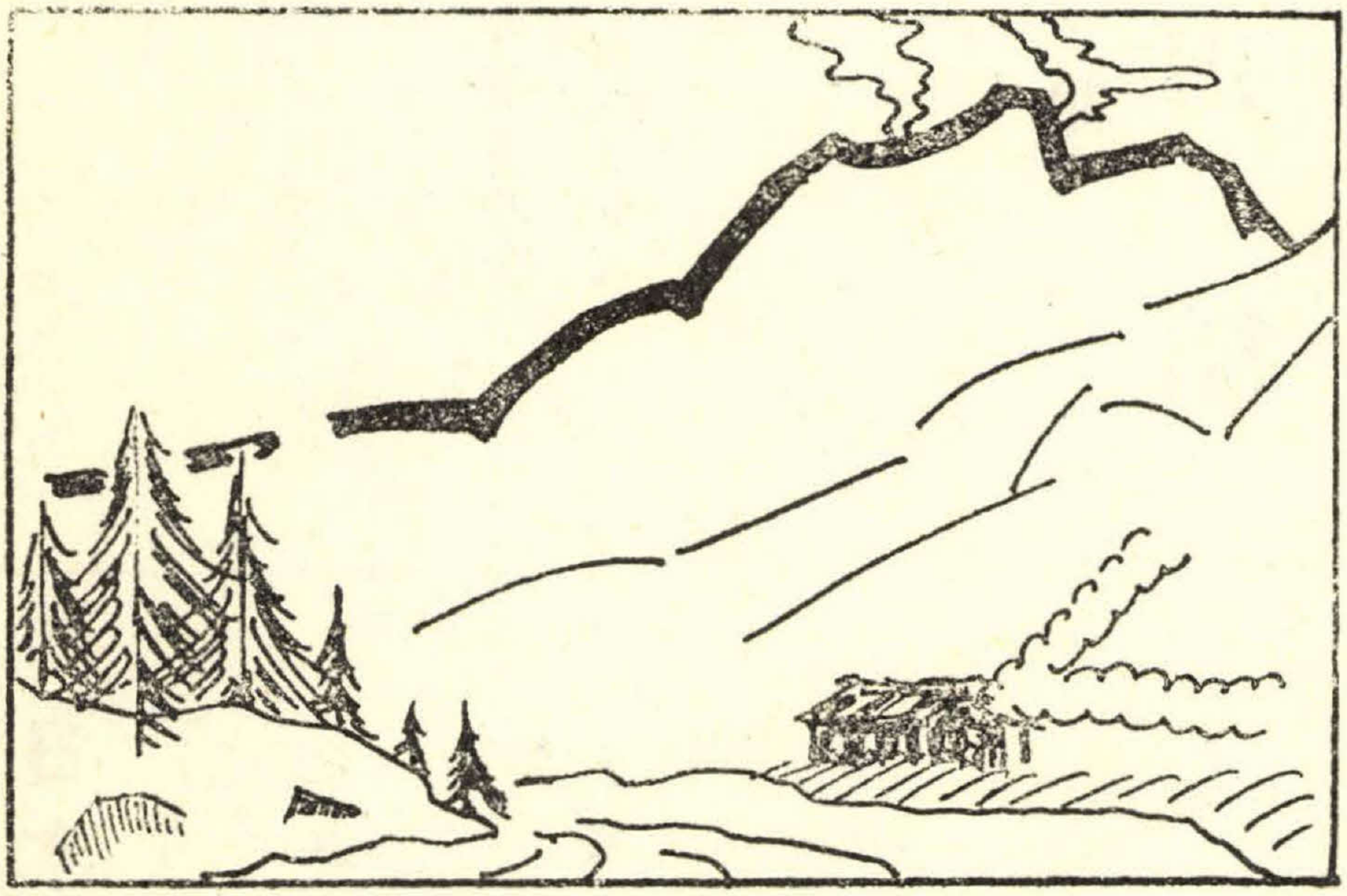
日本北アルプスへ

松本驛前角
鐵道省御指定
飯田屋旅館

電話 市外 二七番 一六番 二四番

上高地温泉

清水屋



登山の民衆化

と

安慰低廉の温泉宿

前穂高岳一日で往復●霞澤岳燒岳は半日で往復

南アルプスの赤石岳

残雪に輝き
朝な夕な
大河原の町を彩る
アルピニストの憧憬の山へ

絶好の根據地

丸川旅館

長野縣下伊那郡大河原

奥日光縱走の第一夜は

日光湯元温泉

鐵道省指定

板屋旅館へ

（尾瀬沼、菅沼、九（噴泉塔、八丁の湯、白根山沼等の大勝區の門戸）

清き溪流幽翠なる山々の

鹽原温泉に

豊かなお湯と、設備の完全とを誇る

塩原探勝の皆様の御宿

栃木縣鹽原温泉

磯屋旅館

帝都水源地帶及奥多摩山岳
大菩薩峠甲武信國師岳方面　登山仕度所

中央線鹽山驛ヨリ七丁
甲斐名勝鹽の山麓（青梅街道）

大菩薩峠山彦會　設置　内湯

鹽山支部　別館

鹽山ホテル松泉閣

電話十六番



針葉樹　第三號

主要内容

黒部川下廊下を見る　田中薫
一月の熊野湯附近　吉澤一郎
白根越え　矢作太郎
三月の針の木谷と立山越　吉澤一郎
鹽見より赤石へ　芋川稔一
北海道の旅　近藤恒雄
霧ケ峯立科山　手塚晴雄
横岳　金田一郎
別れに送る言葉　高木英二

第三號（昭和二年十二月發行）殘部若干ございますから御希望の方にお頒ち致します。約二百頁

定價　一圓五十錢　送料八錢

東京神田一橋　東京商科大學内
一橋山岳部

¥1.80

登山家とバレー

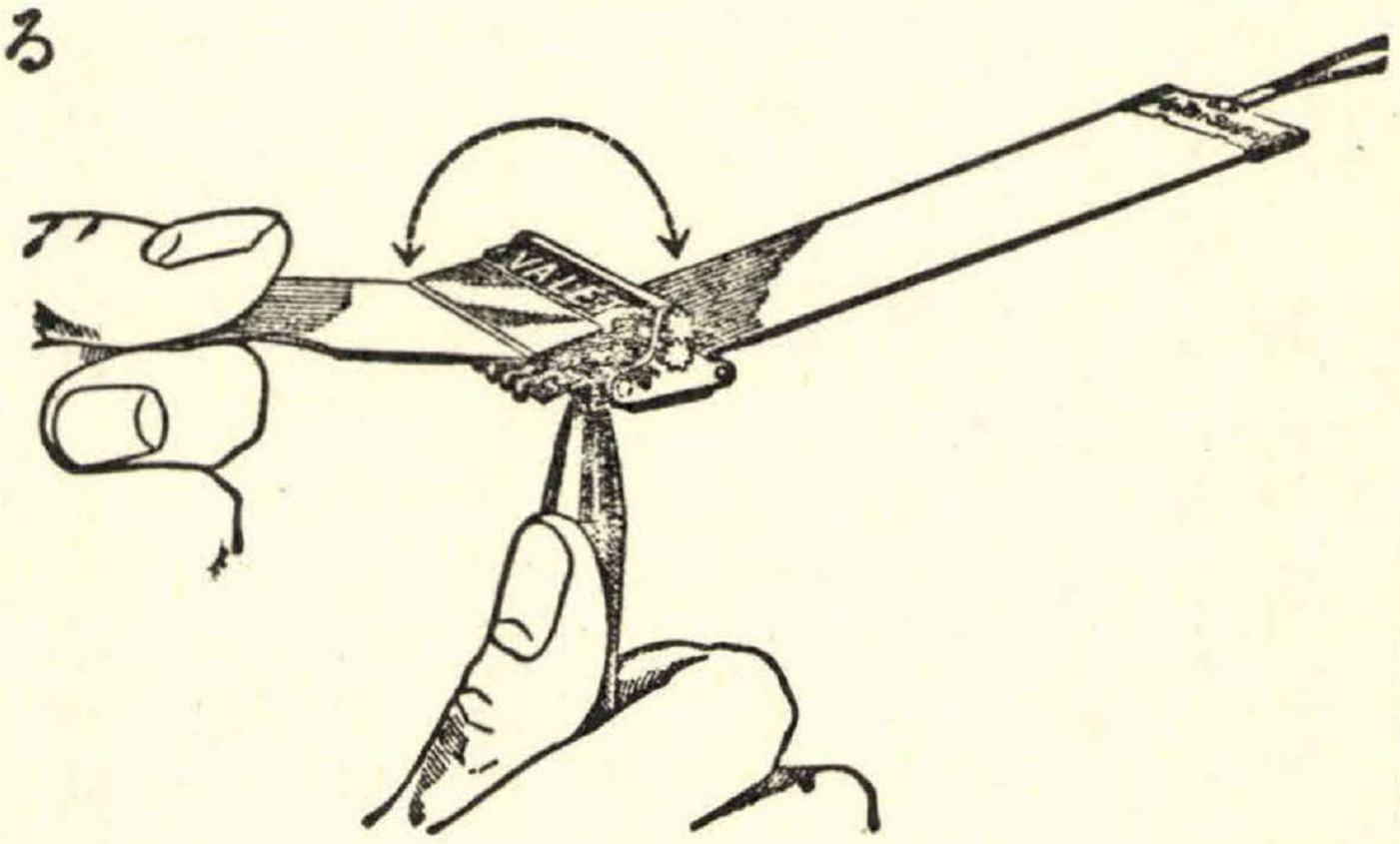
革砥でちよつと木の枝にかけて十秒も研げば立ち所に切味が出て僅か數分間で、剃る、つるつる奇麗になる、しかも一枚の刃が半年も使用出來るのですから、全で登山家の爲めに作られたものゝ様に輕便で經濟で、今では登山家のリユックサック中に缺いては ならぬ必需品となつて居ります。

（大百貨店著名洋物雜貨金物店等で御求下さい）

剃刀で研器を兼ね一枚の刃が半年使へる

バレー自働研安全剃刀

C型一圓八十錢以上
B型十三圓五十錢以上



"VALET"
Auto Strop
Safety Razor

1．本書は，東京商科大学・一橋大学一橋山岳部々報『針葉樹』第１号～第13号の復刻版（限定100部発行）である。

2．本書の第１号～第６号は近藤恒雄氏所蔵本に，第７号～第13号は一橋山岳部所蔵本にそれぞれ原本を求めた。

3．復刻版発行の経緯は第13号の巻末に附したのでこれを参照されたい。

『針　葉　樹』第４号　復刻

昭和60年７月25日発行

復刻版発行者　針　葉　樹　会

編纂担当責任者　佐　藤　久　尚
世田谷区船橋５-30-10

印刷所　㈱　平　文　社
豊島区南大塚２-35-７



雪の猛者に初日輝やく

◆スキーの御用は三越

雪は山々に輝やきに爽快なるスキーのシーズンとなりました。三越では、瑞西芬蘭のスキー用具を初めとし、スキー服装品など深山に取揃へました。何卒御用命の程願上げます

三越

◆東京日本橋◆

尚スキー附屬品としてのステッキ、ビンデング、靴等を初め冬季登山用具としてのザイル、リュックサック、カンジキ、アルペンストック等、其他服裝附屬品としての帽子、スエター、ネクタイ、ニッカーホース等二階東館運動具賣場に取揃ました